
駆けろ、姫に賭けろ！

友絵少尉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駆ける、姫に賭ける！

【Zコード】

Z0037Y

【作者名】

友絵少尉

【あらすじ】

近未来の日本。少女たちのあいだに“魔導少女症候群”と呼ばれる病気が流行していた。発病した少女は、“魔導少女”と呼ばれ、魔法の力を発揮、制御できないこの力により、周囲に破壊をもたらしてしまう。事態收拾のため、国家に軍政が敷かれ、軍政異端審問局が法務省の外局として設置された。魔導少女を治癒するためには、その魔導エネルギーを消費させつづけるしか道は無い。このため少女たちを極限まで追い詰めるためのレースが考案された。“魔導少女迎撃競技杯”（インターチェプション・カップ）である。少女たち

を追い詰めるべく、人工の魔導エネルギーが開発され、少年たちに与えられた。人工の魔導少年の誕生である。かくして今夜も、魔導少年が、魔導少女をレースマシンで追い込み、彼女らのマシンを撃破する過酷なレースが始まった。魔導少年の中学生マミヤは、日中は中学に通い、深夜になると審問局の異端審問獵騎兵として少女迎撃に動員される日々を過ごしていた。彼は初陣、第一戦とレースを連続圧勝で飾った元エリートだった。その後なぜか敗戦を重ねつづける彼は、ある日運命の美少女と出逢うのだった。“魔導の姫”と呼ばれる美少女と。

魔導少女狩り～深夜の首都高速～

少年の騎乗した魔導二輪装甲車輛は、時速三〇〇キロメートル超のスピードで東京、首都高速環状線を疾駆していた。

装甲のボディカラーはサーキットブルー。

車体は流麗なエアロフォルム、

それでいて武装をもつが故の無骨さを兼ねそなえたシルエットだ。ヘッドライトのハイビームが前方の闇夜を切り裂いてゆく。

現在、魔導爆燃機関^{アーテルハイド}の出力は毎分、

三万一二六五魔導力場展開を記録、エンジンシステム異状なし、重力波制御システム異状なし、

各種武装、火器管制システムやはり異状なし。

全システム、オールグリーン。

コクピットのコンソール、分厚い超硬化透明プラスティックのウインドシールドに守られて、

魔導メーター、スピードメーター、各ディスプレイのモニタ画面がそう告げてくる。

オールグリーン。だから、狩れ、と命じられているかのようだ、マシンに。

今夜こそ、魔導少女を狩れ、と。

ほんとうにマシンが命じてくるかのように、

フレッシュヤーを『えてくるかのように、少年はそんな錯覚すら憶えた。

軽く頭をふつてみる。

第二次世界大戦時のナチス・ドイツ軍を彷彿とさせる形状のフリツツヘルメット。

十五歳のまだ華奢な少年にはその重量が頸に重く感じる。けれどその両眼には爛々と燃える光が宿っている。

蒼白の光だ。

魔導爆燃機関の内部で爆発、燃焼している魔導エネルギーとおなじ色の光だ。

走行中に本部からビデオ通信のコールが鳴つた。

ディスプレイに男の顔が映しだされる。

整えられた優雅な白髪の持ち主だった。

『軍政異端審問局よりマリヤ曹長へ通達、マリヤ聞こえるか私だ』

『はい大佐』

『今夜こそ戦果を上げろ、魔導少女のホウキをへし折つてやれ』

『了解しました（アイ・サー）』

『まったく貴様は返事だけは一人前だな』

大佐は苦々しくいい捨てるど、ターゲットの？魔導少女？の現在位置を送信してきた。

それに彼女の戦績も、その子の騎乗する魔導一輪装甲車輛の主要諸元、魔導少女迎撃に必要な情報のすべてが開示されてくる。

極秘情報　　彼女の名前、年齢、住所などの個人情報。それ以外のすべてが。

ターゲットの魔導少女は、今夜が初陣だった。

軽い相手、のハズだ。

思念を集中する。

少年の、マミヤの意志に呼応して、魔導爆燃機関の回転が徐々に上昇してゆく。

出力、三万一〇一九アーデルハイド、三万二一一五……、三万二一三。

『マリヤ曹長つ、なんたるザマだ？　一六戦目にもなつてまだそれしか出せんのかつ、

今夜敗北すれば貴様どうなるか分かつてているんだろつなつ？　大佐が罵声を浴びせてくる。

いつものことだ、聞き飽きた叱責の言葉を少年は受け流した。

午前三時過ぎの東京の街、マリヤ以外首都高速に車影は、無い。警視庁交通機動隊と軍政異端審問局の合同部隊が交通規制を敷いてくれているからだ。

防弾仕様の前輪がアスファルトの路面を抉り、白煙を後方に残しながらマシンが奔る。

魔導少女のマシン迎撃、そのための専用魔導二輪装甲車輛、ヤークトフント通称獵犬。

いまスピードは時速三四〇キロメートルほど、重力波の干渉を周囲に与えながら、老朽化してすでに久しい首都高を駆けぬけてゆく。

眼前にひろがるのは、快晴の暗闇の空。

突風が、時速三四〇キロで疾走するマリヤとヤークトフントに殴りかかる。

彼の全身に空気が喰らいついてくる。痛くはない。痛覚は麻痺しているからだ。

重力波を右側面へ散布する。

同時に重心移動、マシンを寝かせ、右コーナーに突入する。

重力干渉を受け、対向車線のむこうがわ、

首都高の強固な遮音防壁が波打つて震動していった。

魔導の発する力を借り、右に吸いよせられる感覚になる。

まるで右半身が、何メートルも離れた遮音防壁と癒着したかのようだ。

さらに急減速、時速一〇〇キロまで落としてからうじてコーナーを曲がる。

ふたたび加速をかける。

彼のヤークトフントが江戸橋ジャンクションを通過、コーナーを曲がりきり、直線コースへ。

ヘッドライト、強烈なハイビームが路面と前方とを照らしだす。遙か前方、見えてくる。

魔導少女の駆るマシンのシルエットが見えてくる。

マミヤ少年の駆るヤークトフントが、ついに魔導少女のマシンを
目視内射程に収めた。

火器管制システム、作動。

ヘッドマウントディスプレイの片眼鏡が自動操作で右目を覆つて
ゆく。

射程距離四〇メートル、ターゲットのマシン、時速一六〇キロで
走行している。

ヘッドマウントディスプレイに覆われた右目に、レディックル 目盛状格子が投
影される。

加速にのみ使ってきた魔導エネルギーを攻撃にふりわけるときが
きた。

減速して、一〇ミリ機関砲に装填された呪法弾にエネルギーの充
填を開始する。

火器管制システムの充填完了のシグナルが鳴ると同時に、
前輪をガードする正面装甲板左脇の一〇ミリ機関砲をフルオート射
撃した。

重厚な発射音、同時に空薬莢が排莢され路面にぶち撒かれてゆく。
魔導少女も負けてはいない。

おなじく減速して、拡散重力場を後輪後方へ展開、
呪導爆雷を四発、路面に投下すると彼女は一気に加速をかけた。

逃げ切りを図るつもりだ。

マミヤは一転、エネルギーをまた加速にふりむけながら、
左右へハンドルを切る、ハイビームの光のなか、爆雷が乱舞してき
た。

一発目を右にかわし、二発目、三発目、

そして四発目の爆雷をかろうじてやりすゞす。

すぐ後方ほんのコソマ数秒の差で、爆雷が起動した。

首都高速線上の大爆発、立てづづけに四回だ。

ヘルメット越しに爆音とアスファルトの焦げる不快な匂いに襲わ
れた。

魔導少女は必死だ、逃げ切るしかない彼女にとつて必死の、
これは？競技会？だ。

「「めんね

マミヤは自分でも気づかないいつに、つぶやいた。

機関砲を再び連射した。

敵の拡散重力場に妨害され、弾道が曲がつてゆく。
それを計算に入れたうちの一発、ターゲット後部装甲に一発命中
した。

相手のマシンが黒煙を吹き始める。

加速がやんと、徐々に距離が縮まつてくる。

なおも魔導少女の駆るマシンが逃げる、必死に。

ヤーハークトフントとは車種が異なる、逃げ切ることに特化した魔導

一輪装甲車輛。

ヴィルトカッシュ

通称、山猫。

六万アーテルハイドは叩きだしているかも知れない。

それぐらい後部の四つの排気口から蒼白く美しい光が残光を残し
伸びている。

魔導エネルギーの光、それは魔導爆燃機関のまだ生きている証拠
の光だ。

マフラーのついていない排気口、

マシンの叫び、魔女の悲鳴が深夜、首都高に鳴り響く。
時間がもう無い。

少女が京橋ジャンクションで右に曲がりつとして、車線変更して
くる。

それを見越して、また呪法弾をフルオート連射、外した、わざと
外した。

外した砲弾はターゲットの装甲板の左をかすめ、飛翔、
どこまでもつづく首都高の防護フェンスに直撃、爆発をおこした。

呪法弾の残弾はすぐない。

あとは強力だがしかし、操作に強い思念集中を要する？呪法誘導ミサイル弾？があるけれど。

少女が京橋の右コーナーを曲がる直前、
そのミサイル弾が蒼白い魔導力の光を放ちながら、マミヤの後方から猛スピードで飛翔してきた。

彼の右脇を素通りしていった。

ターゲットの少女が曲がったところでシルエットが目視内から消える。

ミサイルが追尾してゆく。

爆発。

コーナーから直線に変わるあたりの路上、大爆発が起きた。

呪法誘導ミサイル弾がターゲットのマシンを、ワイルドカツエ山猫を撃破したの
だつた。

マミヤが火器管制、ディスプレイを解除、右後方モニタを確認する。
別の魔導一輪装甲車輛が、ヤークトフント同僚の獵犬が走行していた。

スピードを上げ、マミヤのマシンにぴたり、並走してくる。
ボディカラーはムーンミストグレー、相手から通信が入ってきた。
『減速すれば？ もうすぐコーナー曲がって弾着地帯に突入するよ』
なんとも軽い口調、放課後に学校の課題をひとり先に片づけ、余裕を見せてくる生徒の聲音だつた。

首都高速の悲鳴

一騎のヤークトフントは減速して、京橋のコーナーを曲がった。光景は無残だった。

魔導少女の騎乗していた山猫^{ヴァイルトカツシロ}、大破して路上に残骸を晒している。装甲カラーは派手なハーベストゴールド、その装甲板の欠片が首都高のLED照明に照らされ、虚しく光っている。

ふたりの獵犬たちが急停車した。

マミヤは騎乗したまま、魔導少女を、路上でへたりこみ、肩を震わせている少女を見ていた。

ヘルメットのバイザー越しに見える少女は、中学生くらいだろうか？十五年次生　中学三年生　の自分とおんなじ？

すこし若いか？十三年次生か十四年次、そのあたりに思えた。

右のマシンに騎乗した大柄の少年はつかつかと少女にむかって近づいていった。

彼も、魔導少女も、ほぼ同じ服装に身を包んでいる、マミヤとおなじだ。

それはまるで極薄のウエットスーツのような、全身のシリエットを、ぴたり、露わにしてくる防護服だった。

薄く軽い、それでいて対呪法、対爆、抗弾、対NBC兵器の性能をもつ優れものだった。

魔導防御兵装^{マギアパンツァー}。一般にはパンツァーと略して呼ばれている。

魔導少女のパンツァーは炎に翻られ、若干の機械油やスス汚れが付着しているだけだった。

背の高い獵騎兵は少女にむかって、

「軍政異端審問局の定める法令に基づき、君の体表面の視診を執行する、君にはすべての個人情報を秘匿する権利が与えられている、僕は、君に関する知り得た情報の一切を漏洩しないことを宣誓する……ええっと、時刻〇三二一、異端審問宣誓を終了、つと

少女は震えながら、睨め上げてきた。

ヘルメットを乱暴に脱ぎにする。

主に見捨てられ、路上に点々と転がつていった。

可愛らしい、可憐な少女の貌が現れた。両の瞳からは悔し涙を流している。

美しい金色の髪、青い瞳の白人の少女だった。

光っていた、少女の両の瞳も、蒼白に、元から青い瞳は、むらこ
蒼白に輝いていた。

三人とも、おなじ色、魔導の色だ。

同僚の少年は、ヘルメットのバイザーを跳ねあげてからじっくり、少女の顔を見て、胸のふくらみのシルエット、それから下腹部、股、なめらかなラインを描く太ももまで、順繰りに凝視していった。嫌な目つきだった。極薄のパンツァー一枚を隔てた、その下の少女の体を透かし見ているかのような目つき。

彼は右の手首に巻いた極薄型の吸着式タブレットタブレット・タブレット端末とにらめっこを始めた。

開示された情報をチェックして、

「ラツキーッ」

さもおかしげに口笛を吹いてきた。

「おじつ、マミヤツ」の女の悪魔の紋章、左のおしりにあるぞつ

「そつか」

「おじおい、なんだよつ喜べよつ、女のナマケツが挿めるんだぞつ
そつこつて、

「さあ、マギアパンツァーを全部下ろすんだ、おしりが見える位置までね、あつ僕は鬼じやあないから、つしろをむきながらで構わないよつ

少女は何度も体を震わせながら、ようやく立ちあがつた。慣れた

日本語で、

「……ワタシ、これが初陣で、だからたつた一試合で紋章が消えるとは思えないよつ

敗れても決して屈しない、そんな声で激しく訴えてくる。

「たしかにそのとおりだね、紋章はかんたんには消えない、君のビヨーキはすぐには完治しないんだ、だから見せてくれないか、君のおしりをね」

「でもつ」

「脱ぐんだ、僕は容赦しないよ？」

少女は屈辱に唇を噛みしめ、それから田元をぬぐい、彼をじっと睨んだ。

うしろをぐるり、とむいて、右手首の吸着式タブレット端末を作する。

愛騎とおなじハーベストゴールドの色をしたパンツァー、胸の前が上から、ふつ、と左右に開き始めてゆく。

彼はいてもたってもいられない、そんな様子で密着度を喪失したパンツァーの両肩に手をかける。

一気に腰まで引きずりおろした。

「 」

少女の、屈辱の吐息。

その裸身、体全体から魔導力の光が、蒼白色の炎が躍り、周囲を照らしだす。

マミヤは、眼を背けた。

「ええと？ 左のおしり、と……ああ、まだ紋章、残ってるねえ、ちょっと薄れた感じだけど残ってるねえ……君、来週のレースも出場しないか？ 僕に負けてまた見せてくれよ、ナマケツをね」

それからわざとらしく、咳払いをひとつして、

「異端審問による身体視診検査をこれを以て終了します、着衣の乱れを直して構いません」

いけしゃあしゃあと言つてのけた。

少女はすぐさま、パンツァーを両手で引き上げ、さらりと出していた裸身をかくした。

また座りこんで、彼を睨みつけてくる。

彼はヘッドセットマイクにむかい、声高らかに戦勝報告の通信を始めた。

「こちらソルベ、ソルベ中尉であります、ターゲットのホウキをへし折りました、くりかえす、魔女のホウキをへし折つてやつたぞーっ」

彼のヘッドホンから、軍政異端審問局オフィスのおおきな歓声が漏れ聞こえてきた。

ソルベという名の少年が自身の愛騎にむづつくる。意氣揚々と、大股で歩いてくる。

「下衆野郎」

マリヤがつぶやいた。

「…………ホウキをへし折るのは、勝利した獵騎兵の当然の責務だ、まあ上官として、いまの問題発言に対し寛大なところを見せてあげるよ、畠長くん？」

マリヤは自分より一階級上の同級生の顔に、ありつたけの侮蔑をこめた視線を放った。

ソルベ中尉が、この三万アーテルハイドしか回せない無能野郎め、とそうささやいて、陰のこもつた笑みをつくつてくる。

嫌な笑みのまま愛騎のヤークトフントにまた騎乗する。
そのとき。

首都高速の片隅、打ち棄てられていた粗大ゴミから　　家庭用の疲労急速回復ポッドやら、放射能簡易除去装置の陰から　　人影がふたり素早く動いてマリヤたちに接近してきた。

マリヤとソルベ、うちひしがれた魔導少女の貌に緊張が走る。

人影のひとり、中年の男だ。彼が、

「私たちは反政府独立系メディア、日本自由放送の記者の者です、異端審問獵騎兵さんたちにこれから突撃取材を敢行しますっ」

記者と名乗る中年男に、

若い二十代ぐらいの瘦せた男が小型カメラをむけている。

「ふざけるなっ、報道協定違反だっ」

ソルベ中尉が激高した。

「それですっ、その報道協定により自由な報道が、
真実が市民に伝えられていませんっ、
いま世界に蔓延する？魔導少女症候群？とこう謎の奇病についてお
伺いしますっ猶騎兵さんっ」

ソルベが手をふりかざす。

答えられないっ、と記者に怒鳴り散らす。

記者はすかさずマリヤのまつ毛を定めて、

「では君に伺います、

少女たちをこの奇病から救う根治療法はあるのでしょうかっ？」

「……ご存じのよひ、アーレース？を通して、
少女たちの魔力を消耗させつづけて完全にゼロにする以外、完治さ
せる方法はありません」

それか、

「マリヤ、なにもしゃべるなっ」

ソルベがさらには唇を張り上げる。

記者は、マリヤを？口の軽い協力者？と判断した様子で、うれし
げに、「では？ホウキをへし折る？といつ隱語について、人権侵害の声が
上がっていますがっ」

マリヤは躊躇せずに、

「そのとおり、明白な人権侵害です、
この病気の発症者には体に？痣？が生じます
マリヤッ」

ソルベの怒号を無視して、マリヤはつづけた。

「少女の魔力が衰えれば、痣も薄くなつていきます、
ソルベの怒号を無視して、

「少女の魔力が衰えれば、痣も薄くなつていきます、

俺たちは現場でそれを視診するため、

少女を脱がすんですよ、いまあなた方が見たよつにね

ソルベが走り寄り、マミヤの胸ぐらをつかむ。

マミヤも負けてはいない。

「だけどそれは、医療機関の仕事だつ、俺たちのじつじやないつ、

女の子が可哀想だつ」

上空から、エアの排気音が大音量で聞こえてきた。急速に降りてくる。

マミヤが、ソルベが、金髪の魔導少女も上を見る。

記者たちふたりは慌ててこの場から走り逃げようとする。

警視庁交通機動隊のエア・マシンが下降してくるところだった。

強烈なサーチライトとランディングライトがマシンから地上へ降りそそがれてくる。

機体は全長一〇メートルちょっと、後部の左右に翼がある。

両翼は機体の斜め下方へと伸びており、着陸時にはヘリコプターのランディングギアのようだ。

脚の役目を果たすようになつていて、

マシンはゆつくりと、機体底面の巨大なふたつの排気口からエアを吐きだしながら、

弾着地帯のすぐそばの路面に着陸してきた。

胴体のハッチが下方へと開く、それが階段のかわりを果たして、キャビンから大人たちがぞろぞろと降りてくる。

軍政異端審問局の審問官、警視庁、生活安全部の少年事件課の刑事たち、

交通警察の機動隊員らだった。

隊員たちが苦も無く記者一名を拘束した。

カメラは没収されてしまった。

ふたりは、エアマシンへと強制連行されていった。

「おい、今夜のことは報告しないでおいてやる、貸しひとつだ

ソルベが勝ち誇ったようつづきのヤハラの耳元で告げてきた。

マリヤは全身で虚脱感を感じながらも、この瞬間にあわただことを噛みしめていた。

そう、この国は、日本は報道の自由の無い、全体主義国家なのだ、と。

魔導少女のむかおうとした？ 今夜のコース？ の先、西銀座方面から、消防車輌や修復作業車などが何台かひしりなり到着していく。

少女は、異端審問官たちに連行されてエア・マシンに乗せられていった。

乗りこむ間際、魔導少女は泣きほらじた貌にもかかわらず、マリヤのほうを見てきた。

マリヤを見て、すこしこのすこしだけ、微笑みを見せた。彼は、ヘルメットを脱いで彼女になんとか応えようとした。掛けた言葉は、見つからなかった。

彼女はそのまま機体のキャビンへと消えていった。唯一、重苦しい表情で見送るしか術がない。

七月の暑気が押ししぬけてくる。パンツァーの空調をフルランク上げた。

空を見る。

？ 政府御用達？ のマスメディアの向台ものエア・マシンが空中でホバリングしているのが見える。

機動隊のエア・マシンが離陸、垂直上昇を始め出す。

マリヤは無言で、空に浮かぶマシンどもを見上げていた。

マミヤのかよう中学校は、じく普通の公立校だ。

東京二三区からすこし離れた、南東京市の市立中学校。
未明の？闘い？に動員されたけれど、

きょうは平日、学校は休ませちゃくれない。

なんてつたつて一五年次生 中学三年

義務教育の真っ盛りつてヤツだからだ。

眠たい目をこすり、遅刻ぎりぎりで一五年一組のドアを開ける。
一〇人ちょっとのクラスメイトたち、階段状の教室、
ドアの左手が最上段の席、右には教壇と大型ディスプレイがあった。
数人の同級生たちがかけよつてくる。

みんなが口々にいつてくる、

おいマミヤ、深夜の動員^{オットメ}ご苦労さんつ、

とか、ネットでニュース見たぞつ、

？インター杯？残念だつたなつ、とかなんとか、そんな感じにいろいろ騒々しい。

教室最上段を見る、ソルベを中心にして、クラスのいちばん目立つ男女が集まっている。

例によつて、ソルベの未明の？インター杯？その武勇伝の吹聴会が盛大に開かれていた。

背の高いソルベはひときわ目立つている。

横目で見ながら、中段ぐらいの席、窓際の自分の席に座つた。
すると女子の集団からひとりがマミヤのまつへ駆けよつてきた。
となりの自分の席に音を立てて座りこむ。
マミヤはだらしなくデスクに突つ伏した。

元気印のポニーテール、けつこうカワイイ、愛嬌のある顔立ち。
小学校からこいつち、ずっとなぜかおなじクラスで顔をつきあわせてきた。

「なんだよオナホ？」

「ばーかつ、ナホさまと呼びなつ、それ、ホントマジウザい、

百万回くらい聞いたからつ」

名前を茶化された反撃に、ナホが打つて出てくる。

いつもの挨拶のようなものだ。

「ねえ、あのさ、深夜の？ インターハイ？」

……残念だつたね

口調にはいたわりがあつた。

仕事をリストラされる運命の彼氏に対する、彼女のような。

「それ、やめてくれ、高校のインターハイじゃあるまいし、

嫌いなんだよその略し方」

「だつてさ、誰も？ 魔導少女迎撃競技杯？

なんて長つたらしいの、呼ぶわけないでしょ」

ナホは大胆に耳元に顔をよせてきて、

「グレード？（G・？）のインター杯ですか、勝てないってマハマハどうしちゃつたの？」

「？ つたら小物の魔導少女ばっかしか出てこないじゃない？」

「だからソルベ中尉殿に譲つてやつたのを、

？ 小物の獲物？ をね」

「つ……あんた分かつていつてんの？」

「四連敗だよつ？ カド番？ なんだよつ」

「だからどうしたんだ？」

「つぎのレースで負けたら獵騎兵クビになっちゃうじゃない、

あんな小物相手につ、昔の勢いはどこへいつちやつたのよ？」

唐突に、未明、あの魔導少女の涙が脳裡をよぎつていつた。

小物の獲物？

ちがう、ひとりの少女だ、獲物なんかじゃない、

人間の女の子なんだ。

あの子は屈辱に耐えていた。

パンツァーを剥がされ、きれいな背中を、腰を、その下も見せ始

めて 。

そこで眼を背けた、直視できず。

これが己の仕事であるにもかかわらず。

でも？ ほんとうは、見たかったんじゃないのか？

あのソルベと自分、おんなじ人間のオスじゃないのか？

いくら打ち消しても疑問は消えてくれない、なあ？ ホントは

。

「 なに、どうしたのマリヤ」

ナホが肩に手を掛けてくる。マリヤはテスクに顔をつづめたまん
ま、

「 ……自己嫌悪

つぶやいた。

と、そこへナホが、

「 あー、やだつ、きなすつたぜ、ソルベ中尉様々がつ」

「 マジ？」

ふて寝してこまかすことに決めた。

「 よう、万年連敗曹長殿つ寝覚めはよかつたか？

もう慣れっこだろ、負けんのにも」

数人の取りまき連中が笑いころげた。

ナホはソルベに挑む目線で、

「 マミヤ曹長はアンタに獲物を譲つてやつたんだってさつ、
小物だつたからよ」

不吉な沈黙がおりた。

取りまきのひとりが怒り出して、

ナホと言い争いを始めた。ソルベが片手をあげて、

「 やめる」

ソルベの一言、場がおさまった。

「 こつちはやつてやるわよつ、異端審問獵騎兵の中尉様だからつて
インターセフタ

イバンじゅねーよつ、あたしらとおんなじ | 五年次のクセにつ

「なあナホ、お前の彼氏の」

「バカツ、じいつはつ、ヤダ、

彼氏なんかじゅないわよつ

「まだ、マミヤ、とほひと言もこつてないナビね

「 」

「まあいい、じゅあお前のペペトのマミヤくさ、

インター杯何勝何敗か知つているのかい

「ど、どうだつていいじゅないつ」

「よくはないや、魔導少女の魔力は撲滅されなければいけないんだ、社会の秩序の為にな、そのために僕たち審問獵騎兵が体を張つてゐる、僕はいずれG?に打つて出るよ、

あのHースのシゲミツ中佐と肩を並べるまでになつてみせる、絶対にね」

「シゲミツさんこ? アンタがあ?

アタマ湧いたんじゅないのつ?」

「すくなくとも、そこの負け犬よりは可能性があるよ

「マミヤだつてがんばつてるわよつ」

「一勝一四敗のどこが?

「力ド番? のどこががんばつてんだよつ」

マミヤは横目でちらり、周囲を見る。

上背のあるソルベにむかつて、ナホは決然と相対してゐた。ナホは怒つてゐる、本氣で青筋を立てて怒りまくつてゐた。

「ごめん、ソルベ、俺、もうすぐクビだから

鬱陶しい、自分にはナホにかばつてもうつ價值なんかない、

そう思つからテキトウに謝つた。

「ちよつ、マミヤーッなんかいいかえしなさいよつ、すこしじぶらつ」

「傑作だなつ、女の腐つた奴はそつやつて

他人に頭下げづける人生つてわけだつ

ソルベはひとしきり、取りまきたちと笑いあつてから、
ナホに、

「なあ？ こんな負け犬の相手はやめてさ、
僕のグループに入れよ、僕つてば、また年俸が上がっちゃつてさあ、
こんなに？ つてくらいなんだぜ？」

なんせ僕はG？ -G？ あわせて一ハ勝無敗だからさ
ひつぱたいた、

ナホが一ハ勝無敗の異端審問獵騎兵中尉様の横つ面を盛大にひつぱ
たいた。

クラスの連中が集まり出した。

ナホやめなよー、とナホの友達連中がいつてくる、
おいケンカやめるー、と中立派のグループの男女たちも大声をあげ
出した。

そこへ初老のクラス担任がよつやく入室してきた。

皆、自分の席に着き始める。

ソルベはナホをじつとり、凝視しながら、

「……このままじゃ済まさないぞ、いいか、絶対にだからな

「アンタなんかそのうち負けてみなさい、

自称エリートクンほど負けると脆いモンよつ

「……」

ソルベはナホを見て、マミヤを睨み下ろし、

ついで教壇の担任に一警をくれた。

無言で立ち去つていつた。

取りまきたちが中指を下品に突つ立ててくる。

しつしつ、とナホが掌をふつて追いかえす仕草をする。

彼女がどつかと席にまた座りこんだ。

「ナホ」

「……」

「なんでおまえが泣く？」

「ばーか、このあたしが泣くわけないじゃないつ

「」

マリヤはまたデスクに突っ伏して、

「…………ごめんな

ナホがこっちをむく、その気配を感じる。

「だから、なんで……そんなすぐ謝るのよ」

涙声でささやいた。

はい、みなさんおはようございます、初老の担任が朝の挨拶をしてくる。

クラス全員が起立する。

「はこ座つてよろしく、ええと

…………あうの一限目は、あー、倫理学ですね

担任は連絡事項を伝えて、ホームルームをひとつと切り上げ教室をあとにした。

全員が座った。

あー、かつたりーよねー、倫理の授業つ、既、やう口うやう、
田代講師で横田で彼女を見た。

ナホはつむぎ、しきりにポーラーテールに手をやつて、髪をこじりつていた。

表情は、見えなかつた。

平穏な授業の破られた日

一限目、倫理学の授業。

かつたるい内容をそりで酷いものにしているのが講師のやる気の無さだつた。

「えーまあこのようにね~、

現代の生命科学をもつてしても、なぜ魔導少女が一定の割合で誕生しつづけるのか？

なぜ第二次性徴期を過ぎた少女の体表面に、悪魔の紋章と呼ばれている痣が生じて魔導少女として覚醒するのか？

依然真相は不明だけど、おおくの仮説の立てられるなかで最有力なのは、恋愛感情が覚醒や魔導力と密接に関わっているとゆう

」

倫理学の時間、解説をつづける一〇代のスマートなオバサン、いやいや、お姉さんが教壇に立つていて。

一〇代のこりはさぞかし美少女として遊んだんだろう、そんな派手なファッショնに身を包んでいた。

彼女の正体は、法務省の内局である人権護民局の護民官だった。講師としてときどき市内の中学をまわっているのだ。

ちなみにいたあだ名は「ゴミン」「ちやん」という。

マミヤは憂鬱な気持ちで窓の外を眺めていた。初夏の陽差しは眩しかつた。

手首の震動に気づいた。右手に巻いた手首専用のタッチパネル情報端末、リスト・タブレット、通称リストタブのバイブレータ機能が働いて、震動したのだった。

メール受信を告げている。

メールは転送されまくつっていた。発信者はこのクラスの中立派グループの女子である。

《日本魔導少女自立支援協会（JMA）の最終オッズ情報だよー

——つ』

バカらしい、そう思い、メールを削除しようとした。となり、ナホがおんじメールに見入つている。なんとなく、マミヤもつづきを読んでみることにした。

『今日深夜三時のG?、一対一戦インター杯最終オッズ、ソルベ中尉単勝一・二三倍、それにくらべてマミヤ曹長のオッズは一七・六四倍———つ、これじや賭けにならないよね———つ、やつぱりうちのクラスの出世頭はソルベ君に決まりかもねつ、危うしカド番曹長つ』

ナホがじつと、見入つている。すると彼女は、自分のリストアでメールを打ち始めた。来た、受信、またバイブレーターが作動した。ナホからのメールだ。開いてみる。

『負けないで』

ただ、この一行。たつた、これだけ。マミヤは自分のリストアにうかぶデジタルの文字を追つた、画面にじつと見入つてタッチパネルにうかぶ文字に指で触れてみた。

『と、いうわけでね、

魔導少女をそそのかし、その破壊力を悪用した魔導テロが世界中で頻発するに至り、我が国におきましても、やむなく時の政府は、国会を解散、一時閉鎖の超法規的措置を執りつつ、

軍政があくまで臨時措置として四〇年前から施行されるにいたつたわけでございまして、

やむなくも少女たちの健全な育成、人権擁護、情緒不安定になり

がちな彼女たち魔導少女の魔導エネルギー発散のため、
ひいては完全にエネルギーを消失させるためにね~、
魔導少女迎撃競技杯がですね~、

ほんとうにやむなく開催されるよ~になつたわけあります~
あ~

……テキスト読むの疲れたわ~

「

教壇の上のゴミンゴちゃんは、まったくやる気のない声音でテキストを棒読みしていた。

それにつけても、この美女、やる気モードひきつけつてる感がものすごい。

マミヤは横目でナホを盗み見た。

彼女は、ふいっ、と右に顔をむけて表情をかぐす。

ポニーテールを可愛く揺らしながら。

「そのための組織として法務省の所管の下、人権をですね~、あくまで人権擁護の立場を堅持しつつ~、独立行政法人であるところの、日本魔導少女自立支援協会(以下A)が発足したわけでございましてですね~、インター杯の収益金は、法務省の貴重な利権、協会は大事な天下り先になつてるのよね

……あ、余計なこと言つたわ

誰も聞いちゃいなかつた。

マミヤもそうだった。考えた挙げ句にメールの返事を打ち返した。

《「めん、ありがと~」》

送信する。

となりの少女は文面に見入っていた。突然。

「ばーか~

唇の触れるくらい、マミヤに近づき、耳元でさわやかってきた。

彼女の吐息、右の半身が熱くなる、熱を帯びる。

彼女の唇が、吐息が、貌が離れていった。

彼女はまた自然な姿勢をとりもどして、何事もなかつたかのよう
に教壇のディスプレイに目をやつしている。

「ばーか、耳について、離れない言葉。

少女が、こつん、と左足でかわいくキックをしてくる。

マミヤは、そうつ、と肘で少女の腰の脇を突ついた。

少女がこつちをむく、微笑んでいた、もう泣いてはおらず、微笑
んでくれていた。

マミヤは戸惑つた、どうしていいのかわからなかつた。

初夏の陽気、教室のHアコンがなぜか、ちつとも効いてはいな
いように思えてくる。

「ええとね~、

彼女たち魔導少女に対抗、迎撃すべく、軍政異端審問局はね~、
人工の魔導少年とも呼ぶべき少年たちの育成を開始いたしました、
このクラスにもお一方、在籍されていらっしゃいますね?
つい若き異端審問獵騎兵さんですね~、獵騎兵さん~んつ

「ミミンゴが突然、黄色い声を上げてくる。

彼女がソルベをちょっと見て、それからマミヤを見てくる。

手をふってにこりと微笑んでくる。

最上段、ソルベの席のあたりから、口笛、拍手、喝采がわきおこ
つてきた。

例によつて取りまき連中だ。

「授業にもどります、み、

はい、彼ら少年たちが人工的に魔導エネルギーを發揮するため、
?魔導石?が発明されました、

発明したのは、魔導工学で最先端の研究を誇るハイツ連邦で、
いましてですね~」

ナホがマミヤの耳に口元を近づけ、

「なーによ、ゴミンゴのヤツ、マミヤに気があるんじゃないの?」
彼女はふくれつ面だ。

まやか、トマリヤは軽く首をふつてつぶやき返した。

マリヤのデスクの上、震動がおきた。

学習用の大型ペントタブレット端末が小刻みにデスクの上を動き出す。

バイブレータの機能なんかじゃない。それは教室全体の震動だつた。

そしておおきな校舎の揺れ、爆発音が聞こえてきた。

護民官のお姉さんのやる気のない、けれど饒舌な語り口がやんだ。

たひこ、こんどはいつそうおおきな震動。

床が小刻みに揺れる。轟音が聞こえてくる。

下の階のほうからだ。

「ナニこれ地震つ？」

女子の誰かが叫んだ。

それが合図と化して全員が席を立つ。

「はい、落ちついてくださいね、落ちついて行動を

ゴミングが呼びかける。

誰も聞こちやいない。

クラスは騒然となり始めた。

第三級アーテルハイド暴走事件

クラスが騒然となる。

そこへ校内放送を告げるチャイムが鳴り響いてきた。

『ええ、緊急放送です、これは訓練ではありません、みなさん慌てないでください』

校長のアナウンス、本人の声は狼狽しきっていた。

全館に放送の流れるのが聞こえてくる。

『ええとですね、一三年四組、女子生徒がですね魔導少女として覚醒の模様、

とり乱した状態ですね、重力場を放出中、

？第三級魔導力場展開暴走？の模様です。

一階校舎の被害甚大、速やかに普段の避難訓練同様、避難の開始をですね』

ゴミングが真っ先に教室から飛びだしていく。

急ぎ、現場にかけつけるつもりなのか、このお姉さん、やれ人権擁護だのなんだのって、どうやら口先だけではなかつたらしい。

マミヤが立つ。

「ゴミングのあとを追うように、教室内の階段を跳ぶようにして降りてゆく。

「マミヤッ」

ナホの悲鳴に、ふりかえって、

「おまえは訓練どおり非常階段から地上へ逃げろ」

ナホに叫び返す、ついでソルベを見上げて、

「なにしてるつ現場にいくぞ中尉つ、護民官殿に後れをとるなつ」

一喝されたソルベは、茫然自失の体からよつやく自分をとりもどしたようだ、

大柄な体を素早く動かす、階段を下りてマミヤの元にやつてくる。

「魔導石は四錠もつてゐる、中尉はつ？」

「僕は五錠だ、第三級暴走なら楽勝だぞ、被害者救出優先でこいつ、

ママミヤ曹長つ」

「わかつてゐる」

ふたりの少年が廊下に出る。

先にいったゴミンゴの姿は、無い。

ふたりがうしろをふりむく。

髪を振り乱し、廊下を走り逃げゆく、ゴミンゴの後ろ姿があった。

「ゴミンゴのヤツ、ひとり非常口のほうへ逃げやがつたつ

「構うないぐぞ中尉つ」

ふたりが制服のブレザーから金属製のピルケースをとりだす。

蓋を開けると、蒼白色に光り輝く魔導石の光が少年たちの顔を照らしだす。

長さは一五ミリばかり、長方形のカプセルのよつて形状が整えられている。

少年たちが一錠をとり、噛み、碎き、舌下錠の要領で唾液に溶かす、速やかに全身に成分を行き渡らせる。

「 来たつ、クソツ、漲つてきたつ」

ソルベが荒い息を吐く。

プライドの塊のような少年だけれど、仮面を脱ぎすぎてたいま、獰猛な猟犬の本性を見せていた。

ママミヤも頬を紅潮させる。

血圧、脈拍、心拍数の急激な上昇と興奮、快樂を押さえこむのに躍起になる。

走るうち、ふたりの両眼が光り出す、蒼白に輝きだしてきた、あのときの、未明のインター杯のときのよつて。やがて体の表面、皮膚全体からも、制服の着衣の下から光を放ち始めた。

少女との出逢い

ふたりの少年は、避難する生徒らの波にぶつからないように、教職員専用回廊を通りて最短コースで現場に駆けつけた。

校舎一階の一三年四組の教室、隕石^{メテオ}の落下してきたような惨状を呈している。

破片は外壁を突き破り、外廊下は足の踏み場もない有様だ。現場は無人だ。

倒れている者の姿も無い。

何度も目撃してきた、これが？第三級魔導力場^{アルハイド}展開暴走？の破壊力だった。

ソルベの右手首のリスト・タブレット端末、通称リストタブ^{アルハイド}に軍政異端審問局から緊急指令通信が入った。

相手は大佐だった。

ソルベが大佐と連絡をとりあつ。

その姿を見て、やはり痛感させられる、自分は下士官なのだと。この現場の指揮官は、自分ではない、中尉であるソルベのほうだった。

「了解しました」
「^{アイ・サー}了解しました」

ソルベがこっちを見て、

「学校から審問局に報告がいつてる、死傷者はゼロ、ターゲットは現在一三年五組の教室内に移動した模様、彼女のデータがきた、君に転送する」

「了解中尉」

軍政異端審問局からソルベのリストタブへ、覚醒した魔導少女のデータが送られてきた。

それがマミヤのリストタブに転送されてくる。

マミヤは画面を注視した。

『ターゲットの宗教感情・国家定期健診の心理スキャン情報／一〇

○%無宗教との判定結果アリ・オカルティズムへの関心傾向・アニメ等からの情報に傾倒中／受診から五三日経過》

日本では無宗教のパターンが比較的多い。

特定の信仰があれば、それに感応する専用の呪符を用いてターゲットを拘束できる。

彼女の場合、アニメ、コミックなどサブカルチャーからの雑多な情報の影響を多大に受けている。

この子を拘束するためには、それに応じた、いかにもそれらしい呪文、術式が有効だ。

それがその子にとつては、最大の心理的効果、打撃となってくれるからだ。

ふたりはブレザーの懐、専用のホルスターから 拳銃用のものではない 呪符を数枚とりだした。

審問局から？それらしい術式・呪文？がダウンロードされてくる。最初に呪符にインストールされてきたのは、晴明桔梗印、いわゆる五芒星だ。

それに？臨兵闘者皆陳烈在前？の文字。これは修験者の呪法？九字？の真言である。

五組、この廊下をさらに奥へといつたすぐ先にある。

ふたりは魔導パワーの跳躍力を使い、身軽に廊下の残骸の上を跳びこえていった。

五組のドアにたどりつく、ふたりが目でうなずきあい、ドアを開ける。

教室の中、女子がいた、ふたりいた。

ほかに生徒も教師も、避難して誰もいない、ふたりの女子だけだつた。

教壇の手前、階段状の教室の最前列、全身から蒼白色の不安定な発光をくりかえし、泣いている少女がいる。

そしてもうひとり、その魔導少女を抱きしめている女子のうしろ姿が見えた。

ソルベが臆した様子で、つばを飲みこんだ。

「中尉、拘束呪符を」

マミヤは携帯用ヒートナイフをとりだした。

ナイフを人さし指の先に照射、血を数滴、呪符に垂らす。

呪符にインストールされた晴明桔梗印と九字が蒼白色に光り出す。

「中尉、早く呪符を」

「あつ」

ソルベも我に返った様子でマミヤとおなじ行動を始めた。

ふたりの若き異端審問獵騎兵は、間合いを詰めていった。

覚醒してしまった女子生徒は、怯えた様子でふたりの少年に貌をむけてきた。

小麦色に日に焼けた、可憐な少女だった。

「 」

少女がなにかを言いかけようとする。

マミヤが、覚醒した少女の肩に一枚、拘束系呪符を左手で押しつける。

九字を唱える。

「 臨、兵、鬪、者、皆、陳、烈、在、前」

右手を動かす。

人さし指と中指を伸ばして？刀印？を組む。早九字と呼ばれる呪法を執行した。

びくんっ、と少女の日焼けした体に震えが走る。

ソルベも遅れて呪符を貼る。緊張した面持ちで早九字を執行する。

呪符の九字が、ふわり、札から離れ、空中に躍り出る。

蒼く輝く縄のような形状となつて、女子の体に巻き付き始めた。

「 あ、マミヤ 」

覚醒した子は、ぽつり、と一言だけ声を発した。それからゆっくりと氣を喪つていった。

拘束、完了。

ソルベが、ふうっ、と脱力しながらも、すぐに大佐に報告を入れ

る。

「マリヤが、抱きしめていたほつの女子を見て、
「軍政異端審問局の者です、異端審問法に基づき、第三級アーデル
ハイド暴走の容疑者を緊急拘束しました、あなたにお怪我はありませんか？」

その少女はすこしづかり首を横にふった。

「御無事でなによりでした、失礼ですが事情聴取にご協力を
言葉は、固まった。

女子ががふりかえったのだ、覚醒した魔導少女を抱きしめたまま。
黒い、さらさらのロングヘア、黒と茶色の宝石を凝縮したような、
両の瞳、泣いていた、その瞳から涙が溢れ、こぼれ落ちていた。
少女は、シン、と上をむいた小生意気そうな整った鼻梁、その下
の艶のあるピンク色の唇から一筋血を流している。

黒髪、輝く両の瞳、こぼれた涙、白い肌に流れる赤い鮮血。

それが、魔導の蒼白色を間近に浴びて、光と影、濃い陰影を醸し

出していた。

マリヤは、任務を忘れ、少女に見惚れていた。なにもできず、立
ちつくしていた。

「この子ならもうだいじょうぶよ」

少女の、凜、とした涼しげな力強い声音。

「……あ、はい、貴女のお怪我は……」

なんとか、それだけ口にできた。

「私なら平気、この子にちょっとぶたれただけ
くすり、と寂しげに微笑んだ。

「あの、それは、なら保健室にきていただきます、応急処置を施し、
その……さらなる治療の必要なときは、医療費は異端審問局に請求
してください、全額を軍政府がお支払いします」

少女はそつと、頭を下げる、礼の印に頭を下げる。
うしろからソルベが、

「曹長つ、大佐の命令だ、僕がターゲットを審問局へ護送する、悪

いな、僕の手柄という形になってしまったが、君はその少女から事情聴取をして、報告を

「

ソルベの言葉が途切れた。

こちらをふりかえった少女の貌を見たのだ。
ぽけつ、としてマミヤ同様、その場に固まってしまった。見惚れてしまつていて。

少女が、拘束された魔導少女の体を静かに床へと寝かしてやる。
自分のブレザーを掛けてやつた。

マミヤが、

「では、中尉、護送を頼みます」

ソルベはつわの空だった、地球と月のあいだを一往復するくらいの時間、微動だにせずにいて、それからようやく我に返ってきたようだつた、月面の宇宙ステーションから帰還して、生まれて初めて生身の美少女と出逢つた、そんな顔をしている。

「あ、いや曹長、僕が……君にかわって事情聴取を

「大佐の命令で、手柄を得るんじやなかつたのか、中尉？」

ソルベが顔面を引きつらせて、最大級の悔しさを表現してきた。

少女の名前、Hリカ

保健室で、その少女は養護教諭から怪我の手当を受けた。教諭は、事情聴取のことをわかつていて、処置後席を外してくれた。

静かな保健室。

ふたりつきりになつた。

少女は、椅子に座り、窓の外の景色を見ていた。なにかの決意、意志をしつかりと秘めたような瞳、屈すまい、そんな雰囲気が少女には備わつていて思える。

「マリヤは立つたまま、気圧されていた 相手は一三年次生だぞ？」自身、いいきかせてから右手首のリストアブの録音モードを起動する。

「これより自分が、異端審問獵騎マリヤが事情聴取を開始します、自分のリスト・タブレットに音声が記録されますがよろしいですか？」

「構いません」

「まず、お名前を

「エリカ」

視線は、窓の外をむいたまんまだつた。

「……なぜ、貴女は現場で魔導少女を抱きしめて」

「私の転校してきて初めて出来た友達だったから、だからいっしょうけんめい、暴れるあの子を抱いていたの、異端審問法に触れますか？」

「い、いや、そんなことはありません」

「では、これで帰つていいですか？」

「マリヤは、いつたん録音を中止した。

つばを飲みこもうとして、気づいた、口の中はからからに乾いていた。

「あの、なにか俺は……自分はきみの気に障る」ことをしましたか

少女は、初めてマリヤに視線を合わせてきた。

「気づかないの、異端審問官さん？」

「いえ、獵騎兵ですが……自分に落ち度があつたなら

「きょう、私の大切な、できたばかりの友達が魔導少女になつた、あなた方はその子を縛り上げてから、その子のこと、まるでその場にいなくなつたかのよつて私をじつと見てきた、あなたも、それからさつきの中尉さんも」

マリヤは両眼を閉じた。返す言葉、どうしようもない、なにも見つからない。

「女の子を口説ひとするんなら、時と場所を選んだほうがいいわ、それとも異端審問官さんにとって、魔導少女になつた子は女の子の人数のうちに入らなくなるの？」

「申し訳なかつた、謝罪します」

「要らないわよ、謝罪なんて」

少女は、マリカは席を立つた。

「尊じおり審問官つて最つ低ね

エリカ……エリカ・ヴァンデル・メア。

帰国子女。

先週、ドイツ連邦共和国から日本に帰ってきたばかりだった。

現住所は南東京市、実家は飲食業、兼旅館業。

屋号は？ユリスモールカフェ？……都知事への届け出書類を見た限り、

規模などから簡素な宿泊施設の類だろうか、そう思われた。

年齢、まだ、十二歳……大人びた子だった。

振りまわされてしまった。悔しい。

そうだ、これは悔しさ、なんだ。

マミヤは、デスク上のタブレット端末のタッチパネルを叩きつけた。

なにかに憑かれたかのように。

けれどこれ以上エリカの詳細な個人情報はわからない。

エリカは諦めて、覚醒してしまった女の子のほうのデータを調べようとした。

すぐにその手を止める。

魔導少女の正体、

本名をはじめとする個人を特定できるデータは極秘なのだ。

それを知っているのは、軍政異端審問局のごく限られた幹部のみとなつていて。

異端審問獵騎兵といえども、すべての情報を思うがままに書き集められるわけでは無いのだ。

ふつ、とため息をついて、今朝の覚醒したばかりの魔導少女、エリカに抱きとめられていたあの少女の容態をたしかめるべく、外線を発信した。

相手は少女の収容先の警察病院だった。

端末ディスプレイにまだ若い女性看護師が映った。

『あら、マミヤ曹長、また今朝の子の件でしょうか?』

「はい、容態は安定しているでしょうか?』

『だいじょうぶですよ、バイタルはすべて正常です。

きょう、もう八回も確認していくなんて……さては学校で、一回も失礼でもした相手でしたか?』

女性看護師が笑顔になる。

そのうしろ、ナースステーションのほかの女性看護師たちも笑顔を見せる。

マミヤの表情をうかがおうとしてか、画面をのぞき見てくる。

「いえつ、決してそんなことは……仮にも審問獵騎兵です、魔導少女を相手に、その……」

自分でも赤面していくのがわかる、一回も失礼、この言葉に反応してしまったのだ。

『まつ、ごめんなさいね、私つたり……その、冗談のつもりでした』

女性看護師は本格的に誤解した様子だった。

マミヤは顔を赤くしたまま、看護師たちは驚き、好奇心、困惑を様々に見せながら、

お互に謝罪し合つ、なんだか訳のわからないビデオ通話になってしまった。

外線を切つた。

東京都内、霞ヶ関の法務省の外局、軍政異端審問局庁舎内、五階。時刻は二二一五時。

もう、午後一〇時過ぎだというのに、

庁舎内には残業組ライン職の官僚たちの周囲にスタッフ職が集まっている。

五階フロアでは指示と罵声、口論の応酬が飛びかっていた。

睡眠阻害覚醒薬の入ったブラックコーヒーをひと口飲んだ。ぬるくなつたブラック、飲めたもんじやない。

マグカップを自分の専用デスクにおきなおし、デスクチェアの背

もたれに全身をあずける。

何を、何をいつたいどうしてこんなにエリカのことを焦つて調べているんだ？

あの覚醒した少女のこと、何度も容態を確認すれば、許してもらえる、エリカに会わせる顔ができる、そつとでも思つていたんだろうか。

もうひと口、『コーヒーを我慢して飲んだところで内線が鳴つた。タブレット端末、着信音だ。

相手は六階にいるソルベ中尉だった。

あまりいまの気分では、といつも、まつたくといつていいほど相手をしたくなかったけれど、

「なんでしょう、ソルベ中尉」

内線を開く。

ソルベのふてぶてしい笑みがモニタに映つた。

『もう定刻を過ぎてるし、敬語はいらぬ』ミヤハ

「……用件は？ ソルベ」

『エリカ・ヴァンデル・メア……調べていたな？ あの子の個人情報を？』

眼をつぶつて、

『察しが良いな、いつもながら……俺の情報開示請求履歴、見たんだろ？』

『なあ、お互に考へてることはじつしょじやないか』

『なんのことかな』

『おとぼけは無しにしよう、君には愛しいナホがいるだろ？ あのふざけた暴力女がねつ』

『ナホを悪くいうな』

『僕は正式に学校事務局に、エリカとの異性間交遊申請をするつもりだ』

「……」

『ハハツ、図星かつ、図星だらう』

ソルベが含んだ笑みをこぼしてきた。

「いいことを教えてやる中尉殿」

『なんだい？』

「そのかわり、このまえのレースの？貸し？をチャラにしてくれ
「まあ、話によるね」

マリヤはありのまま、きょう保健室でのやりとりをソルベに話してやった。

ソルベは最初、自信満々の笑みをうかべていた。

そいつが話を聞き終わるころには、月へのシャトルバスに搭乗したとき、

自分の宇宙服を家におきわすれてきたことにせつと気づいた一〇年次生のよくな顔になっていた。

完全に余裕の消し飛んだ声で、

『不味い、不味いだらう完全に嫌われたぞっ……君はビリビリ思つ？
どうするつもりだい？』

「あした学校が終わつたらすぐに家に訪問して謝罪を」

『遅いつ、君はいつも遅いつ、だからインター一杯であんな成績をと
るんだつ』

「じゃあどうする？」

『こまから実家にいつてみると、飲食業の届け出見たひつへ』

「……ああ」

？コリスモールカフエ？……カフエの閉店時間は、

〇四〇〇（まるよんまるまる）時と申告われてあつた。
すくなくともカフエは深夜未明まで営業をしている。

エリカが店にいるかどうか、まだ寝ていなかどうか、
それはなんの保証もなかつたけれど。

？睡眠圧縮剤？がひろく普及して、

市民の睡眠時間が平均二~三時間ぐらいが常識とはなつていた。

昔で例えれば、夜の七時過ぎに下級生の実家のカフエに遊びにい
く感覺に近い。

マリヤとソルベは各自、残務を処理してから怒声の飛びかうオフイスをあとにした。

軍政異端審問局オフィスの喧騒 重要な改稿有り（後書き）

お詫び

魔導少女の個人データをもつてているのは、初稿では人権護民局としていました。これを軍政異端審問局のトップクラスのみ知り得る情報に訂正します。

友絵少尉 2011年11月7日

更衣室で獵騎兵の内勤用常装軍服から私服に着替えをする。軍政異端審問局、庁舎屋上。

エアポートにふたりが顔を見せあつたのは、けよひ日付のかわる頃合いだった。

ふたりは、帰宅する職員たちの行列にならんだ。民間のタクシー会社のエアマシンが一〇台以上も屋上に集結している。

職員たちのために駐機しているのだった。

飛び立つマシンの一本の脚部、強烈なランディングライトが輝き乱舞していった。

屋上は、真昼のように明るかった。

航空機^{マーシャラー}誘導員がつぎのフライトに立つエアマシンを誘導してくる。マミヤたちが乗りこむ。六人乗りの小型のエアマシンだ。ふたりを乗せて離陸していった。

マミヤは、眼下にひろがる東京の街並みを見下ろす。

街の灯りのけばけばしい、渋谷、新宿、池袋、赤坂、六本木……。その周辺、ゲーテッドコミュニティと呼ばれる、半ば要塞化した防犯外壁に囲まれた高級住宅街、

億の値のつく超高層マンション群。

それと対照的に、灯りのろくすっぽ見あたらないスラム街があちらこちらに散見された。

灯りの街と、昏い街、そのまだら模様。

まだらをつなぐ線、都心の高速道路や主要国道は、打ち棄てられた電気自動車が、暴徒化した住民やギャングの手によつて放火され、無数の燃える点となつて、煙を夜空に上げていた。

空に目を轉じれば、富裕層と中流層の人々を乗せたエアマシンが闇夜のあちこちにランディングライトを点灯させて、夜間のフライ

トを我が物顔で満喫している。

「なあマミヤ、この景色を見るたび、僕は優越感に浸るんだ」

左に座るソルベが、ぽつり、いつもとちがつた、どうにも疲れた口調で語りかけてくる。

「……」

「ほらんの有様、いまの「時世」、民間にろくな仕事なんて見つかりやしないよ、去年の、一四年次生死亡事件、憶えてるか」

「……金持ちの母親が、十四歳の息子に質の悪い魔導石を飲ませて、拒絶反応で死なせた、あの案件だ」

「ああそうだ、世の中こんな案件ばかりだ、何千万も払って闇市場で粗悪な魔導石買い漁つて、子供に飲ませたところで、？魔導石適性？を保持する少年は一〇代人口のたつた〇・一%だつてのにね親つてのは……自分の子供にバカな期待を持ちすぎるんだよ」

マミヤは心底うんざりして、

「なにがいいたい？」

「ハタチを過ぎても魔導石適性を保持できる確率、〇・〇〇一%未満……だから僕は残り最後の五年間、有意義に過ごす、そう決めたんだ、

ハタチまでに出世して、財産を蓄え……異端審問獵騎兵を分限免職になつたら、審問官試験にパスして昇進したい

「エリートは、いうことがちがうな」

ソルベが初めて、窓から視線を引っ張りながらしてこちらを見てきた。
「なぜだいマミヤ？なぜG？のデビュ－戦と第一戦、あれだけ華々しく連勝した君が、どうして一四連敗なんて無様な……カド番なんぞに陥つてしまつたんだい？」

「さあね、無能だったんだろ」

ソルベは、納得できない、そう小声でつぶやいてくる。

「僕は……僕は勝利しつづけるんだ、絶対にだ、僕になら……できるはずなんだ」

「立派な宣言だな、でもなりだつしてそんなに声が疲れているんだ

？」

ソルベは眼をつぶり、問いには答えようとはしなかった。

前に座る中年のパイロットがこちらを見てくる、仄かな声で、「お若いのに、達観してるので、お若いのに、達観してるので、いうかねえ、獵騎兵さんは語る話題もそこらの子とはちがうもんですね」

「そりだよおじさん、僕らは選ばれた存在だからね」

ソルベがあしらうように生返事をする。

マミヤが横を向いて、またクソ面白くもない夜の退廃しきった首都をぼんやり見つめ出す。

「まあねえ、わかりますよ、今夜はねえ、我が国の獵騎兵さんたちの落ちこむのもね、無理はないでしょ」

ソルベが初めて、興味を示したそぶりで、

「何かあつたんですか、事件が、魔導テロでも？」

「「存じなかつたん」で？」

マミヤも、窓からパイロットへ田を転じる。

「欧洲リーグの霸者、G?のあの魔導少女がいま来日してるのでしょに、？魔導の姫？さまがねえ」

「初耳ですつ」

ソルベが身を乗りだした。

体を固定したハーネスを突つ張らせながら。

「私もね、今夜の二コースで知りましてね、ああ残業しなすつてたんでしたつけお一方は？だからか、今夜緊急のG?インター杯、開催されたんですよ、五号池袋線でねえ」

ふたりの少年は絶句した。

局のオフィスのあの喧騒、怒りの声……これが理由だったのか。

「相手は、あの姫の相手は誰ですか？」

マミヤが訊ねる。

「シゲミツ中佐ですよ、我が国の獵騎兵のあのエースライダーの……」

「シゲミツ中佐ですよ、我が国の獵騎兵のあのエースライダーの……」

「一対一の一騎打ちですよ、熱く燃えたんですがねえ、

勝負前は、の話ですけどねえ……最終オッズは姫が一・一九倍、

シゲミツ中佐は一・八五倍でしたが、それがねえ……

過去形。

少年たちは、大嫌いな互いの顔を見つめあつてしまつた。ソルベが呆然として、

「負けたんですか、あのシゲミツさんが？」

パイロットは何度もうなずいて、

「速攻で負けちゃいましてねえ、タイムは一分ちょい、だつたかなあ？」
姫のあの必殺技が破裂しちゃつて、ねえ、あの例の

「希望の悲鳴」

マミヤがつぶやいた。声に熱が、こもつていた、かつては持つていた熱が。

“「クリスマールカフH”～魔女のサバトのラプソディ～

マシンのなかで、それ以上姫のことについて誰も語り合はしなかつた。

沈黙がおりる。

マミヤとソルベはそっぽをむいて、窓の外を見ていた。パイロットも雰囲気を察したのか、饒舌な口を開じてしまった。南東京市のエアポートに到着して、マミヤたちはすぐにエリカの家にむかった。

? ユリスモールカフH? に。

住所の情報を頼りに街を歩いていく。

この街一帯は、都心から逃げだしてきた、中流より上、若干富裕層のためのマンションが林立している。どこか、ヨーロッパの街並みを意識したかのような、石畳の清潔な歩道。

目抜き通りには一〇メートル以上の高さのマローニの大木が街路樹として等間隔に植林され、並木道になっていた。

初夏の熱がまだ街を支配している。

ここには、暴徒の影も、壊され放棄された自動車の残骸もなかつた。

「おかしい、このあたりのハズなんだがな」

ソルベが焦り声でいった。時刻は午前一時過ぎ。

ともかく、エリカはふたりを嫌つていてるのだ。

交際を申し込むどころの話ではない、謝罪から始まる最悪のスタートといえた。

「やはりこの建物じゃないのか

マミヤがとあるレンガ造りの建物のまえで立ち止まった。

赤茶色のレンガ造りの外壁、西洋木薦の一種、イングリッシュアイビーが蔓を伸ばして壁面を覆っている。

三階建ての瀟洒なアパルトメント、そんな雰囲気だった。

カフェの看板どころか、表札も見あたらない。

ふたりはうなずき合い、ドアの脇の呼び鈴を鳴らした。

『どちらさまでしょうか』

インターфонの少女の声、エリカではなかつた。

聞き覚えがある、たしかに、マミヤは思った。

「ソルベと申します、失礼ですがこちらは、エリカさんの『実家のユリスマールカフェではございませんか？

自分はエリカさんの通う中学の一五年次生です、エリカさんにお会いしたくうががつた次第ですが

沈黙。

マミヤがドアの上、小さな透明の球体を見つける。

ぽん、と手の甲でソルベを軽く叩く。

顎をしゃくつてやる。ソルベも上を見て、うなずいてきた。

球体は監視カメラだった。

『…………どうぞ』

ドアの鍵が屋内からの操作で開けられた。ふたりが緊張した面持ちで建物に入ると、風防のためのガラスドアが正面に設けられてあつた。

エントランスはちいさな風除室となつていた。

内側のドアは押すと開いてくれた。

カフェのホールが目の前にひろがる。

二十人くらいがバー・ティを開けるくらい、

それくらいの広さ、右手に長く奥へと伸びるバー・カウンター。

左手には四人掛けのテーブルが三台。ほそながい造りのホールだつた。

ふたりの少年の眼は、左手の壁に釘付けになつていた。

歴代の優秀な魔導一輪装甲車輌、その写真が所狭しと飾られてあつたからだつた。

異端審問獵騎兵の駆る獵犬も、魔導少女が逃げ切るための山猫も、ヤークトフント
ヴィルトカッシュ

両方ともだ。

すごいな、ソルベがめずらしく素直に感嘆を口にする。

ただのカフエじゃないな、マミヤは思った。

カウンターの奥、キッチンから金髪の少女がエプロン姿で顔を見せる。

「君は

少年たちは息を呑んだ。

きのうの未明、G?のインター杯で迎撃した、あの魔導少女だったのだ。

少女はソルベを無視して、マミヤに無邪気な笑顔を見せてきた。

「マミヤ薦長、ワタシがここにホウキをへし折られたとき、田を伏せてくださいましたね？」

「ご厚意感謝しております」

カウンターのスイングドアからホールに出て、じへん、となりこな頭を下げる。

「……いや、その

マミヤは言葉に窮してしまう。

それにくらべてソルベは恵々しげに盛大な舌打ちを鳴らした。

「顔バレしましたので自己紹介します、キャロルと申します、フランス系日本人です、

トーキョー都内の中学に通う一四年次生です」

少女が、キャロルが金髪のミニアームヘアをふわり、なびかせながら、はつらつとお辞儀をしてくる。

マミヤにむかってだけ。

自分たちの一個下の少女、キャロル。

エアマシンで連行されるとき、自分に微笑みかけてくれたのは、そういうことだったのか、マミヤは理解した。

そうすると同時に口を開いて、

「この魔導一輪の写真、それから君がいること、ここはひとつして避難所じゃないのか」

「おっしゃるとおり、このカフュと裏にあるホテルの正体はワタシたち魔導少女の避難所^{サバト}です」

魔導少女の避難所、通称サバト。

世間から迫害と差別を受けやすい彼女たち魔導少女が安心して生活、

定住するための秘密の施設、住処、それがサバトだった。

サバトに関する情報はすべて人権護民局が所掌している。

魔導少女の個人データは、サバトに避難した時点で、審問局から人権護民局へとそのすべてが開示される規則となつている。

東京だけでもかなりの数があると噂には聞いていた。

天敵であるはずの獵騎兵たちに、偶然とはいえど捜し当たられたのは皮肉としかいいようがなかった。

「さて帰るとしようか中尉殿」

「なつ、まだエリカにも会つてないのに」

「獵騎兵がサバトに接触するのは、

インターフェーション・カップでの八百長の嫌疑をかけられるだけだ、

それにシゲミツさんの負けた夜なんだ、

サバトで魔導少女とお話しをする気分じやないだろ？

「ちょっと待てマミヤ、シ、シゲミツさんのことは……ともかくとしてだな、

異端審問法では別にサバトへの接触が禁止されているわけじやないぞつ、

僕らには捜査権だつてあるし

「ゆつくりしていつてください、マミヤさんだけ」

「キヤロルといったね、君いちいち突つかかつてくるなあつ」

ソルベの言葉に、

「当たり前だ、このドスケベ獵犬め、アンタ、ワタシのおしりをオカズに、

寝るまえ変なことしたんでしょうつ？

可愛い貌に似合わず、物凄い毒舌だ。

「じつ、こここの娘つ

ソルベが痛くプライドを傷つけられた様子だつた。

「ふたりとも落ちついてくれ

もういつぺんいつてみる、とソルベがいうと、
キヤロルもドスケベ犬、ド変態ワンコッ、オトコのプライドもない
政府のペット犬つ、

とまあ容赦ない口喧嘩が始まつてしまつた。

マミヤがもう一度、仲裁に入ろうとしたとき、

「騒々しいわね

三人が声のするほうをふりむく。

カフェの奥、裏手のドアが開かれていた。

エリカが、立つていた。

白いネグリジェの上、ナイトガウンを羽織つてゐる。

つややかな黒髪は湯上がりで潤い湿つてゐた。

それをバスタオルで拭きながらホールを突つ切つてやつてくる。

マミヤは顔を赤らめて、そっぽをむいてしまう。ソルベは破顔して近づいていった。

「邪魔、中尉さん」

エリカは右手でソルベを払いのける仕草をしてくる。

「ん、あ、あの つ

ソルベは、少女のネグリジェ姿を、白い頸を、開いた胸元をガン
見しながら、後ずさる。

エリカはマミヤの正面に立ちはだかつた。

「あらためて自己紹介するわ、エリカ・ヴァンデル・メアよ、こ
の避難所のオーナーの娘、放課後はキッチンでバイトしてゐる」

「どうも」

「どうも」
「どうも」

「貴方、どうこうつもり？ あの子の容態八回も警察病院に問い合わせたそうじゃない？」

マミヤは彼女を直視できずに 特に胸元、未だ幼いながらも胸のふくらみが呼吸でゆっくり、息づいているせいで さらに赤面してしまった。

「……無事がどうか気になつて、それだけだ」

「それだけ？ ふうーん……私にその気がないとわかつた途端、こんどはあの子をぐじく氣？」

「そんなつもりは無い」

「そうよね、天下の審問官様だもんね、獲物の魔導少女なんか相手にするわけ無いわよね」

「異端審問獵騎兵だ」

エリカは、マミヤの訂正を無視して、自分の入ってきた裏手のドアをふりむいた。

「だ、どうよ、チハヤッ、どうする？」

かろやかに呼びかける。全員の注目がドアに集まつた。

ひよい、と小柄な少女がドアに隠れながらも、半身をのぞかせる。少女の髪の毛、左の長く優雅に伸びたサイドテールが、ふわり、揺れた。

「君は、今朝の覚醒した女子じゃないか」

ソルベが驚きを口にする。キヤロルは不安そうに、

「ねえ、まだ寝てないでだいじょうぶなの？？」

エリカは、くすつ、と微笑んで、

「愛しのマミヤ曹長がきた途端、体のだるさはどつかへ消し飛んじやつたそうよ」

キヤロルが、ふうへん、と納得げにニヤリ、とエリカに笑顔を返してくれる。

「どうこうことだ、彼女、退院できたのか」

「マミヤが三人の女子の顔を順繰りに見ながらいった。

「はい、ついさっきこの避難所に引っ越してきたばかりです。」

「あ、あのっ、私マミヤ先輩のこと、私、ずっと、ず、ずっとあるの、あつあつあつ、あのっ、」

チハヤはちつちつな体を震わせ、舌つ足らずな口調で渾身の告白をしてくる。

キヤロルがふうつ、と噴きだして、

「好きだったんだ？ チハヤ？ 覚醒するまえから？」

チハヤが隠れた半身、顔も、足も手も使って精一杯動かし、何度もうなずいた。

「僕は気に入らないな、なんだ？ なんなんだこの展開は、これはいつたい」

「空氣野郎は黙つてなさいよ」

またしてもエリカのきつい一言。

「そうだよ、このスケベ犬めつ」

キヤロルがピンクのベロを出してくる。

「き、君たち、僕を誰だとつ？ G？ G？ あわせて一八勝無敗の」

「キヤロルは大笑いして、

「テメエなんかあの？ 魔導の姫？ 様にぐらべたら二三流のチョーザ」「野郎じやーーんつ」

「しつ、失敬なつ、世界のG？ の頂点に立つ魔導の姫とだね、まだG？ の僕を比較するのは、卑怯だぞつ。だがしかしだね、い、いづれは僕もだな、いづれはG？ には」「黙れば？ 妄想は貴方の夢日記にでも書いてなさいよ」

三度、ヒリカのきつい声。

「僕にくらべたら、このマミヤ曹長はG？ のお荷物なんだぞつ、四連敗のカド番野郎だつ」

エリカはカウンター席のウインザーチェアを引きよせ、馬乗りに座りこんだ。

両の白い、ひきしまつた太ももが、ネグリジエからすこしだけはみ出していく。

ソルベの田が釘付けになる。

マミヤは天井、あらぬほうへ急いで田線を逃がした。

エリカが背もたれに、けだるげにあごを乗せて、

「なら、勝負する? ここでオトコの度胸、見せあつのもいいんじゃないの?」

「いいとも受け立つ?」

ソルベが鼻息を荒くする。エリカの太ももと膝小僧を見て、さりに小鼻をふくらませる。

「中尉だけせいぜい好きにやつてくれ、俺は帰る」

マミヤが踵を返しエントランスへとむかう。

エリカがキヤロルに、ちらり、目配せする。キヤロルが笑んで、

「マミヤ畠姫つ、お話があるんでーすつ

駆けよつて、彼の腕を引つつかんだ。

キヤロルの胸 けつこうある 思いつき少年の肘に押しあてられて、くにゃん、と形をかえてくる。少年は赤面して、体を引き離そうとする。

キヤロルが、まあまあ、こちちへ、やうじつて、ふたりならんでエントランスの風除用の内扉を開ける。

キヤロルが扉を閉めると風除室にふたつりつになつた。マミヤは困惑してしまい、「なにをするんだ?」

「マミヤ畠姫、魔導少女を代表してお礼をいいます、

一四戦連続でわざと負けてくれていますよな、つざ負けたらカド

番だつてゆうの?」

「……」

「隠しても無駄つ、闘えばわかりますつ、ワタシはみんなから先に聞いていたけど、

きのう闘つて確信しました、魔導機関を傷つけずに後部装甲板だ

シートカウル

けに被弾させるなんていって、スゴいです

「……買いかぶりだ

「ホウキをへし折るの、嫌だからでしょ？ だから負けてくれるるんですよね？」

みんながそう噂をしあつてます、

きょううぐらいあのバカ犬中尉と鬪つて、本気見せてください

「俺にはなんのメリットもない

「勝負してくんないなら報道機関にリークしちゃあつかなー、

異端審問獵騎兵マミヤ曹長は一四戦連続で故意に敗退してるつひ、

八百長疑惑？ そんなんに発展したらキヤロルは嫌だなー」

キヤロルが、ヤダなー、ヤダなー、といいつつ、

密着してきて またしても胸が、ふにゃんといい感じになつて しなだれかかつてくる。

「……」

マミヤは額の汗を拭きながら、わかった、わかったから離れて、
とすこし声を荒げた。

キヤロルが内扉を開けてうれしげに、

「マミヤ曹長が勝負を受けて立つつてーつ

マミヤの腕を引きながら、ホールに踊りこんできた。

引くに引けない勝負～夏の夜更けのラブソング、第一幕～

エリカがうつすら、笑みをつくり
ンプの灯火に、見事に映える笑みで
オルをチハヤにむかって放り投げる。

チハヤがサイドテールを揺らし、慌てて受けとる。
それを見てから、エリカはキッチンへと入つていった。

出でくると、両手にもつている肉切りナイフを一本、高々と掲げて見せた。

形状記憶型のサンダルを脱ぎすて、カウンターに乗りあげ仁王立ちになる。

膝の隠れるくらいのネグリジエの裾、太もものシルエットが、くつきり、天井のショーデランプの灯りで透けて見えた。
マミヤがやはり恥ずかしさのあまり、視線を逸らす。

ソルベは絡みつく視線を向けた。

エリカは両手に一本ずつ、切つ先を下にしてナイフをもつた。
全長三〇センチほど、おおきな肉切りナイフだった。

「ふたりともチエアに座つてくれない？ 両手は下に降ろしたま
ね」

ふたりはいわれるがまま、ウインザーチエアに座りこんだ。
カウンターの横で互いを睨みあう恰好に座らされる。
頭をちょっと下げて、カウンターをのぞきこめば、
エリカの履いてるショーツがもろに見えてしまった。見えた
そうな、そんな角度。

キヤロルがマミヤに近づいて、彼の左横にしゃがんだ。
チハヤが、そろそろつ、と歩いてきて、ソルベの右横で正座した。
「いい、みんな？ これからナイフを貴方方の正面の床に落とすか

カフェの古風なショーデラ
すらり、身を翻し、バスター

見事に柄をつかみ取つたオトコが勝者よ、

手は片手のみ使うこと、私の命運とともに手を出す」と、

それまでは下に降ろしておくれこと、いいわね?

キャロルとチハヤが貴方方の監視役をするからフライングしたヤツは失格よ

ソルベが、エリカのふくらはぎ、太もものシルエット、かわいらしくふくらんだ両の胸、

それから彼女のツン、とすました表情、最後に一本の、ぎらつく肉切りナイフを見上げた。

「僕が勝つたら賞品はなんだい?」

「私のいま履いてるショーツを見せてあげるわ、『不満?』

「僕はつ、い、異存ないぞつ」

マミヤに顔を転じて、

「君はどうなんだつ」

「……構わないが

キヤロルが横から、くすぐす、としながら、

「ねえマミヤ、顔つき、ガラツと変わったー

「からかわないでくれ

「僕は負けないぞ、なあエリカ、もしもふたりとも成功するか、失敗したときは?」

「そのときは引き分けね、残念賞なら……そうね、あしたにでもなんか考えておくわ

「よつ、よし、いつでもこいつ

ソルベがナイフをじっと睨み上げる。

マミヤはそんなソルベを冷静に眺めていた。

「じゃあ、いくわよ

ふたりの少年、同時にうなづく。

キャロル、チハヤの両の瞳が輝きを帯び始める、あの、蒼白の魔

導エネルギーの光を帯びる。

少年たちの手の動きを見逃さないために。

魔導力の宿る瞳で そう、それはどんな地上の野生動物をも凌駕する視力を誇っている 瞳で熱い視線を注いでくる。

エリカが、じっと、見下ろしてくる。

その瞬間を図る、一匹の野生のメスの獣のようだ。

カフェは、静まりかえり

。

エリカの両の指が開く。

ナイフが落ちる。

少年たちの手が空を切る。

トンツ

。

小気味のよい音がして、ナイフは……ナイフが

。

床のフローリングに突き刺さっていた。
一本だ、一本とも、刺さっていた。

ソルベは伸ばした右腕を、怯えた様子で震わせていた。
マミヤは、そんなソルベの様子をやつぱり、無表情に見つめているまんまだつた。

ソルベが憤慨して立ちあがり、

「どうやら引き分けだね、ぼ、僕はこれで失礼するつ
「バイバイ政府の御用犬ーーつ」

キヤロルの毒舌を背中に浴びながら、ソルベはエントランスを抜け、外へ駆けだしていった。

キヤロルが、にひひー、と笑つて、

「はーい、勝者はマミヤ曹長でしたあー」

「詳細を教えてよ、ふたりとも」

エリカがカウンターの上からホールの床に飛び降りてくる。ふたりの魔導少女が、エリカに耳打ちした。

「マミヤはワインザーチョアから立ちあがり、「ちがうだろ、勝負は引き分けだ、俺も帰る」三人を見渡してから、エントランスへと歩いていくと、「待ちなよ審問官さん、ふたりはナイフを片づけてきてはいつ、とキヤロルとチハヤがいつて、ナイフを引っこん抜くとツチンへと姿を消した。

「また、わざと負けたようね、ソルベが失敗するのを見届けてから？」

「いや、意味がわからないが」

「冗談いわないで、ふたりの魔導少女の動体視力、貴方方とかわらないこと、忘れたの？」

「……」

「貴方、一瞬、柄をつかんだそうじゃない？ 精確にね、ソルベの失敗を見届けてから、瞬時にまた手放した、ホント、器用なこと……なさるのね」

「あのふたり、乱視なんじゃないのか」

「勝者は貴方よ」

「よしてくれ」

「見たく、ないの？」

「マミヤが顔を真っ赤にして、

「あ、あたりまえだろ、正式に異性交遊許可証の発付されていいな

い女子を相手に」

「じゃあ、かわりに残念賞をあげるわ」

エリカはいうやいなや、両の手をネグリジェの裾に入れ、裾をたぐじ上げ、純白のショーツを一気に引きずりおろしてくる。

マミヤが咄嗟に両眼を背ける。

「やめてくれ、なづなにをつ」

ヒリカは太もも一本をからやかに動かし、両の太もも、ふくらはぎ、足首から、

しなやかに白い一本の脚を踊らせ、ショーツを脱いでしまった。

丸めると、マミヤに放った。

少年が両手で受けとめる、思わず、受けとめてしまつ。

少年は両眼を、ぎゅつ、とつぶり、両手の中にあるものを見ないようにして、

強く、強く握りしめていた。ショーツにはやせしこねくもつが残つていた。

マミヤにはそれが灼熱の痛みに感じられた。まるで掌に太陽を握りしめているかのように。

「いつおくれけど、男の子にこんなコトするの生まれて初めてなんだからね」

「……」

「お好きに使つていいから、おやすみ曹長さん、今夜寝ねたら、の話だけれど」

「……」

少年は悔しさと、羞恥と、田の前のうつしい少女へのこらえようのない想いを胸にして、唯、唇を噛みしめ、見返すほかなかつた。少女は、少年のすべての想いを受けとめるかのようにして、微笑んでくれていた。

「それと、学校では馴れ馴れしくしないでよね、約束よ?、私って基本、審問官は嫌いだから」

「……異端審問獵騎兵だ」

少女は、くすつ、と田をほそめ笑顔をこぼしてから、寂しげに、「いつしょよ」

つぶやいた。

マミヤ曹長はヒリカをひと睨みして、それからエントランスを抜け、

外へ、ゴリスモールカフュの外へとしゃにむに走り逃げ出していく

つた。

エリカは、マミヤの後ろ姿を見送った。

内扉の鍵を掛ける。途端に。

くたつ、とその場にへたりこんでしまった。

両手で、ネグリジェの裾をきつく引っつかんでいる。まるでそうすれば、投げ渡したショーツがまた舞いもどつてくるとでもゆうかのようだ。

キッキンから、キャロルとチハヤが出てくる。

キャロルは忍び笑いを漏らしていた。

チハヤはとんでもない？恋の超強敵？ライバルのエリカをまえにして、すでに涙目だつた。

「OKーっ、上出来だつたよーっ、雑誌のマニアカルどおりっ」キャロルがそういうて、手にもつているEペーパー 紙状の極薄携帯端末 をひろげて見せる。

紙面には、ダウンロードされたコンテンツのデジタル文字が躍つていた。

『この夏本番！ 彼氏ゲット大作戦！』

派手な口ごでそう謳い文句がならんでいる。

エリカはそんなキャロルにすがりつくような視線を送った。顔は真っ赤つかである。

「つ、恥ずかしいっ、やつぱりこんなマネするんじゃなかつたつ」

そういうて、両の瞳に涙を、本気の涙をにじませる。

キャロルが呆れ、ため息をついて、

「こまさら何いってんのつ」

「だつて、だいじょうぶかな？ 私、彼にどう思われたかな？」

エリカの声は不安をとおりすぎて恐怖に震えている。

まるで彼氏の写真を手にフルヌードでニヤニヤしているところを見られちゃった、

そんな醜態を晒した少女のように。

さつきまでの威厳はどこへやら、だつた。

マリヤ、カグラ姉妹と連行される

翌日、マリヤはひとり一睡もできず、寝不足で憔悴しきつて登校してくる羽目になつた。

ナホやクラスの親しい連中から魔導の訓練でもしてたのか、そう聞かれたりした。

マリヤはデスクに突つ伏したまんま、

「なにも聞かないでくれ」

そういうて、またやつれた眼で遠くを見つめるのだった。

初夏の、窓の外の景色を。

まるで長いギャンブラー人生、カジノでついにロイヤルストレートフラッシュを出してしまつたディーラーのよつな、燃え尽きたような、幸運を使い果たしたような、そんな表情だった。

「なあにーー？ ひとり黄雀れちゃつたりしてえーーっ」

ナホは事情がさっぱりわからず、困惑しているよつだった。

そんなナホの質問攻めをかわしつつ、午前の授業は過ぎていつた。昼休みの時間、ランチタイムになつた。

学校食堂のフロア内、一五年次生の独立する南テラス方面は、遮光ガラスで暑熱をさえぎられ快適そのもの。

清々しい夏の陽差しを独立できる上級生の定位置である。

マリヤは、オートマティックでトレイに料理を盛りつけてくれるマシンの行列にならんだ。

自分のランチが配給されると、すぐさま北側、一三年次生の集まる陽のあたらないエリアへと突きすんでいった。

四人掛けのテーブルがいくつも横にならんで、生徒たちが和氣あいあい、うれしげにランチを楽しんでいる。

マリヤの姿を見つけると、途端、声をひそめてしまつ。

それから一転、あちこちから押し殺した声がわきあがり始め

る。

異端審問獵騎兵のマミヤ曹長だつ、スゲえなあ、ぼくもなりたいなあ獵騎兵つ、でもあの人力ド番だよ、とかそんな、あこがれ、好奇心混じりのひそひそ声が聞こえてくる。

マミヤは、いちばん男子のたむろしているグループを見つけた。突進する勢いでむかつた。

グループのいかにもスポーティでますつて感じのスマートな一年次生たち。

彼らがマミヤを見ると、

マミヤ曹長に敬礼つ、と軍隊じつじであこがれの念を表してきた。「すまないが、彼女とふたりっきりにしてくれ

ざわざわ、とさりに一騒動がおきる。

マミヤ曹長が早くも俺たちのマドンナ、ヒリカさんに手をつけたぞつ、

そんな男子たちの落胆、悲鳴、羨望……それやきの数々。

一年次の坊主どもは肩を落として散り散りになつていく。

遠巻きになつて、いつの様子をちらりちらり、うかがつてくれるばかりだ。

マミヤは人払いをすませると、北側の窓際テーブル席に陣取つた。正面にいる女子は、一年次生。

先週帰国してきたばかりの転校生にして超美少女……。

「きのう……アレは、その、非常に困つてしまつた」

ヒリカはゆつたりとくつろいで、席に座つてゐる。

窓外の景色を眺めていた。

学校のキャンパスに植えられた並木が、緑も鮮やかに風に揺られていた。

七月の光の降りそそぐ平穏な毎。

ゆつくつと、氣怠い仕草でこちらに貌をむけてきた。

「天下の審問官様でも狼狽することがあるのね」

「獵騎兵だ……からかわないで欲しい」

エリカは、くすり、と笑みを見せて、

「お気に召すと思つたんだけどなあ」

「マリヤは周囲をつかがいつつ、

「アレは君に返す、自分には異端審問獵騎兵として、規律ある人生

をだな」

「わざと

エリカが正面切つて顔を間近によせてきて、声をひそめると、

「わざと一因連敗してきた貴方がいまさら? こまから?

どんのソラ下げる獵騎兵の心得を説くというのかじり

マリヤは迫力に気圧されてしまつ。

この避難所のキッチンで働くイチ美少女をまえにして、

「そんなに困る? とかしら?」

エリカは、ランチのアメリカンクラブハウスサンドイッチをひと

口かじり、また物憂げに窓の景色に瞳を転じてしまつ。

マリヤは美少女の横顔を、途方に暮れて眺めるしかなかつた。

「……当然だつ」

マリヤが頭を抱えこんだところへ、

「あ~~~~~、もう~~~~、ここにいたのマリヤくん~~~~

~~~~~つ

脳天氣な、二〇代ぐらいの女性の声が近づいてきた。

マリヤが顔を上げる。

げんなりした顔をうかべた。

ゴミンゴ姉さんだつた。

本名はカグラ。遠くから見るとなかなか美人だけど、間近で見て  
も妙齢の美人だつた。

きのうのチハヤの覚醒事件のとき、トンズラぶついたあの護民  
官である。

「さあマリヤくん、お姉さんといつしょに良いといふへこましまよ

つ

「その、カグラ護民官殿」

マリヤが頭痛を頂点にしながらいった。

「あ～ら～いのよこつものように?『ミンゴラ?』って呼んでくれてもねー、ともかく」

マリヤの耳元に口をよせ、

「コリスモールカフェは秘密の避難所サバト」

人權護民局の繩張りだしねー、異端審問獵騎兵の君にこいつれちやマズいし、

それにあるシヨーツ

マリヤが立ちあがる。

「カグラ護民官殿、自分は、自分はその、あの、この件に関して

「わかつてゐる、わかつてゐる、まあ、無許可の不純異性交遊の容疑で身柄を拘束しまーす」

カグラ護民官に腕を引っぱられ、連行される羽田になってしまつた。

「なんだかわからぬけれど、いってらっしゃい」

エリカの妙に冷めた

ほんとうにお芝居芝居ががつてゐるぐらいに

素つ氣ないお見送りを背に受けながら、マリヤは学食フロアを

美女といつしょに歩いていつた。

サバトは人權護民局の直轄化にある。外部との連絡の一部始終は報告される決まりだ。

どうやら、エリカの口から、護民局のカグラへとすべて筒抜けの様子だった。

少女から少年へと、宙を舞い、渡されたあの純白の、危険物のことも。

思春期の少年に、第一級アーテルハイド暴走すら起こしかねない、魔法のアイテム。

少年の自室、ベッドの中限定ではあつたけれども。

フロア中央の大階段のところで、ナホとソルベたちが取りまき連中とともにやつてきた。

「あらソルベ中尉、『きげんよう』」

「こんなにちはカグラ護民官殿つ、なにゅえマリヤ薦飯を拘束なさつたのでつ？」

「いろいろワケありなのよんつ、あ、君は問題ないから安心してよろしいつ」

ソルベはそれを聞いて、

「あ、安心いたしましたつ」

バカ正直に胸をなで下ろすソルベに、ナホが激怒した。

「ちょっとおおおおおつ、アンタつてば、自分さえよけりやあそんでいいのおおおおつーー？」

「ん？ あたりまえじゃ ないか暴力女？」

「うつさいわねつ……信じらんないつ、なんでマリヤだけそこで血相を変えて、

「まさか、マジで不純異性交遊？ 学校に無許可で？」

ナホはショックを受けた様子で、ただ、ゴミンゴ姉さんに連行される愛しの幼馴染みを見送るしかほかになかった。

## フォツカーミ?F/Aモデル110／第1異端審問獵騎兵連隊・大隊格納庫にて

マミヤは格納庫の電源スイッチを投入した。  
高い天井、LED照明灯がつぎつぎと点灯してゆく。  
ひろい格納庫だ。

時刻、一三一〇（ふたさんいちまる）時。  
長い廊下、左右には獣たちが、魔導一輪装甲車輌ヤーグトファンだ、  
獵犬ヤシどもがすらりと駐機している。

左の列、格納庫のドアから数えて三騎目。  
マミヤの愛騎が、密やかに咆吼をあげるのを待っていた。

装甲のカラーリングはサー・キットブルー。

第一異端審問獵騎兵連隊隸下、第一大隊、第一中隊、第一小隊、  
第三班。

マミヤの所属部隊だ。一、の数字のなりぶのは、彼がエリートの  
証、

そう、それはかつてのエリートの証。

ここは第一大隊専用格納庫である。

サー・キットブルーは自分の小隊カラーだ。

小隊隸下の三個の班、各班に一名の獵騎兵パイロット。

こいつ専属の整備兵一名。

以上二名で一班を構成する。

こいつ 制式名称、フォツカーミ?F/Aモデル一一〇。  
ドイツと日本の共同開発車輌。

F/Aとは、戦闘及びミサイル攻撃型を、モデル一一〇とは一〇〇〇を掛けあわせて、一一万を意味する。

魔導爆燃機関を毎分、一一万アーデルハイドまで安全回転できる  
機体性能つてゆうわけだ。

それ以上の回転域は危険領域レッドゾーン、

そう呼ばれている。

全長三一九〇ミリメートル。

# 乾燥重量四二〇キログラム シートカウル

機体の横、後方装甲板左横にエンブレムの塗装。

黒地に赤い髑髏が魔女のホウキを噛み千切つてゐるデザイン。

第一異端審問猶騎兵連隊のエントレードである  
鋼鉄の獄のまえ、鼻つ面の先でマミヤねあば、

金の鎧のままで、鼻の先で「ミナはあぐらをかいて相対していた。

マシンとおなじカラー、サー・キットブルーのマギアパンツァーを着用している。

「なあ、あのさ、フォッカー……」

少年のその貌は、とてもおだやかな

「アシン、姉さんのヤツがさ、俺に無理難題ふっかけてきたんだよ

豊は沙黙したまま、ミヤの腰元に呻き声を漏らす。その巨乳を固定するハンドルにあづけ、静まりかえっている。

手にしていた、あの金属製のピルケースから？魔導石？を一錠出して歯み砕いた。

瞳が、全身があの蒼白のオーラに包み込まれてゆく。

る。二三日、口の二三ノル、血泡を打つ。新打を打つ。

ほんのわずかな血液が、ハネルから打ち出された採血針によってマシンに流れこむ。

遺伝子解析がおこなわれ全システム、起動準備を開始。

愛騎が起動した。

起動時の、金属の擦れ合ひ、かるやかな高音が格納庫の壁に反響する。

クラッチレバーを握りしめ、アクセルグリップを回してゆく。マミヤの両の瞳、光彩が爛々と輝く。

その強さを増し始める。

少年の発する？人工の魔導エネルギー？とマシン本体の燃料タンクにセットされた魔導石、

そのふたつのパワーが相手を認識しあい、対消滅を始め出す。

パイロットと魔導二輪装甲車輌、二種類の魔導エネルギーの対消滅したときこそ、

マシンの走行性能も、武装のコントロールも、すべてのスペックを十全に發揮できる。

そう、対消滅の瞬間、魔導エネルギーの、蒼白色のパワーが爆発的に発生するのだ。

魔導メーター、その回転数が上昇を始める。少年が歯を堅く食いしばつてゆく。

……五四七、

一八三九、

五八九一、八九九四、九九七三。一万〇〇九四。

六秒で一万を超える、魔導爆燃機関、臨界を突破、走行可能域に突入する。

『グオオオオオオオオオオウウウウウウウウルルルルルルルルンンンンンツツツ』

音がかわる、爆音にとつてかわる。

さらにアクセルグリップを回す、

スロットル開度を全開へ。

第一六戦目でキャロルと対戦したとき三万がやつと、それだけしか出さなかつた。

出そうとなかつた、

それがいま 。

三万五七八一、

四万八九〇六、

五万七八九九、七万一〇五五、一〇万九〇四二、……。

一一秒で一〇万オーバー。

魔導メーターが跳ね飛ぶ勢いで上がる、上がりつづける、  
危険領域までぎりぎりのところへ。

全身の生氣を、魔導エネルギーを吸われる、獸に喰われる感覺、  
生き血を啜られてゆく感覺に近いものがある。

後方、排気口から蒼白の炎が、彗星のように尾を引いて噴きだしてゐる。

少年と魔導爆燃機関の魔導石のパワーが混じりあい、文字どおり  
燃焼し、消耗していった。

アクセルグリップをもどす。

下がる、魔導メーターは一気に下がつていった。

爆音は止み、排気口の彗星天体ショーも終わつた。

『キュウウウウウイイイイインンンンウウウウウンッ、キンッ、  
キンッキンッ……キンッ』

水冷システムが魔導爆燃機関を冷却、冷温停止状態のステージに  
移行させる。

独特の、金属を鋭く弾くような音が鳴り始めた。

金属音は終息してゆき、冷温停止状態へ移行完了。  
クラッチレバーをもどす。

かろやかな拍手が鳴った。何度も打ち鳴らされてくる。

格納庫のドアのほうから、だった。

マミヤは騎乗したまま、右手のドアをふりむいた。

カグラ護民官が独り、拍手をしていた。

「ひらへ歩きながら、

「きょう一日、お付き合こいただき恐縮です」

声には、中学校でみせるお遊びの雰囲気は微塵もない。

マミヤは両手、両脚をだらり、放り出した感じで騎乗していた。

「魔導メーター、排気音から察するに一秒台で回転一〇万オーバー、お見事です曹長」

「カグラさん、それから真面目に授業すればいいの」

カグラ護民官はすこしだけ微笑んで、

「真面目にせつてもやらなくて、みなさんを聴いてはくれませんから」

か

沈黙がおりた。

マミヤは大人の美女をまえこして、語るべき業をなんとかして紡ぎ出すとしていた。

カグラは、それを待つていてくれている風情だった。

話してもこい、このオトナになら、

それがマミヤの結論だった。

きょう一日、彼女と話し合って、そしてマミヤの考えた末たどりついた答え。

「……とおじき、ひょっと、わからなくなることがあるんです、

「なんでしょ？」

「俺たち、なにをしてんだつ、つて、なんでこんな凄いマシンに乗つてまで、女の子たちをおっかけ回して、その……」

「ホウキをへし折る行為をしなければいけないのが、ですか？」

「…… そうだよ、授業では絶対話さないよね？」 猶騎兵たちが、勝

利後に少女たちにする？身体検査？のこと」

「ええまあ、人権上、グレーゾーンを遙かにぶつちぎつてますから

マミヤはただ、力なく頸をふるばかりだった。

カグラは毅然とした態度で、

「魔導少女症候群、

正式には？グレコ＝イグレシアス症候群？を発症した少女には、  
かならず胸から太ももにかけての肌のどこかに痣が生じます、  
通称、悪魔の紋章、この痣の消滅が、症候群の完治を意味します、  
現場にて速やかに紋章消滅の存否を視診にて確認すること、  
この医療行為は希有な特例として異端審問猶騎兵たちに厚労省より  
認可された権限です」

彼女のよどみのない言葉、その一言一句にマミヤはなすき返していった。

「そして痣を消滅させるには、

少女たちの発する魔導エネルギーを消費させづづけるしかありません、

それ以外方法は無いのです。

彼女たちに必死になつてもらつには、競争が、負ければ？罰ゲーム？の待ち受ける苛烈な競争が欠かせません。

そのためのインター杯、そのための視診です。

せめてうわべだけでも人権を守つた上での、ぎりぎりの処置です

「それだよ、その視診が俺たち隊員の原動力なんだ、

みんなその瞬間、女の子を……したいように……する瞬間に飢え  
てる、

だからこんな危険な任務をしてる、

軍政府公認の賭博の対象にまでされても、それでもづづけている

んだ、

勝てば賞金ボーナスの支給付きでね」

「心中、お察しします」

カグラが頭を下げる。

そんな彼女を横目に見ながら、マミヤは視線を床面に落として、  
「初陣は、勝利の瞬間、最高だったんだ、  
魔導少女のホウキをへし折つてやるのが、痛快でたまらなく快感  
だったんだ

……自分は、正義の、社会秩序の番人なんだ、ってバカみたいに  
思つてたんだ。

それが一勝目で嫌になった、

女の子が泣きだした瞬間、俺は……」

「……」

「……俺は……ゾクゾクきたんだよ、

女の子の涙を見て、一層ホウキをへし折つてやりたくなつた、  
どうしようもない衝動だつた、

あの女の子の着てるパンツァーをひんむきたくつてしまふがなく  
なつたんだ。

……俺は、最低の……クズだつたんだ……いまも、それは変わら  
ない

「(一)自身をお責めになることはありません、

彼女たちは要治療対象者です、  
社会の治安維持のためにです、

覚醒時の危険な重力波爆発、中学校で先田(一)経験されたはずです

「カグラさんは真っ先に逃げだしちゃつたけどね」

「はい、私には生きてやり遂げる任務があります、

勇敢な獵騎兵殿が一名もいらっしゃいましたので、現場をお任せ

いたしました」

「汚いなあ、オトナつて……いつつも」「己自身の身の内にある清濁をいかに見極めるか、これが大人の指標です」「……」

「改めてお願ひ申しあげます、

曹長、？魔導の姫？との試合にエントリーなさつてください、その後は我々が手筈を整えます。

あの少女に勝てるのは、現在、世界中で貴官をおいてほかにはおりません、

？あの少女の命を救える？のも、貴官をおいてほかにはおりません

ん

深く、カグラは深く、礼をばくし頭を下げてくれる。

マリヤは、マクペット、左右のグリップを握りしめた。

魔導メーターを見つめる。

いま目盛はゼロの位置にあつた。

時計回りに一、二、三……目盛の一が一万魔導力場展開を意味する。

一〇、一一、一二を過ぎると表示が赤く塗られている、危険領域を示す目盛だ、

一二、一三、一四、一五。以上。

一五、絶対危険領域、一五。

その最高値を見つめつけながら、

「……闘うしかないんですね？」

？魔導の姫？と、彼女の？希望の悲鳴？と？

「……闘うしかないんですね？」

？魔導の姫？と、彼女の？希望の悲鳴？と？

「ミミヤは、自分自身に問い合わせるかのよつとつぶやいた。

「はい、曹長」

「姫の正体……やつぱりわからないますか？」

「はい、ドイツまで部下を派遣しておりますが、未だ不明のままです」

「きょうカグラさんが教えてくれた話、すぐには、やつぱり信じられないつくで……」

「無理もありません、ですが」

「いいよどむカグラを見て、ミミヤがやせしき微笑んだ。

「だいじょうぶ、大隊格納庫には盗聴器の類はないですよ」

「ですが我々の内偵調査の結果、ほほまちがいは無い、そう断言いたします」

「……ほんとうに？」

「はい、軍政異端審問局は本氣です、

大佐は、？魔導の姫の暗殺指令書？に署名を済ませています。

このままでは姫は、つさのインター杯のレース中、？不慮の事故死？を遂げる運命です

「そうなる前、に？」

「事故の起こされるまえに、曹長がお勝ちになつてレースを終わらせる意外、

姫を救える道はありません」

格納庫の壁、デジタル時計があつた、  
いま日付がかわった、〇〇〇〇（まるまるまるまる）時の電子音  
が、格納庫内に鳴り響いた。

## お風呂場の女子会／ホテル・コリスモールにて

コリスモールカフェの裏手にはちいさな林がひろがっていた。常緑樹の高木、ブルーべヴンの木立がほそく天高く、空に突き刺さるかのように鋭く伸びている。

木立に囲まれて、三階建ての古風な洋館があった。

ホテル・コリスモールである。

正方形の洋館は、中央が吹き抜けになつており、  
中庭を形づくつている。

一階の大浴場、すこし開いた窓から湯気が中庭へと漏れ出ていた。少女たちの笑い声が聞こえる。

四、五人が一度に入れるバスタブが湯気を立ちのぼらせている。初夏の深夜、おだやかな風が吹きすぎてゆく。

エリカはバスタブに肩まで浸かり、縁にあごを乗せていた。ロングヘアをタオルで巻いていた。お湯で熱つた額に、頬に、うなじに、

じんわり、汗が滲んでなんだか色っぽい。

A4サイズの紙を両手にもつてひたすら見入つていた。

Eペーパー。文字どおり紙状、極薄の防水型携帯端末である。紙面には、ネットでクレジット決済後、ダウンロードした雑誌が映っていた。

月刊ジュニアスクールガール の九月号だ。

特集は『夏本番！ 今年の夏こそ彼氏をゲット！ 必殺テク総特集！』

と謳つている。

「？姫つ？、なーに見てんのさつきつからつ  
キヤロルが威勢よく叫んでくる。

チハヤの小麦色の四肢と日焼けしていない白い貧乳に腰、背中を泡いっぱいにして、

ボディスポンジで洗つてやつている。

「うん、ちょっと、ね」

エリカは優美な眉根をすこしづまかり困惑げに曲げている。

『さあ狙つた獲物、いやいや彼氏にマニュアルステップで挙げたように、

危険な贈り物、ちゃんとあげたかな？

田の前でショーツを脱いで放り投げてやれば、オトコなんであつとこつ間にイチロロ！

あなたに夢中！ステップで書いたように、あなたが怒っているのがちゃんと伝わつてれば、女の子が主導権を握るのはカンタン！』

うんうん、と紙面の文字にエリカがうなずく。

「ほーんと、姫つてつぐづくマニアアル女子だよねーっ  
キヤロルもそいつてうなずいた。ゆたかな胸のまえで腕組みを

している。

チハヤがキヤロルの肩越しに恥ずかしげにのぞきこんできた。  
「なつ、なによつあんたたちっ」

キヤロルは大笑いして、

「今までヤローに見向きもしなかつたあの？魔導の姫？がねえーっ、

よりによつて初めてのオトコが審問獵騎兵？

なんのジョークよつづけ感じじやんつー

なあ？チハヤツ、そつこつがしがしとチハヤのお湯に濡れた  
髪の毛をなでぐり回す。

「い、痛いよ、キヤロルツ」

エリカは、いぢやいぢやしているふたりの少女を見ながら、

「そういうんじゃないし、ちがうし、遊びだし」「またまたあーっ、いまさら隠すなよっ」

「相手のマミヤくんはアンタの正体知らないんだから、かわいそうじゃない？」

ウチら魔導少女と、ウチらを狩るのが使命の獵騎兵、  
こりやあ叶わぬ恋だわーっ、ってか、フツーに考えて異性交遊許可  
証、絶対下りないよ？」

チハヤがふたりのそばに近づいてきた。

「たぶんね、姫はマミヤさんがね、一五連敗してクビになるのを待  
つていると思うの」

「あっ、そっか、マミヤくん？ カド番？ だつたつけっ？」  
「マミヤさんて私たちの？ 恩人？ みたいな感じだよね？」 だからな  
んだか複雑……」

チハヤがそういうと、キャロルの顔から笑顔が抜けおちていった。  
エリカは不敵な、それでいてなんとも苦り切った嫌そうな表情を  
うかべてくる。

それから、ふんつ、と無理矢理笑みをつくつて、  
「だからつジョークツだつて、私別にあいつの負け望んでないし、  
異性交遊望んでないしつ」

キャロルは、途端、そうはかんたんにダメされないぞ、つとそん  
な感じに邪悪に微笑んで、

「ただのジョーク？ そんだけシヨーツを犠牲にしたの、そんだ  
けのためにー？」

「そうよつ」

「ねえ姫、あの渡したシヨーツ、いくらした？」

「やつすいヤツよ、まえに買って一度も履いたことなかつた安物だ  
けど、それがなにか？」

ふたりの言い合いにチハヤが首を突つこんできて、

「あの、私このまえ姫の買い物つきあつたんだけど

」

「ちょつ、チハヤツ」

慌てるエリカを尻目に、キャロルが、

「なに？ そんでなによチハヤツ？」

「一万八千円のシルクの白いショーツ、買つてたよ、まちがいなくソレが渡したショーツだと思うの」

キャロルが、ニヤアーツ、とした笑いを見せてくる。

チハヤも興味津々にエリカを見てくる。

「姫のウソツキーツ、たつち悪うーつ」

キャロルがそうじつて笑いころげる。

跳ねたお湯とボディシャンプーの泡が宙に舞つた。

「な、なによつなんか文句あんのつ？」

そう叫ぶ 戦闘態勢に入った猫のよつな エリカの肩に、キャロルが腕を回してきた。

姫は一つ、惚れた男に一途一つ、ヘンな調子で彼女は、この夏流行りのラブソングの替え歌をつくつて、冷やかしてくる。

「なによつ、は、恥ずかしかつたんだからつ、渡したあと死ぬほど恥ずかしかつたんだからつ、やれるもんならキャロルもやってみなさいよつ」

「姫はあーつ、好きなオトコにはー、恥ずかしくつてもーつ、死ぬ氣でショーツを渡すーつ」

「なによそのへんな替え歌つ」

そこへ、浴室のホームセキュリティコンソールから、アラームが鳴り出した。

エリカとキャロルの売り言葉に買ひ言葉の口喧嘩がやんだ。

「んー、なんだろ？」

キャロルが立ちあがり、コンソールの画面を見る。

「げつ、尊をすれば姫にとつて運命のオトコ、マニヤヤ曹長がカフニのまえにきてるつ」

「え、ウソツ」

エリカの声がうわずつた。

「マジだよほらあつ」

キャロルが画面を指した。三人が見入る。

「マリヤ薔薇姫だった。ドアのまえでいつたりきたりをくりかえしては、

チャイムを押そうとして、ためらひ様子を見せてくる。

「や、やややだつ、どうしよう、早く上がんきやつ」

エリカが取り乱し始める。バスタブから上がり、速攻で体を拭き始めた。

キャロルが、にんまり、見逃さないとばかりに笑つてくる。

「姫ーつ、ステップ三の勝負服と下着はOK?」

「え、あつ、もちろんだいじょうぶつ」

「それと夏場の汗のにおいをおさえるひかえめなオーデコロンはー？」

「よ、用意したつ」

「マリヤくんが迫つてきたらー？」

「マツ、マニコアルには、ステップ三では、いまはまだ、キスと軽く胸にタッチ以上は許しちゃダメつて……」

そこで、そう、そこまで口を滑りじてから、

？魔導の姫？ことエリカ・ヴァンデル・メアは、うしろにいるふたりの視線に気がついた。

ゆつくり、ふりかえる。

キャロルの、してやつたり、のニヤ笑い、エリカといつ、勝てそうにないライバル出現による、チハヤの哀しげな潤んだ瞳……。

「なあに？この私に？？魔導の姫？になんか文句でもあるの？」

「…………」全力で本気モードじゃ————んつ、

姫エエエ————ツ」

「ち、ちがうつてなにバカいってんのキャロルッたらつ、わかつたつ、あんたこそ……さてはマリヤ狙つてんでしょう」

「はあ？ このワタシが？ そ、そりや負けてくれた恩義は感じてるわよ、でも」

「ほー、うやつぱつかけはそれじゃなこのよつ、やつて決まつてるわ」

「はあ？ なつ、なによーつ、いへり姫でも勝手なこといわせないんだからねーつ」

ヒリカとキヤロルは一絲まとわぬすつぽんぽんで、取つ組み合いで寸前の口喧嘩に突入してしまつた。

口ではおさまりきらず、ふたりは実力行使に突入した。

ヒリカがお風呂のお湯をキヤロルの顔にぶつかけた。

キヤロルがお返しとばかり、ボディシャンプーで泡の立つたスponジをぶん投げてくる。

ふたりの脇を、おなじくすつぽんぽんのチハヤが、そろそろ、と抜き足差し足忍び足で出ていく、ヒートアップしたふたりは気づかなかつた。

時刻は一一〇〇（まるふたまるまる）時をまわっていた。

睡眠時間の減少したこの時代といえど、下級生の、しかも女子の家を訪問するには著しく常識を欠く時間帯といえる。

なりふり構つてはいられなかつたのだ。

マミヤはいてもたつてもいられず、コリスモールカフュへと足をむけてしまつた。

あの少女に逢いたかつたから。

ひとつ、エリカの貌を見たかつたから、どうじつけもなく、見たかつたから。

赤レンガの建物、イングリッシュアイビーの蔓の絡まつた壁面を見上げる。

あんなものを放つて渡され、あんな別れ方をして、学校外でどんな顔をして逢えばよいのやら、わざわざ見当もつかない。

そういうふうに、時間だけが過ぎてゆく。

やはり、帰ろつ、そう思い、踵を返したときだつた。

かちやり、エントランスのドアがほんのすこし開いた。

マミヤがうしろをふりかえる。

開いたドアの隙間から、じーー、とチハヤがこいつらのぞき見ていた。

「あの、チハヤくん

マリヤが声をかけると同時に、

「好き……」

チハヤは蚊の鳴くトトロな声でささやいた。

瞳を潤ませながら、決意を固めた様子で眼力がとんでもなく強い。

「……チハヤくん？」

ぱたん、ドアが閉じられてしまつ。

音を立てるのを怯えているかのように。」

彼女のたった一言、不意の一撃を食らひ、ドアのまえに立ちすくんでいると、

またドアがすこしだけ開いてきた。

チハヤがやっぱり隙間から外の道路を、マリヤのほうを潤んだ瞳で見つめてくる。

「チハヤくん、あの

「好也」

また、泣きやいた。瞳が潤みすぎて泣き出す寸前である。

マミヤは頬を赤く染めながら、

いや、そういうことは、女子がだね、軽々しいわないほうが、

「チハヤは、平氣ですよ？」

え?  
」

私が、もしもまた暴走したら、呪符で拘束してくださいね、

# チハヤ、平氣

「チハヤ、くん」

マヤがしどろもどろになつた。

「なあーにいつとんじやあつ、こんのクソガキヤアアアアアアアアアア

アアアアア――――――ツ

キャラルの声だ、カフェの奥から響いてくる。

すかをすりしるからチハヤを糸交い縫めにした。

「た、助けてー」

どうにも抑揚の乏しい、頼りのない悲鳴を上げた。

「ひかれめな態度を見せておいて、私たちをさしあいて抜け駆けするとは、怖ろしい子つ」

別の声が近づいてきた。

エリカだ、彼女が遅れてエントランスに顔を見せた。

「ハ、エリカちゃん、助けてー」

チハヤの哀願に、

エリカは、

「転校からコツチ、まだ一週間のつきあいだけど見抜けなかつたわ」

「お仕置きだからねチハヤツ」

キヤロルがバスローブの胸元に、チハヤの顔を押しつけながら立つ立てていつてしまつた。

カフエの正面、マミヤとエリカ、ふたりつきりになる。

道路の街灯に照らされ、マミヤがエリカを直視できずに、立ちつくしていた。

エントランスの間接照明の灯りの下、エリカがバスローブを着てそっぽをむいている。

湯上がりの彼女は、頬を薄く桃色に上氣させ、

白い肌には湯の滴と初夏の汗をじんわり、にじませている。

「こんな夜になんか御用？ 番間宮さん？」

「獵騎兵だ、いや、その」

マミヤは、足もとに視線を落とした。

「きみの顔が、見たくって、それだけで」

自分自身、どんな顔をしていいのかがわからない。

夢中で言葉を探す。

「見れて、よかつた」

彼女は黙りこんでいる。

「じゃあ、帰るから、こんな遅くに悪かつた、ごめん」

「別に、悪いなんていつてないじゃない？ なんでいちいち謝るの

よ

エリカは瞳を逸らしながら、つっけんじんにいつてきた。

「「」用件は？ ほんとは何をいいにきたの？」

詰問され、マミヤは貧乏振りのよう体を動かしてから、それから。

顔を、あげた。

「近々、おおきなレースに……出るかも知れないんだ」

「そう？ お相手は？ その魔導少女は強いの？」

マミヤは肩をすくめて、

「うん。 とても、とつても、強い」

「貴方たしかカド番だったわよね……」こんどは本気を出すおつもつ？

それともまた

「これで失礼する」

エリカが、まだ何かをいいかけようとした。

カフェのなかから、ホームテレфонの着信ベルがけたたましく聞こえてきた。

それを合図にしたかのよう、マミヤは走りだした。カフュのほうをふり返ることもなしに。

## エリカのほんとうの想い

カフェに通話してきた相手は、魔導の姫こと、エリカ・ヴァンデル・メアのスponサー企業の重役だった。

### テレフォンのビデオ画面、

その中年男は肥満した体を特注サイズのエグゼクティブチェアに無理矢理押しこむようにして座っている。

オフィスは控えめの間接照明で薄暗い。

エリカには、ビンに無理矢理押し込められたフォアグラが暗闇で笑っているように見えた。

### カフェの一階、

テレフォン端末のまえで、彼女は体のシルエットを男に見透かされないよう、

サマーセーターとロングスカートで防御していた。

この男の、いつも少女を值踏みする目つきが大っ嫌いだったからである。

男はフォアグラのトリュフソース添えに舌鼓をうちながら上機嫌に話していた。

「いやあきよはめでたいすよ姫、難航していただつきのレースの対戦相手ですが、

ニッポンの獵騎兵どもが何人かエントリーしてきております」

「それはどうもミスター・シャハト、で、こんど私の倒す犬つこのはどんな連中?」

「まず前回瞬殺されたシゲミツ中佐が最初にエントリーしましたぞ」

「あら、学習能力ないのね、日本のトップエースさんてば」

シャハトという名の重役は、エントリーしてきた幾人かの獵騎兵らの名前を挙げていった。

エリカが長い髪をかき上げながら、

つざつたそつに聞き流してゆく。

「最後に……なんの冗談だか、G?で力ド番をむかえてる若手がひとりHントリーしましてな」

彼女の髪をくじる手がとまる。

ついにやつちの、マミヤの言葉が甦つた。

「うん。 とても、とっても、強い?あのひとつはそつこつた、強い、魔導少女。

「そのワンちゃん、名前は?」

「マミヤ、階級は曹長、戦績一勝一四敗、

一五連敗した獵騎兵は分限免職されるのが世界の公式ルールです、ニッポンリーグでもたしかそのはずですな、この若僧なにを考えているのやら

「ラストに、私に負けて引退の花道でも飾るつもりかしらね」

シャハトはエリカの言葉に大笑して、またフォアグラをフォークで口に運んだ。

「ええと、ではマミヤ曹長のHントリーは拒否でよろしいですな?」

「受けて立つわっ」

叫んだ、エリカは叫んでいた。

声の裏返りそうになるのを懸念にこらえながら。

シャハトは、フォークのフォアグラを皿に取り落とした。

啞然とした様子で、

「ですが、姫とこの曹長ではレースが成立するかどうか、オッズもどうなることやら、我がヘルマン&ハイネマン社としましては、

G?の名に恥じない、後世に語り継がれるレース展開を希望してい

る次第でして」

「私が憐れなその力ド番獵騎兵殿に引退の華を添えて見送つてあげる、

この魔導の姫が直々によ、  
H & H社はいつもどおり前宣伝にお金をかけて盛りあげてくれれば  
それでいいわ」「

自然と口調が早口になつてくる。少女の心の泉が波立つ。  
フォアグラの材料の犠牲となつたガチョウたちがその泉で一斉に水  
浴びを始めて、

少女の感情の襞に波紋をひろげまくつてゐる。

フォアグラども自重しろよ、エリカはつぶやいた。

「は？ 姫？」

「なんでもないわ、とにかく私のおしりを追いかけようつてゆうバ  
カ犬さんたち、

全員葬つてあげるから、ミスター・シャハトはしつかり契約を結ん  
でください、

よろしいかしら？

シャハトはエリカの剣幕に驚いた様子だつたけれど、  
あの姫の最終決定である、  
逆らうことはできない。

愛想笑いをうかべながら、姫のおつしゃるとおりに、  
そういうて通話を切つた。

一二歳の少女はカフェのホールでひとり立つてゐた。

周囲に誰もいないのを確かめる。

くすくすつ、とつれしさのあまり忍び笑いを漏らし始めた。  
ロングスカートのポケットからリストタブレットをとりだす。

保存してある動画を呼び出した。

G？の初陣で圧勝したマミヤ、その少年が満面の笑顔を見せる勝  
利インタビューの海外配信動画だった。<sup>プレス</sup>報道記者たちに囲まれた少  
年はよろこび、栄光に輝いて見えた。

エリカはうつとり、眺めやつてから、  
「ねえマミヤ、魔導少女を気遣つて一四連敗してくれていままで  
りがとう、

私が、この魔導の姫が、

貴方を苦痛から解放してあげるからね、  
私に負けて晴れて政府の番犬をクビになつたら、もつだいじょうぶ  
つ、

貴方が獵騎兵をクビになれば、私と貴方の異性交遊許可証だつて下  
りるわ、

つてゆーかトーキョー都にお金積んで下ろさせてみせるから」

少女はうつとり、動画を見つめながら、  
「ほんつと、貴方つてば、実力を隠してきたからつて、  
よつによつてカド番のときこの私に挑戦を仕掛けてくるなんて、  
調子のりすぎつ、おてんばさんだぞーつ」

さらにリストアの画面に頬ずりしながら、  
「もつつ、まさかとは思つけど、魔導の姫のほつに恋しけやつたん  
じやないでしようね？

世界の頂点に立つ姫のホウキをへし折りたくなつちやつたの？  
姫のカラダ、見たくなつちやつたの？  
だとしたら浮氣だぞ？ ダーリンツたらつ、  
この、うつ、わつ、きつ、モ、ノツ」

エリカの妄想はとまらない。

インター杯勝利後の自分のイメントレをやり始めた。

彼女のイメージのなかで、マミヤ曹長は屈辱に全身を震わせてい  
る。

エリカがその前に立ちはだかつている。

そしておもむろにローズレッドのヘルメットを脱ぎ捨てるのだ。  
彼女は膝を屈して両手をひろげ、負けたことになつている  
マミヤのマネを始めた。

声色をかえて、

「君がつ、ま、まさか、魔導の姫がエリカッ、君そのひとだつたなんて知らなかつたつ」

彼女はすかさず体の立ち位置を入れ替える。魔導の姫たる本人役を始めました。

「そう、この私が魔導の姫……貴方の力量では一〇〇万年ほどHントリーが早かつたようね」

マミヤ少年にチエンジ。

「俺は、なんて、浅はかで、スカした、身の程知らずのスツトロードコイだつたんだろうつ」

両手で美しい黒髪につつまれた頭を搔きむしる演技をするエリカ。またしても立ち位置をチエンジして、「おかわいそうに……貴方、獵騎兵以外になんの取り柄もないことだし余生は二ート確定だわ」

ぐるりとふりむいて、

膝を屈し、両手を高々と掲げながら、

「ああ、お、俺はこれからどうすればいいのだろうかーつ」

エリカはまるでその場にマミヤがいるかのように、<sup>エア</sup>空気マミヤをやさしげに抱きしめるポーズを取つた。

「だいじょうぶよ、私の可愛いワンドちゃん、

私とい、異性、異性、交遊を、コホンッ、

この私が貴方をこれからズーとつ、やつ、養つてつてあげるからつ」  
いつもの冷め切つた仮面を脱ぎ捨て、可愛らしい一一歳の恋する女子の子の貌になる。

ほつぺたを真つ赤つかにして、両腕を自分で自分の体に巻きつけている。

ひとりハグ、である。

エリカは瞳を潤ませながら、声をかえるのもついに忘れ、

「……ひ、姫ーっ」

チエンジ。

「いやっ、エリカ、つて呼んでくれなきゃイーヤーなーのーっ」

「一人二役を演じ終えた。

ひとりハグの両腕に回す力が、ぎゅっ、と強まる。

腕の中美しい小ぶりの胸が、ふわん、と形をかえる。

「…………ふふっ、私つたらどうしよう? どうどう直つちやつた

「上氣した頬に両手をやる。恥ずかしさのあまり だつたら最初  
つから小芝居なんかするなよって話なんだが 貌を覆つて、未だ  
幼いながらも未発達の美しいボディラインをふわりふわり、と揺す  
りまくつた。一二歳とは思えない、

艶のある腰とおしりのくねり具合である。

ふわふわダンスが始まつた途端、カフェの裏手のドアから爆笑が  
おきた。

キヤロルとチハヤである。

ふたりして今まで気配を殺して 魔導少女の能力である  
気づかれぬよう、エリカの小芝居の一部始終を見ていたのはまちが  
いない。

キヤロルはドアをガシガシぶつ叩いて涙を流して笑つてゐる。  
チハヤはまだ幼い小麦色の体を、くにゃん、と曲げて笑いの発作  
に全身を震わせていた。

ふたりが抱き合つて、笑い死にの発作をどうにか食いとめる。

キヤロルがマミヤの声音で、

「ひつ姫、ひめえええええつっつ」

チハヤがエリカの口真似といつにはあまりにお粗末だつたけれど、  
「いやなー、ちはや、じゃなかつたー、えりかつ、て呼んでくれ

ないと、いやなのー」

その舌つ足らずな棒読み演技に、キャラルが腹を抱えながら、「きやつ、ワタシつたら、ジツじょつ、といとつ色ボケで頭のまつがいつちやつたあつ」

ふたりして涙を流し何度も笑いころげた。

姫のふわふわダンスの真似をしながら。

少女たちのおしゃりがその都度、ふわんふわん、悩ましい動きを見せる。

エリカは、素の無表情になつた。

なんとゆうか男の子が良くない本を見ながら、良くないことをしている最中、ママに部屋のドアを開けられ突入を許してしまつた、

そう、あの世紀の瞬間の表情となつている。

男の矜持と女の矜持、崩壊するときは、

まあ、どっちも似たり寄つたりなものなんである。

その顔つきのまま、つかつかとキッチンへ入つていつた。

「あれ、姫ー？」

キャラルが笑いを引つゝめる。いぶかしんでいふと、

世界に「冠たる魔導の姫は出てきた。

肉切り包丁一本持つて。

「お前ら口口す」

いつた、彼女は言い切つた。

声が半ば本気っぽかつたりする。

?世界の姫?の貫禄をすでに取りもどしていた。

姫は、口口す、ぶつ口口す、そづぶつぶつ、と物騒なことをつぶやきながら突進してきた。

肉切り包丁一本を水平にして

これはマジで刺すときの恰好だ

刺突の姿勢になつてゐる。

裏手のドアにだらしなく寄りかかっていたふたりが身を翻す。

一目散にホテルにむかつて逃げだす。

混じりつけ無しの絶叫を上げて。

エリカは包丁もつたまんま、呪法誘導ミサイル弾もびっくりの速  
さ、

ひたすら全速力でふたりを追尾した。

そのうつくしい貌に薄笑いをうかべながら。

## 怒りのナホ

夜空を見上げれば、無数のエアマシンたちが飛びかっていた。その放つ光の奔流が流星のように尾を引いている。マミヤは遙か高空を仰ぎ見るのをやめた。

見飽きた人工の天体ショーだ。

おおきなマロニエの並木道をエアポートを目指して歩いてゆく。中学の夏服が汗を吸つて不快だつた。

暑さのせいではない、嫌な脂汗が流れてくる。嫌でも、甦つてくる、カグラ護民官との会話が。この汗は、その記憶のせいだった。

押しつぶされそうになる、彼女の言葉に、それゆえのフレッシュシャーに。

だから逢いにいった、エリカに逢いにいった、なんとしても逢つて、あの貌を一目見たからだ。逢つたからってどうなるとゆうもんでもない。そんなことはよくわかっている。

わかつてはいたけれど。

重苦しい物思いにふけるのをやめた。視線に気がついたのだ。

ふたつの視線に。

マロニエの大木の陰にふたり、少年と少女が、佇んでいた。こちらを見据え、歩いてくる。

突拍子もない、実に奇妙な組み合わせのふたりだった。

「ナホ、どうしてここへ？」

私服に着替えたナホは一五歳の女子力真っ盛りのきれいな瞳をむけてきた。

マミヤのまえで腕を組んでふんぞり返る。

どうやらずいぶんとお怒りの「」様子だ。

ポニー テールを揺らしながら、

「」のナルシスバカ中尉から話は聞いたわ

「口を慎みたまえ、暴力女」

ソルベ中尉が彼女のとなりに立つてゐる。

こいつだけは實に鬱陶しいので、マミヤは無視を決めこむことに

した。

ナホだけを見ながら、

「ふたりでいっしょに帰ろう、ナホ？ もう時間も遅いし」

「おい、こり、僕は無視されるのが大嫌いなんだつ

案の定、ソルベが突つかかつてくる。

「自称エリートは黙つてよつ」

「なんだとつ、せつかく教えてやつたのに、この暴力女つ

ふたりのけんか腰の言い合ひが、疲れたマミヤの脳細胞に追い打ちをかけてくる。

「なあナホ、頼む、落ちついて聞いてくれないか」

マミヤのうんざつした聲音に、

ナホは引きつった笑みになつて、

「ああああ、あんたわかつてゐる？ 審問獵騎兵がよりこによつて、

あの穢らわしい魔導少女のサバトに足繁く通うとか、正氣なのつ？

「ミンゴのヤツに困つかけられんのあつたりまえじゃないつ、

その上、審問局から八百長の疑惑もたれたらどーすんのよーつ？」

「だから誤解だ、ナホ」

「あつ、そう？ じゃあその誤解をこれからみんなで解きにこいつ

じやんつ」

「ちょっと、待つてくれ、何いつてるんだ」

マミヤは猜疑心に満ちた視線をソルベに送つた。

彼はニヤつてこつちを見返してくる。

無視を決めこんでいるわけにはいかなくなつてきたようだ。

「彼女になにを吹きこんだんだ、中尉殿？」

「なにって、ホントのことや、豊原くさん

「あいくわよふたりとも

ナホが率先して歩きだす。

サバトヘと、あのユリスモールカフェへ、と。

マミヤは硬直してふたりの後ろ姿を見やつた。

いまから？ ハリカに再び会つていつたいなこをどういふ話すれば

いいんだろうか。

魔導の姫は動きやすい軽装に着替えていた。

体のラインのつきあがつたキャミソール、それにヒーリのフレアスカートを履いている。

カフェのカウンターの中、両手をほそい腰にあてがい、勝ち誇つた笑みをうかべていた。

「まだよ、あんたたち、まだまだこれからよつ

キャロルとチハヤは、パジャマ姿のまんま、カウンターのワインザーチェアに座らされている。

キャロルが、もう何度目かのギブアップを告げてくる。

「ねえ姫、ウチらが悪かったからもう、カンベンして……」

その声は、どこかうつとりしたような、哀願のような、官能的に潤んだ色を帶びていた。

「ダメよ、この程度で許すほど私は甘くないんだから」

「チハヤはまだまだ、平気だもん」

強がつてゐるのか、それともホントに平気なのか、チハヤはけつこう余裕のおつとり顔だ。

「強情な子ねまったく、ならコッチは？　コッチならビリよつ？」

そういうて、チハヤのまえに新しい皿をあいてやつた。生クリームたっぷり、

チヨコレートブディングのラズベリー添えである。

キャロルがブディングを横目で見て、一筋、白いきれいな頬に脂汗をしたたらせる。

恐怖した貌になる。

チハヤは、握りしめていたフォークをあいて、スプーンを手にとつた。

「平気だもん」

スプーンで円筒形のブディングをじつり崩して豪快に口に運ぶ。

焦げ茶色の塊が、ココアに卵黄にクリームに砂糖という高カロリーの怪物がちいさな口に吸いこまれていった。

チハヤは美味しそうに笑みをつかべた。

彼女はこれが九皿目だった。

キャロルはチハヤから眼を背け、自分の前に積まれた七枚の皿を見つめた。

「あした、体重量るのが死ぬほど怖い」

エリカは酷薄そうな笑みをうかべて、

「まだまだこれからよつ」

キャロルに新しい皿を用意してやる。

新鮮イチゴをふんだんにのせた生クリームとパイ生地の四重奏、ユリスマールカフェ特製ナポレオンパイであった。

「ワタシの大好物……八枚目で出すなんて卑怯よ姫つ」

エリカは、キャロルから奪い取つているリストアブでとつととクリジット決済を済ませてしまった。

これでキャロルはカフェでナポレオンパイを買ったことになる。

「嫌なら生ゴミに捨てるだけ、あんたの買つた大好物のナポレオンパイをね」

「姫の意地悪つ、鬼畜、外道一つ、オトコに平氣でショーツ渡す痴女——つ」

場がしん、と静まりかえる。

「……ダブルよ、ナポレオンパイ、ダブル、さあ、一皿いつぺんにいつてみようか？」

エリカがもうひとつパイをキッチンからもつてくる。

口を滑らせたキャロルは顔面蒼白だ。

チハヤが横から顔をのぞきこんでくるようにしてきて、

「キャロルつてば自滅型だよねー」

涼しげにいった。

「「つるさあーーーー、もつ喰つてやる、体重がなによつ、喰つてやるつてんだよ！」

キヤロルは半べそかきながら、しゃにむにフォークを突き刺す。口に押しこんでいった。

「そりよその調子」

エリカは、魔導の姫 とゆつよりかはほとんど暴君

名にふさわしい態度でふたりを見下ろした。

するとチハヤと田が合つた。

彼女は姫に対して、

「平氣ですよー」

にこひ、と笑い返していく。

そういわれて黙つてゐる暴君、いやいや姫ではなかつた。

「チハヤにはブルーベリーパイデコレーション全部載せ、生クリーミ添えを丸々ワンホールいつちゃつてみようかつ」

それを聞いて、チハヤはうれしそうに微笑んだ。

キヤロルは耳を塞いで震えている。

エリカがチハヤのリストアブでクレジット決済しようとしたとき

。 来客を告げるアラームが鳴つた。

三人が、カウンターの壁に掛かつてゐる監視モニタを見た。映つてゐるのは少年ふたり、少女ひとり。

「なんで？ どうしてマミヤつたらもどつてきたの？？」

エリカがうれしい悲鳴を上げる。

キヤロルはワインザーチェアを蹴つ飛ばして立ちあがる。

エントランスへ猛ダツシユして、

「マミヤーッ、ウチらを助けてえつ」

泣きながら内側のガラス扉を開けようとした。

チハヤが冷静な口調で、

「キヤロルー、部外者の女の子がひとりいるから？顔バレ？しちゃ

うよー」

「え、ああ、ヤバいじゃん」

キャロルはガラス扉のまえでふたりをふり返った。

チハヤも席を立つ。エリカにむかって、

「ねえねえ私たちのリストアブをね、返して欲しいの」

「あ？ ほらよつ」

姫はエントランスのほうに視線を釘付けにしながら、

ふたりのリストアブを無造作に床へと放り投げた。

チハヤはキヤツチすると、キャロルにリストアブを渡してやつた。

キャロルはすぐさまクレジットの利用記録をチェックし始めた。

「ワタシの今月の小遣いがあつ」

キャロルが叫んだ。

それでもちやつかり、食べかけのナポレオンパイの皿を手にする。

ふたりは身を隠すため、そそくさと裏のドアからホテルへと帰つ

ていった。

エリカがオートロックのドアを解錠してやる。

ナホが先頭切って、ホールに飛びこんでくる。

カフェの内装を一瞥して、すぐさまカウンターのエリカに照準を

合わせてきた。

ナホとエリカは、相対した。

ふたりの間、カウンター越しの一メートルちょいの空間だけ、異様に熱くなってきた。

ふたりとも、無言のままだ。

ただひたすら周りの空気だけが、加熱してゆく。

ソルベは悠然とテーブル席に陣取る。

マミヤはとくに、ふたりの女子からすこし離れたところで、所在なげに突つ立つていた。

少年はいま、加熱クッキング中のオープンレンジのまつただ中にいるのだった。

その証拠に、エリカもナホも、貌を紅潮させほっぺたをざんざん膨らましているではないか。

レンジでこんがり灼かれてゆくパイ生地のよつこ。

美味しそうな感じにほどよくふくれつ面の女ナリ名に比べ、マリヤはしなびた春菊のようだつた。

レンジの熱で水気が抜けて、苦みだけ残つた不味い春菊。

実際、少年の顔のほうも春菊みたいに苦り切つていた。

口火を切つたのは、ナホからだつた。

「一三年次のクツソガキの分際で、うちのクラスの男子にちよつかい出してくれちゃつたのがこりつてゆつから来てみれば、アンタがそうなのかなあつ？」

「さあ？ なんのことかしらセンパイ？」

「このバカ中尉から話は聞いてんのよつ、うちのマリヤのことよつ

「おい、バカは余計だぞつ」

ソルベがテーブル席から飛びあがる。

「空気は黙つてなさいよつ」とナホ、

「黙れば？」

とエリカが同時に叱りつけるようにいつた。

ソルベは怒りのふりおろす場所を求めるかのよつこ、カフェのか、視線を彷徨わせた。

エリカがナホを品定めする視線で上から下まで見つめて、

「うちの、マミヤ、いまそりつたわね？ センパイ？」

「ええ、いつたわよ、それがなによつ」

エリカは長い髪の先端をもてあそびながら、

「なにか、そう、なんでもいいわ、センパイと、

この審問官さんとのあいだになにか特別なものもあるのかしら？」

「あるわつ、マミヤとは腐れ縁だからいろいろ知つてるものつ、

こいつの嫌いな食べ物、アンタ知つてる？ あたしは知つてるんだから、

春菊よつシユンギクーツ」

エリカは、くすくすつ、とそれは愉快そうに笑い出した。

「教えてくれてありがとうセンパイ、彼が店にきたときは料理に入

れないよつこするわ、春菊」

「はあーつ？ あたしが来させないからつ、マリヤにて一度とサバトには来させないわつ。

彼は立派な異端審問獵騎兵なんだからつ、

こんなとこで油売つていいわきゃないのよつ

「でも、カド番だつたわよね、審問官さん？」

エリカは腕を組むと、流し田をマリヤに送つた。

ナホは憤懣やるかたない様子で、

「なにかいいかえしてやりなさいよつ

「……ナホ」

「なによ？ アンタオトコでしょつ、

そんなシュンギク無理矢理喰わされたよつな顔してんじやないわよ

「

マリヤは、ますます立ち枯れた春菊のよつに腐つて弱りきつた表情になつてしまつた。

ソルベがそこで、ひとつ咳払いをしてきた。

「おいナホ、忘れてるものがあるんじやないのかい？」

ナホがソルベのほうをふりむく。

舌打ちして、プリーツスカートのポケットから折りたたんだ書類をとりだしてきた。

ひらん、とその紙きれを開いて、エリカの眼前に突きつける。

「異性交遊申請書よつ

マリヤたちの中学校事務局に申請済み、そつ印鑑の押印された申請書だつた。

申請した日付は本日のもの。

申請者はナホ、交遊対象者の名前はマリヤだつた。

署名欄には、当然ナホのほうは自筆でサイン済だ。マリヤの署名欄だけが空欄となつてゐる。

「あとはマリヤのサインをもらひだけよ、

「これで学校で受理されれば晴れてあたしたちは、恋、恋つ、び、び

とつ」

「晴れて恋人同士になれる、ってわけね

エリカがいつた。いいよどむナホになりかわつて。  
けれどそれで引っ込むナホではない。

「……ムツかつくわね、エリカ・ヴァンデル・メアッ、なにその  
余裕な態度、

あんた帰国子女だからって日本のがツコの上下カンケーなめてんじ  
やないの？」

「センパイこそ大胆ね、本人の彼氏をまえにして、  
？私を抱いて欲しいの、マリヤ？って宣言したも同然よね、その、  
紙きれ見せたつてコトは？」

「このつ、こんのクソガキッ……」

ナホは顔面を可愛く真っ赤にして、言葉に行き詰まってしまった  
様子だ。

マリヤも、そうだった。

フライパンでソテーされ切かつた春菊のよつに熱に火照りかえつ  
ていた。

ソルベひとり、怒氣を漲らせていた。

あの強氣で押すナホですら氣圧されている場の展開に、当初の予  
定の外れだした雰囲気に我慢のならない様子である。

エリカはまるで一国の姫、いや女王のような貴祿で、三人を見回  
して、

「審問官さんも照れすやつてるようだし、この雰囲気じゃいいだせ  
ないわよね、本音を」

ナホはエリカを睨みつけ、

それからマリヤに恋い焦がれる女の子の視線を送った。

マリヤはうつむいて、唇を噛みしめてくる。

「マリヤ……」

ナホがすがるよつて、催促するよつて甘こ声を出す。

「ひつしましょつ、センパイ方」

ヒリカは、裁定を下す女王よろしく厳かにしゃべりだした。

「わつきも話したよつて、ここの審問官さんはカド番をむかえてるわ、つぎのレースこそ必死に勝利を田指して頑張るつとあるでしじうね、だから彼が勝つたら、

そのときはその？私を抱いてくださいと惨めに懇願する申請書？にサインをする、

それでいいんじやないかしり？」

場が、しん、と静まりかかる。

カフュの空氣は、つこさつきまでオープンレンジの灼熱地獄、二〇〇にも高温調理されていた。

ところがそれはいま、急転直下、粗熱もとらずに極寒のマグロ専用冷凍貯蔵庫に放りこまれたようになってしまっていた。

「ねえセンパイ、その？惨めに抱いてくださいと懇願する申請書？を」

「そのいい方やめてよつ」

エリカは、蒸気爆発寸前の圧力釜と化したナホを、ゆつくり、ほそめた瞳で凝視して、

「やだ、私としたことが「めんなさいねセンパイ、

その？私のこころを、肉体をも思つがままに犯してください、ってママヤに土下座で告白したも同然の書類？にサインした以上、センパイは当然この審問官さんの勝利のほうを願うわよね？」

ナホはふるふる、全身に怒りと羞恥の震えを奔らせながら、

「当然、でしょつ？ 好きなひとの」

わらわ、ヒマヤのまつを盗み見る。ママヤは赤面してうつむいたまんまだ。

「好きな男の子のがんばつて勝つまつて儲けるに決まつてんじやないのよつ」

ソルベが慌てて、

「おいナホいいのかそれで？」「

ナホはエリカにありつたけの嫉妬の眼差しをむけながら、

「当然でしょっ、勝つのを願つてなにが悪いのよっバカ中尉っ

「」の能無し曹長は一四連敗中なんだぞ、カド番だぞっ、

負けるぞ、つぎのインター杯も負けてクビに決まつてるんだぞっ

「マリヤのことそれ以上侮辱したら殺すわよっ

ナホの背中から殺気がじわり、

オーラとなつて立ちのぼりだした。

ソルベは悲痛なうめき声を出して、

「おー、醜長、君の問題だぞ、君がほつきとしないからいけないんだ、

何かいたまえっ」

「そつとマリヤ、お願ひ、つきで勝つてくれるとなつ？」

マリヤは、額の汗をハンカチでぬぐつた。

エリカがミネラルウォーターをタンブラーに注いでカウンターにさしだしてくる。

マリヤが彼女を見つめて、

「……ありがとう」

「どういたしまして、ア、ナ、タツ」

エリカが腰をくねらせながら、

自分のハンカチでマリヤの頬をふいてきた。

つゝとつとした流し田を、思わずぶりな瞳でマリヤを見つめてく

る。

マリヤもナホ同様、蒸氣爆発寸前の顔となつてしまつた。

「……なに、してくれてんだテメ」

ナホの声は陰にこもつて、もつ殺人音波の域に達し始めている。

エリカは、そんなナホに、

「私は彼が負けようとも構わないわ、傷心の彼を受け入れてみせる、

あら？ これ、恋に恋する域を超えた？ 愛？？

つてやつかも知れないわね」

「じゅ、一三のクソガキの分際でつ……なにふざけた」とを又力して……」

「あらいやだ、まだ一一ですナビ？」

ヒリカとナホが睨みあつ。

カフフの空氣は再び、マグロの死骸のならぶ冷凍庫から、華やぐパイ生地膨らむオーブンレンジに逆戻りになつてきた。

「ナホ、ヒリカ、俺は勝つ」

マミヤに、三人の視線が一瞬で集まる。

「マミヤッ」

ナホのうれしげに甘えた声といつたら、

それこそオトコなら速攻抱きしめたくならへり、初々しいものだつた。

ソルベがおおきくうなずいて、

「よくいってくれたぞ曹長、つぎの対戦相手は決まつてゐるのか？」

ヒントリーは？ 大佐も絶対G？ でも最弱の相手をチョイスしてくれるだらうから、

安心して良いと思つて、うんつ

この勘違い野郎は放置することにして、マミヤは先をつづけた。

「エントリーはもう申し込んである」

「誰だい、その最弱の可哀想な魔導少女は？ うん？」

ソルベがにんまりと笑んでくる。

ナホは先をうながすように何度もうなずいてくる。

「審問局を通して、相手の魔導少女のスポンサー企業に話がいつてるんだ、

もうすぐ内定の返事がスポンサーから返つてくるはずだ」

ナホはインター杯のシステムに詳しいわけではない。

瞳を輝かして、マミヤの話のつづきをまつてこる。

ソルベは、ちがつた。

「……曹長？ ははつ、馬鹿をいつちやいけないな、

スポンサー付きの相手といえばG？の中堅以上の手強い相手だぜ？

君程度のエントリーなど、論外だ、即座に却下されるのに

マミヤは、この面倒くさいバカの説教を片手でさえぎった。

自分の手首に巻かれたりスタッフに見入る。

「返事のメール、もう来ていた

ソルベは大笑いしだした。

「どこのどいつだよ、そんな世間知らずの間抜けなスポンサーは？」

「ドイツのヘルマン&ハイネマン社だ」

マミヤの答えにソルベが、無表情になる。

どうやら思考停止に陥ってしまったようだ。

その社名、世界中の猟騎兵で知らない者など皆無だつた。

そして、その世界的大企業の後援する魔導少女が、いつたい誰であるのかも。

ナホが固まつた中尉殿を不審げに見て、

「なあに？ その会社つてば誰のスポンサー？ ねえ相手の魔導少女は？」

マミヤは、ヘルマン&ハイネマン社からの正式な通知メールと、軍政異端審問局の競技杯出場指令書の添付されたメールとにらめっこをしていた。

それからナホを見つめ答えた。

「G？の？魔導の姫？だよ、ナホ」

マリヤの乗りこんだエアマシンはえらく揺れて不快な空のフライトとなっていた。

パイロットは三十過ぎぐらいだらうか、マリヤよりよっぽどオトナではあるけれど、自分の仕事に熟練した一人前のオトナとはお世辞にもいえない腕前だった。

首都上空の乱氣流の中を平氣で突つこんでいくのである。男は乱流に乗るのを楽しんでいた。

若者によくいる？空の暴走族？あがりのタイプの男だった。民間タクシー会社に就職したのに、若じときの氣分がまだ抜けきれていないのだろう。

マリヤは、揺れまくるキャビンの席で疲れきった体をあずけいた。

「パイロットさん、氣流の上、飛んでもらいませんか？、酔いそうなんです」

若い男はただでさえ悪そうな目つきをさらりと鋭くしてきた。

「つるせえよ中坊が、ガキのクセしてこんな時間によ、夜遊び朝帰りか？」

「ああ？ 生意気な口たたいてつとお空に放り出すぞ」

曰つき同様、口も性格も残念な人物のようだつた。

「でもまあアレだ、オメエみてえな陰気くせえガキは彼女のひとりもできたためしねえだろ」

そういうてコクピットでゲラゲラとひとり笑いだした。

笑いながら、テレビのチャンネルを一四時間放送の音楽番組に切りかえる。

大昔にメガヒットを飛ばしたクラシック・ロックが流れ出す。

マリヤもよく知っているくらいのメジャーなナンバーだ。

男は曲を口ずさみながら、

「おいガキ、この曲知つてつか？　俺らの生まれるまえのグレートナンバーだぜ」

「ええ、知つてます」

「へつ、ショーンベン小僧でも知つてんのかよ、まあいいや、このバンドが現役のこりはなあ、あの胸くそ悪い魔導少女つてのも異性交遊許可証なんてのも無かつたんだぜ？」

あのクソッタレの異端審問局のクソどもだつて影も形も無かつたんだ、信じられつか？」

「ええ、そうですね」

「けつ、おめえらガキでもガツコの倫理で習つてんだり？　異性交遊許可証？」

「ええ、習いました」

「おめえらショーンベン小僧は十年早いとしてだな、俺らみてえなれつきとした大人でも、恋愛に許可のいる時代になるとは思いもしなかつたぜ、つたくよ

「まつたくですね」

「この曲の時代はなあ、自由だつたんだよ、ロックだつたんだよ時代そのものがよお、え？　好きな女に告つてふられで、恋愛がこつくらでも自由だつたんだよ、自由つ

「ですね」

「魔導少女がよ、あの魔女のガキどもが出てきちまつたせいだ、全部あいつらのせいだよ、あいつらな？　恋愛感情こじらせつと魔女のビヨーキになるんだぜ、始末に負えねえよ、だからだよ、イチイチ国が恋愛取り締まる羽田になつたんだよ、

審問局の軍人どもがエラヤツコにぱりくせつてられんのも魔女のせいだよ、

おい聞いてんのかショーンベン？

「ええ、そのとおりだと思いますよ、ただ、恋愛説はもつとも有力な仮説に過ぎません」

「ちつ、素直だといいてえとこだがテメエなんだか生意氣だな？まさか審問局に俺のことチクるとか考えてんじゃねえだろ？な？あ？」

「そんなんつまらない」と、しません」

「つたぐ、とにかくエアマシン乗りナメてんじゃねーよつて口トよ？それに比べて猟騎兵のガキどもな？」

奴らクソガキのせいでスゲえマシン乗りやがつてよお、俺にも乗せろつて話だよ、中坊のガキですら魔導一輪乗つて魔女のケツあつかけてんだぜ？」

勝てばご褒美にオソナのハダカ拌めてよ、ボーナスも出るんだぜ、ガキの分際で生意氣ぶつこいてると思わねえか？」

「ええ、酷い職業だと思います」

「だろ？ でもよ、へへつ、ちょっとと思つんだよなあ、この俺様にも魔導石適性があつたらな、つてよ、したら……まあ、なんだ、猟騎兵つて人生も悪かあねえ、つて思つワケよ」

「そうですか？」

「バカだろテメエ？ おいショーンベン？ 猟騎兵はスゲえマシンぶつ飛ばして、

勝てばオソナの着てるパンツィアーヒンむいてよ、ハダカ見放題、賞金付きの人生だぜ？ ガキのうちから」

マミヤは眼を閉じた。

今夜はとりわけ、都内のスラムで暴動の火の手が上がつているのが目についたからだつた。

少年にとつて、正視できる地上の光景ではない。

男がコクピットのサイドウインドウから地上を見る。

「今夜もど派手にやつてやがんなあ貧民どもがよ、

俺様もよ、獵騎兵になつてりやあ、あの下の高速を魔導一輪で、  
いつかイイインチとよ、バカども蹴散らしてかつ飛ばしてたのにな  
あつ

マミヤは眼を閉じたまま、

「機長さん、エアマシン乗りになりたかつたんですか？  
それともほんとうは獵騎兵になりたかつたんですか？」

ガラの悪い男は黙りこんだ。

「おいションベン、なにいつてやがるんだ？」

「機長さんの話を聞いてみると、獵騎兵のまつに憧れでいるような  
気がしたんです、

よしたほうがいいです……あんな仕事、誇りもなにも、ありはしま  
せん」

男は呆気にとられた様子だった。

間をおいてから歯をひんむいて笑い出した。

「傑作だぜションベン野郎つ、テメエさてはアレだろ？  
流行りのゲームでよ、ヴァーチャルゲームで獵騎兵をジョブに選  
んでよ、

そいつになりきつちやつて、その気になつてんだろ、だろ？、図星  
だろ？」

そういうてまた愉快そうに嘲笑を浴びせてくる。

操縦桿を派手に動かして乱気流に乗るのを楽しんでいく。

マミヤは疲労と睡魔にとらわれていた。

コリスマールカフエでのこと。

くり返し、何度も、ついわざ今までの情景が思いだされて仕方な  
かつた。

ナホ。泣かせてしまった。

彼女は泣いた。？魔導の姫？を相手に勝てるわけがないよ、そう  
いつてカフエのホールにへたりこんで泣き崩れたのだった。  
エリカは、あのとき無表情だった。

彼女にもやはり思われたんだろうか？

魔導少女たちと間近に接してきた彼女のことだ、思つたはずだ、身の程知らずの馬鹿、だと。

帰宅するとき、マリヤはナホに送つてあげるよ、やういたわりながら申し出た。

あつせい、断られてしまった。

『アポートで暗、バラバラのマシンに乗りこんだのだった。あのめんどくさい中尉殿もなにかを喚き散らしていたつて、自分も絶対エンタリーするとかなんとか、そんなことを。マリヤとしては疲れるだけだから、ろくに聞いてやけいなかつた。

「クピットの音楽番組が中断された。

『報道フロアから、臨時ニュースを申しあげます』  
張りつめた女性の声。

マリヤは重たいまぶたをなんとか押し上げて、画面のまづい田をむけた。

テレビが報道スタジオに切りかわっている。緊張した面持ちでアナウンサーの女性がスタジオのデスクに座っている。

画面上、スタッフの指示らしき指の動きにつなぎいている。おいなんだよこれ、おいつ番組中断すんなつ、とパイロットが怒鳴りだした。

氣流で、がくんつ、とおおきく機体がまた揺れる。

『いま入ってきた最新情報によりますと、

都内と神奈川県の大規模なふたつの反政府デモ隊が合流しました、暴徒化した群衆が警察機動隊の手薄な箇所を突破、

南東京市周辺の市街地で放火と略奪がおきております、

未確認情報ですが、つい先日発生した魔導少女覚醒事件の容疑者の少女の自宅付近が……この地域を中心に放火がおこなわれている様子で』

「マミヤが、ハーネスに固定されていた上半身を跳ね起こす。

「ああ、やだねえ辛氣くせえ、どつかほかのチャンネルねえかな」  
男がチャンネルを切りかえてしまつ。

「マミヤは慌てて、

「報道番組のチャンネルにしてく、ださい、暴動の詳細が知りたい」  
「ああ？ シヨンベンなに又かしてんだよ？ 家帰つてママと朝イチのニュースでも見てろや」

マミヤのリストラブのバイブレーターが震動する。

テレビのことはひとりあえず放つて、画面に見入つた。

「リカから、だつた。

『マミヤツ、いまどこつ？』

普段とはちがう、必死のエリカの表情、そして声。

「エアマシンに乗つて帰宅中だつた、チハヤちゃんは？」

『無事だよ、ご両親も避難してだいじょうぶだつたけど

『カフ』のほうは？』

「こじは平氣」

どつしづ、マミヤは全身に冷や汗をかき始めていた。

かろうじて皆の無事を知り、安堵のため息をつくことができた。  
『でも、チハヤがね、いま泣きだしていて、とっても不安定になつてゐるの』

チハヤちゃんの？ 魔導少女の精神状態が、感情が不安定に？

それは、アーデルハイド暴走に陥る予兆を孕んでゐる。

『審問局と護民局に通報は？』

『うんつ、わつきしたからつ、カフ』に応援部隊送つてくれるつて

つ

『俺も戻る』

エリカは何度も何度もうなづいてくる。

『お願ひマミヤ、早く来てつお願いつ』

画面の中のエリカが左横を見た。なにか叫ぼうとしたところで、  
映像は途切れてしまつた。

マミヤが顔を上げる。

パイロットの男が、コクピットのシート越しに机のコスタブをのぞきこんでいた。

「おこションベン、いまの子すんげえカワイコひきじゅねえかよ、テメエまさか彼女じやねえだらうな？」ああ？

「お願いします、すぐ元のHアポートにもどってください、いきますぐ」

「はあ？ バーカッ、あそこはモゾの暴れてる近いじゃねえかよ、もどるわけねえだろが！」

マミヤはスマージャケットの魔から、？云家の宝刀？をとりだすこととした。

一瞬の迷いも無かつた。

権力を振りかざすよつて、いままで使つたことはなかつたけれど。出した、身分証明書を。

一つ折りの身分証を開いて、パイロットの鼻つ面に突きつける。「軍政異端審問局のマミヤサヤカです、有事につきのHアマシンを接收します、

このマシンに物的被害の出たときは、

軍政府に対して損害賠償請求の権利が貴殿には認められています」

田つきの悪いパイロットは、口をあんぐりと開けながらマミヤ曹長を見てきた。

シンボンベンくせえ中坊のガキを乗せたはずだと思つていたら、その正体は自分の敬愛してやまないロシクミュージシャンの生まれ変わりのお姿だった、

彼にとつてしてみれば、まさにそんな風な驚天動地の展開だった。

「……あ、あんた、その歳でつてコトは、天下の異端審問獵騎兵…

… まあ？」

「早くもどつてください、接收指示に従わない場合、

貴殿に刑事罰を科さねばならなくなります、お願ひです早く！」

「は、は、はいこつ、お、おつしやるとおりにいたしますです、

はいいいいっ 「

男が金切り声を上げ、すぐさま機体をターンさせる。

「やつ、曹長殿、質問がありますっ」

マリヤはそれどころではなかった。

キャビンのサイドウインドウから地上を食い入るように見始める。

「あのう、曹長殿っ、魔女のパンツァー脱がすのって、やっぱサイ

「一の気分ツスかねっ？」

「機長早くっ、無駄口たたかいでっ」

「はいっ、わかりました、わかりましたから俺が審問局の悪口いつたの密告しないでねーーっ」

男は田つきも顔つきもがらりとかえた。

気流に乗つて遊ぶのもやめ、カフェにむかつて操縦桿をきる。

マシンはフルスピードで暁の空を飛行してゆく。

マリヤの見つめる眼下には、暴徒の放火した暗赤色の点がつまづきとつながり、線と化しつつあった。

マシンの飛翔する高空にまで、猛煙はひろがりを見せ始めていた。

## 無力感

マミヤがエアマシンで駆けつけたとき、空から最初に見た光景は、ブルー・ヘヴンの木立の倒壊だった。  
？外の世間様？とつながるカフェと奥まったホテルとのあいだの木立、

高木が空に突き刺さるように鋭く伸びていたのに。  
それがいま、何本もなぎ倒されている。

まるで怪物が暴れていった痕のようだつた。

そう、？怪物？が

タクシーの機長はとても親切になつてくれており、  
ホテル・ゴリスモール屋上のかいさなエアポートにマシンを着陸させてくれた。

おそらくは異端審問局のトラブルに巻きこまれたくないのだつて、マミヤを降ろすとすぐさま離陸して去つていった。

ホテルの玄関前のちょっとした広場や、  
中庭やらにまことに当局の軍用エアマシンが数台、强行着陸している。

「みんな無事でいてくれっ」

三階建ての 人の姿の見あたらない ホテルの螺旋階段を駆け下りながら、

そう祈りざるを得なかつた。

マミヤはホテルの正面玄関から外へと飛び出した。

眼前、軍政異端審問局のエアマシンが駐機している。

ランディングライトの強烈な閃光とマシンのエンジンのジェット噴射で吹き上げられた砂利で、

両眼を開けているのもつらい。

審問局の普通科歩兵部隊の一等兵が すいぶんと若い青年だが

マミヤの姿を見て怒鳴り声を上げてくる。

「貴様はなんだ？ ホテルの客か？ 子どもは中に入つていりつ ジョットの乱流がうるさい、耳に痛いぐらいに。」

自然に大声となる。

マミヤは無言で一つ折りの身分証明書を提示した。

一等兵の青年は瞬時に居丈高な態度を引つこめ、「失礼しました曹長殿つ」

敬礼してくるので、マミヤも答礼した。

話すために顔を近づけると、上背のある一等兵は身をかがめてくれた。

「状況を教えてください」

「はっ、死傷者はゼロ、建物損壊は無し、

容疑者？ 魔女？ は第三級アーテルハイド暴走につき、呪法拘束中でありますつ」

マミヤは内心、ほつと安堵するとともに、顔に没面をつべつた。

？魔女？ は、魔導少女への差別用語だったからだ。

いや、自分こそ、異端審問局においては自分のほつこそ？ 異端？ かも知れないな、

マミヤはふと、そう思つた。

審問局員のあいだでは、差別用語はありふれたオフィスの会話でも平然と使われているのだ。

現にこの一等兵は、魔女、の単語を発音するとき、

迫害する者特有の不快なイントネーションを挟み込んでくる。

「お気をつけください、仲間の魔女が中隊長に猛抗議の真つ最中でしてつ、

人権護民局のゴミ連中も駆けつけてきますつ」

一等兵の言葉にマミヤの胸がざわついた。

真つ先にキヤロルの顔がうかぶ。

そしてエリカのことだから、彼女もキヤロルに付き添つてゐることがない。

最後に護民局。

この地域の統括責任者はあのカグラ護民官だ。

マミヤが皆の居場所を尋ねようとしたとき、エアマシンの胴体ハ

ツチが下方に開いてきた。

「ふつざけんじゅねーよ、チキショウツ」

キヤロルだ、彼女が怒鳴りながらハツチに姿を見せた。

ネグリジェタイプのパジャマの裾が風にあおられ、はためいてい

る。

所々破けて泥だらけだった。

その両肩をカグラ護民官につかまれていた。

「なんだよ、離せよつアンタ護民官だつ、ウチらの味方なんだろ

つ、

ちつとは役に立てよ」

「まあまあ、お願ひだから落ちついて、キヤロル

カグラはいかにも情けなさそな愛想笑いをうかべていた。

そう、学校での？あの演技？の表情のほうをいまは見せていた。

「出でいけつ、俺の機体からひとつととその魔女を連れ出せ、空気が

穢れる」

中隊長だろう、野太い男の罵声がマシンの奥から聞こえてきた。  
「とにかく、護民局といたしましては、異議申し立てをしておきま

すので」

カグラは平身低頭、ペニペこと頭を下げている。

キヤロルはそれを見て、母国語らしき言葉でなにか悪態を叫んだ。

カグラが、こちらの視線に気づいた。

マミヤと田が合つ。カグラは一瞬真顔になり、また再び？頼りない護民官？の表情にもどつた。

彼女がキヤロルを抱きかかえるようにして、ハツチの階段を下りてくる。

そして、ふたりのうじろからゆつくり、美少女が現れた。

エリカ・ヴァンデル・メアが。

肉体のラインを露わにしたキミソールとフレアスカート。

どちらもやつぱり泥だらけだった。

スカートの裾を押さえつけながら、ハツチを下りてきた。

エリカとキャロル、美しい漆黒と緑の瞳が一斉にこちらをふりむいた。

「マミヤッ」

キャロルが叫んで、カグラの手をふりほどけた。

マミヤは躊躇した。

審問局員たちの眼前なのだ、キャロルから親しげな態度を見せられた、ただ、それだけ、それ自体がすでに危険であり、命取りだった。

審問局からすれば、魔女と通じてしまった？ 叛乱分子？ の姿、その証拠以外の何物でも無い。

そのとき、カグラが救つてくれた、瞬時にキャロルを後ろから羽交い締めにしたのだ。

「離せつこの役立たずッ」

なおも叫ぶキャロルを護民官はねじ伏せながら、マミヤの田の前を素知らぬ風にとおりすぎてゆく。

ふたりは取つ組み合いをしながら、ホテル・ヨリスマールの正面玄関へと入つていった。

マミヤはただ、見送るしか術はなかつた。

ふり返ると、目前にエリカが立つていた。マミヤの身分証明書を、ちらり、見るふりをしてから、少年の両眼を、凝視していく。

長い髪の毛が、風にあてられその貌にかかる。

ミルク色の綿を思わせる肌に降りかかる幾筋かの髪の束。

少年は、手を動かし、やさしく髪を整えてあげたい衝動をかろうじてこらえた。

「そんなにあの子のネグリジェ姿がお気に召したのかしら、？ 審問官さん？？」

「自分は、？ 異端審問獵騎兵です、お嬢さん？」

「今回の暴走を起こしたのは、つちのサバトに避難を始めた子よ、名前はチハヤ、貴方、エリートの端くれよね？ 助けてくださいない？」

「そのチハヤさんの処遇は？」

「警察病院再入院、一四時間の監視下付を」

エリカの言葉に、マミヤはうつむいた。

自分には、決定を覆す権限などなかったからだ。

「自分にはどうすることもできません」

「やだわ、頼りにならないエリートサンね」

くすり、と微笑みをもらしてくる、じつとなにか、訴えかけてくる笑顔を見せる。

「一等兵が少年と少女を交互に見ながら、

「曹長殿、彼女は単なるサバトの管理者の娘に過ぎません、お気を掛ける必要など」

「下つ端一等兵は黙つてなさいよ」

「貴様、審問局隊員にむかつて舐めたことをつ」

「一等兵の怒りの言葉を、マミヤは右手を挙げ、軽く制した。

「昨今はメディアの目もつるすこと聞いています、貴官の態度一つが中隊の名誉に直結します」

「しかし曹長」

「民間人の些細な非礼は、大目に見てやつたほうが貴官の中隊によりいいそつの箇がつきます」

「一等兵の青年は虚を突かれたようで、

慌てて計算をめぐらす大学生の顔つきになつた。

「…………まあ、そりですね、たしかに曹長がそつおつしゃるんなら……」

「一等兵は気持ちの落としどころを見つけられたらしく、怒りを引つこめた。

そこへ彼の野戦服のリストラブに中隊本部からの連絡が入ってきた。

『第一小隊、撤収作業をおこない、速やかに母機前へ集結せよ』

一等兵の顔に緊張が走る。

マリヤに敬礼し駆け足で去つていった。

敷地内に散らばっていた第一小隊の兵士たちの動きが活発になる。そのあいだに、中隊長の座乗するエアマシンが垂直離陸を始めた。轟音、砂塵、何種類もの航空ライトの煌めきを地表に叩きつけながら、

機体は高空へと昇つていった。

敷地の別の場所に駐機していた第一小隊の軍用エアマシンも、カフエの外、

並木道に緊急着陸していた、中隊の他の機体も順次離陸していく。

「チハヤ、連れて行かれちゃつた」

エリカは、ぽつり、つぶやいた。

「彼女の実家はどうなつたんだ」

エリカは空を見つめたまま、

「全焼しちやつたつて、家族はとっくに避難していたから無事だつたけど」

中庭バティオのほうから、また離陸音を響かせて、人権護民局のマシンも飛翔していった。

マリヤがそれを見ながら、

「護民局は？ かばつてくれたのか」

「だめね、『コミニ』ってあだ名だつたかしら、あの女護民官、

中隊長やら審問官やらにあおどおど頭下げて、チハヤの拘束措置の緩和を頼み込んでいただけ」

マリヤは無力感に苛まれた。黙つて、？演技を押し通してくれた？カグラを見送つた。

空が明るくなつてきている。

長い夜だった。

マリヤはコリスモールに、このサバトにきょう未明だけで都合二

度も訪れてしまった。

疲労だけがつのつてゆく。

救いを求めるように、かたわらにいる少女の横顔をのぞき見た。

表情を消して悲しみを押し殺しているエリカ。

マミヤは朝焼けのなか、彼女を、なおもある種、

威厳を失わずにいる少女のたたずまいを見つめていた。

疲れ果てた少年にとって、少女のこの横顔だけが救いだった。

この歳下の少女の、朝の陽の光の下、太陽をも圧倒する輝きの瞳

が、

きつく結ばれた、ほんのり紅い唇が。

それは少年にとって、たしかに救いだった。

その重役室は広々としていた。

抑え気味の間接照明が床から天井をほのかに照らしている。全体的に暗い部屋だった。

中央、巨大なデスクと権力の象徴のようなエグゼクティブチェアに男がふんぞり返っている。

エリカがつけたあだ名はフォアグラ野郎、本名はシャハト。ヘルマン&ハイネマン社の重役である。

彼は、いま四皿目のフォアグラのトリュフソース添えを平らげるのに夢中だった。

部屋の壁際には三次元立体映像の広告が投影されている。広告は高らかに謳っていた。

『ヘルマン&ハイネマン社は魔導少女の更生のため、インター杯を後援しています。がんばれ、走れ、魔導の姫！姫とともに我が社も走りつけます』

『白々しい宣伝だな』

厳格そうな男の声が聞こえてきた。  
シャハトのものではない。

声の主は、デスクの上の大型端末のモニタ上に映っている。たつたいま、守秘回線でビデオ通話がつながってきたのだ。白髪を丁寧に整えた、生粋の軍人タイプの容貌。

マミヤの上官、あの軍政異端審問局の？大佐？だった。本名は一握りの軍政府高官しか知らない。

コードネームで？R大佐？か、または階級のまま大佐などと呼ばれている。

マミヤやソルベを指揮下におく第一異端審問獵騎兵連隊の連隊長

職に就いている男だ。

「いや、これはこれは手厳しいですな大佐」  
シャハトは、へりくだる笑みを露骨にうかべ、一切れフオアグラを口に運んだ。

美味そうに咀嚼して飲み下す。

『？あと何回？だ？』

「先ほどエンジニアチームから連絡がきましたよ、  
一回です、まちがいなくです、  
大佐、姫があと一回希望の悲鳴を発動させた瞬間、  
魔導爆燃機関は暴走、絶対危険領域に突入したまま大爆発します。

そうなるようつにあの小娘のマシンに摩耗した部品を仕込んだのです  
から

もう一切れ、フオアグラを口に放りこんで、

「ん、美味い……つきのレースこそ、

姫には？栄誉ある事故死？でもつて彼女の常勝不敗神話に華を添え  
ようではありませんか？」

絶対危険領域。

魔導メーカーのあの、赤く塗られたゾーン。

その最大値を振り切ると、彼女自身の魔導パワーとマシン本体燃

料タンクの魔導石との？対消滅？が制御不能に陥ってしまう。

魔導防御兵装のおかげで外からの防御は鉄壁だ、爆燃機関の大爆  
発でも彼女は無事だろう。

がしかし、パイロットとマシンとの対消滅が暴走したら話はちが  
う。

彼女の美しい肉体は、体中から血を噴きだして崩壊するのは避け  
られない。

モニタの中、大佐はつぎつぎとペーパーの書類に決裁を与えな  
がら、

『？プラチナチケット？の倍率はどうなつていい？』

「ええと、お待ちください」

シャハートはデスクの引き出しの電子錠を解錠した。

中から紙幣一枚分程度のおおきさのEペーパーをとりだす。

それは金の卵だった。

その？プラチナチケット？には「バイインストールされた文字がうかんでいる。

『魔導少女迎撃競技杯 結果予想投票券 グレード？

ターゲット：魔導の姫

エントリー中の迎撃者：五騎

サーキットコース（予定）スタート：千葉県木更津金田インター

チエンジ

ゴール：東京都芝浦パークリングエリア

コース種別：公道

総距離：三四・三キロメートル』

このようにペーパー上段にこんどのインター杯の基本的な情報がデジタル表示されていた。  
そして、下段。

『購入者の予想したレース結果：魔導の姫のマシンリタイア  
現在の倍率：四〇三万一八一九倍』

『貴方の賭け金：一〇万円 現在世界中でこの予想をしているのは  
貴方一名です』

あの魔導の姫が、マシントラブルでリタイアなどという、  
途方もないレアな予想に賭ける者は世界をあいていまいこ一名しかいない、

そうゆうわけだ。

もしもまかり間違つて、ほんとうに姫がリタイアしたそのときには、

一〇万円×四〇三万倍で四千三十億円の払戻金を得ることになる。  
「いやはや倍率は四〇三万一ハ一九倍ですぞ、万より下の倍率も含めれば」

『そんな端金はどうでも良いのだ、

購入者は露見しないよう万全を期してもらいたい』

「心配ご無用です、スイスのプライベートバンクを使い、  
ダミー会社を経由して偽装は完璧に手筈を整えていますぞ」

シャハトはそういうて、したり顔の笑みをうかべる。

笑みながらフオアグラを、

ガチョウを無理矢理肥満させてからとりだす脂ぎった肝臓料理の最  
後のひと口に齧り付いた。

「太らせてから、処理する……勝ちつづけてきて、処理する……い  
や、

なんとも、フオアグラと魔導の姫、似た者同士ですなあ、その味わ  
いも絶品ですぞ」

エリカが聞いたら怒りで瞬殺モノのセリフを吐いて、

シャハトはさらに高笑いした。

大佐は最後のペーパーに決裁をとると、おもむろに葉巻をとり  
だした。

サイズは小ぶりで味の強い、高級品だった。

シガーカッターで吸い口を切りそろえ、ガスライターで火をつけ  
ると、

口中でゆつくり、極上の煙を味わっている様子だった。

『若干一一歳の魔女の娘が、七一連勝で得た巨万の富に囮まれ暮ら  
している、

病氣でいつ暴走するかも知れぬ小娘ごときがな、

この私ですら、首都を荒らしておる暴徒どもの気持ちがわからんで

もない、

愚民が暴れるのも無理はない、酷く荒んだ時代だと、最近、とみに  
そう思うのだ』

『まつたくもつて、おっしゃるとおりですなあ「

『魔女どもはおとなしくホウキをへし折られて泣いておれば良いの  
だ、

無駄に勝ちすぎる身の程知らずな、ふざけた魔女は……』

大佐は静かに煙を吐きだした。

『身の程知らずの魔女には、この世から』退場願おうか』

あくまで、職務上の任務を遂行しているだけ、

そんな風な乾いた口調だつた。

「大佐のご協力があつたればこそですなあ、  
山分けした配当金で私は二ユーハードニアに別荘を購入して余生を  
満喫する予定ですよ、

大佐はいかがなさる』予定で?』

『審問局の秘密資金に充てる、

なんとしても魔女を暗殺する秘密部隊の結成予算を得なければなら  
んのだ』

「ほつほつほ、ご立派なお志ですなあ『

大佐は、この俗物スノックを絵に書いたような、  
フォアグラの塊のように肥満した重役に、なんの感情も見せない視  
線を送りつけた。

『すべては社会の治安維持のため、市民の安全のためだ』

大佐は、回線を切つた。

エリカが服を脱ぎ捨てたとき、マミヤが味わった試練について

ホテル・コリスモールの正方形の中庭<sup>パティオ</sup>から見上げる空は、三階建てのホテルの建物に切りとられて、やっぱり澄んだ青い正方形に見えた。

地上から、まるで天空にうかぶ水色の四角いプールを眺めている、そんな、不思議な錯覚を思いおこさせるものがあった。

中庭のおおきさは、ちょうど二五メートルプールがすっぽり収まるくらい、

それくらいの広さがある。

中庭の北側には、十人も入れば満杯になる程度のちっちゃいプールがあった。

空同様、澄み切った透明な水をたたえている。

初夏の昼下がり、さわやかな曙光を浴びて、水面はキラキラと輝いていた。

溶けたクリスタルの結晶が乱反射しながら、真っ白に光り、うねつていていたみたいだった。

マミヤはプールサイドのビーチチェアに身をあずけていた。折りたたみ式のキャンバス地の感触が、疲労した体に心地よい。

「結局徹夜してしまったわね」

エリカが近づいてきた。ワゴンテーブルを押してきている。アイスレモンティーのセット一式が載っていた。

彼女は泥汚れのついたキャミとフレアスカートのまんまと着の身着のままだった。エリカは彼にアイスティーをさしだして、プールサイドに座りこんだ。

両のふくらはぎまで無色透明な水の中に入れる。

ばしゃばしゃ、水よりも透きとおった色の太ももを大胆に動かした。フレアスカートが揺れて、太ももの上のほうまで見えそうになり、

「見ないでくれる?」

「気づけば、少女が一いちらをふりむいていた。

慌てて、視線を外す。

アイスティーを飲む。

口中がからからに乾いているのを、意識した。  
会話の糸口を、話題を探した。午前中、さんざんふたりで話し合  
つたチハヤのことしか、やっぱり思いうかばなかつた。  
キヤロル、そうだ、チハヤちゃんの見舞いにいつたキヤロルはどう  
しているだろうか?

マミヤは、タンブラーに注いでもらつたアイスティーの琥珀色の  
残りをじっと見つめながら、

「……えっと、キヤロルから連絡はあつたのか?」

「さつきね、警察病院に着いたつて知らせてきたわ、  
チハヤとは面会謝絶で会えなかつたつて……いま、病院のロビーで  
寝ずにがんばつてくれてる、

チハヤに会えるまで帰つてこないつて息巻いてた、

それとタクシーのエアマシン、

いまは有事だからつて、運賃五割増しで請求されたつて怒つてた

「彼女らしい、マミヤが微笑んでつぶやくと、  
エリカも、こくん、とうなずき返していく。

いきなり、マシンガンの連射音が遠く、彼方からかすかに響いて  
きた。

エリカが不安げに、遠くを見透かす瞳をつくる。白い両の太もも  
の動きがとまる。

「警察の武装機動隊がデモ隊の残党狩りをしているんだよ  
「鎮圧されたのかな?」

「審問局から連絡があつた、国軍が神奈川方面に投入されたみたい  
だ」

「さすが獵騎兵さん、治安にお詳しいのね」

「初めてだな、獵騎兵と呼んでくれた」

「Hリカは なんだか大人びた仕草がとっても彼女の雰囲気に合つていたけれど 両肩をすくめて見せた、軽い感じで。

「審問官で、そんなにお嫌いなの？」

「獵騎兵にしたって、嫌いだよ、こんな職業

「だから、一四連敗してきたってわけ？ カド番になつてクビになりたかつたから？」

マミヤは答えるかわりに、アイスティーを一気に飲みほした。

「なのに、？魔導の姫？のヌードは見たくなつちやつたってわけね？」

マミヤは琥珀色の甘い液体を盛大に噴きだした。

咳きこみながら、

「なにを、急に」

Hリカは両の瞳に蠱惑的な挑発の色をたたえてマミヤを、じっと、見据えてくる。

少女の双眸のその力にあらがうことができず、視線をプールへと逃がしてしまった。

「あら？ だつて、姫に勝つもじじや無かつたのかしら？」

「ほんとは、もうクビになつてただの中学生にもどるつもつだつたんだ」

「ムキにならなくつてもいいのに」

「なつてなどいない」

「魔導の姫が来日した途端、

その子のオールヌードが見たいから、隅々まで余すところなく、その目に焼きつけたいから、ホウキをへし折りたくなつちやつたから、

「だから気が変わつた、そうなのね？」

「そうゆういい方は……ないだろ？」

エリカは水辺に視線を投げた。

なぜかはわからない、妙にか細い声で、

「好きなの？ 魔導の姫さまのこと」

「……あこがれ、そうだ、あ、憧れていたつ、世界最強といわれてる魔導少女に」

「そう？ それだけ」

「やつだよ」

「マミヤ、ねえ？ 自分の強さに、自信ある？」

マミヤは唇を舐めてから、

「無い、といえば、ウソになる程度には……」

「魔導の姫様に、勝てそう？」

「勝つ以外に道はないんだ、どうしても」

「そんなに彼女を脱がしたいのね？」

「ちがうつ、断じてちがうんだつ」

マミヤは、なんだか妙な汗をかき始めていた。  
暑さのせいではない。

アイスティー、飲もうとした。

すでに手にもつタンブラーは空っぽだった。  
やけっぱちになつて、中の氷を噛み碎いた。

「ナホ先輩と、魔導の姫、どちらが好きなの？」

いわれて、こんどは氷の欠片で喉がむせてしまつた。  
激しく咳きこみながら、

「きみ、なんだかおかしいぞ、どうしたんだ、なにが言いたい？」

「別に」

「……その、服

マミヤは声の裏返らないよう、慎重に発音しながら、

「服だけでも、もう、着替えたほうがいいよ、よごれてるし」

少女は、つんつ、と鼻を澄まして、

「ほんと、はつきりしないひとね」

「うやいなや、泥のついたキャミソールを脱ぎ捨てた。

フレアスカートも引きずりおろして脚から抜いてしまつ。

マミヤは両手にタンブラーを捧げ持つて そう、まるでついて聖杯を見つけた敬虔な信者のように 一一歳の少女の肉体に目が釘付けになつてしまつていた。

薄いピンク色のブラとショーツ。可愛らしくフリルの装飾で縁取りされている。

彼女がこちらを向いた。ショーツのフロント部分、淡いピンクの刺繡レースになつていて。

半分、シースルーだった。大事なところの肌が見えそうで、見えなそうで。

「なにをそんなに凝視しているの？ 魔導の姫様やナホセンパイがとっても可哀想」

「凝視などしない」

少女はおかまいなし、ランジヒローのまんま、プールに飛びこんだ。

美しい黒髪を濡らしながら、

光の乱反射で真っ白に輝く水面へと浮きあがつてきた。

「きみは男子の前で平氣でそういうことをするのか？」

怒り、そうだ、怒りのよくなにかが、

急激にふつふつとわき起こつてしまつた。

少女は、頬に掛かる髪をほそい指で払いのけながら、「貴方が汚いモノは脱げとゆづからよ、おかしなひと着替えろ、つていつた」

少女はくすり、と笑顔をこぼして、プールサイドに両腕をついた。

「そんなんにゆづなら着替えてくる」

上半身を水面から起こした。

そして見た、マミヤは見た、少女のショーツ、

両の太ももの付け根の中心が、フロントのシースルー部分が水で肌に、

ぴたり、張りついてしまつていて、

「あ、上がらなくつていいからつ

全力で視線を外した。

ほんとうに、渾身の理性を総動員して、両眼をきつとつぶつた。失明しろといわんばかりに、まぶたを閉じた。

「？ どうしたの、獵騎兵さんたら……」

少女も、腰の下、自身の大切なところに瞳をむける。

瞬時にプールの中にその身を沈める。

「見たでしょーーっ」

声が一二歳の少女のそれに変貌していた。

恥ずかしさの塊、甘く切ない吐息とともに叫んでくる。

これが、本来のこの子の、少女の声、なんだうつ。

「……見てない

「ウソーっ、いま、間があつたじやないっ」

「き、きみの、せいだぞつ、そんな恰好でプール入るからだつ」

少女の返事は、ない。

マミヤは全身を熱い血潮の塊に、サマージャケットにデニムを着

ているにもかかわらず、

心臓が体のあちこちからはみ出して空氣に触れる痛みを味わつていた。

火照りは、激痛を伴う快樂に近かつた。

恐る恐る、両眼を開けてプールを見た。

エリカは肩まで水に浸かって、じーっ、ヒマミヤを睨みつけている。

両の頬は痛々しいくらい、

可愛く真っ赤っかになつてしまつていた。

「……てくれる？」

「アリヤは耳を澄まして、

「え？」

「お願い、だから、先に建物の中、入っててくれる？」

切なげに、少女は懇願してきた。

アリヤはもう、アウト、だった。

心臓が耳の隣で脈打つてるかのよう、手のひらのひらに鼓動が聞こえてくる。

体中の血液は、熱病に冒された患者みたいに煮えたぎつて水分が全部あらかた蒸発したかのようだ。

少年は、声を出すことすらできなくなつてきていた。

なんとか一、二度、うなずいてチョアのキャンバス地から身を起こした。

途端、また座りこんでしまう。

動けない、堅く、あんまりにも堅くなつてしまつていていたのだ。チームの前を突き破ろつとするぐらっこ。

「どうしたの……」

少女がちっけやべ、泣く泣く聞かれてくる。

「ごめん」

少年もつづむつて、いつしょしつけんめい、謝った。

いま、中庭に地獄の穴が開いていたら、

少年はよろこんで飛びこむつもりだった。

その自信がある。現にいま、体中を羞恥心の業火で灼かれているではないか。

地獄の炎に投げこまれたほうが、まだ少女に軽蔑されなくて済むとゆうものだ。

少女の、息を呑む声が聞こえた。

よりいつそう少年の類が、朱に染まつてゆく。

少女は、くすつ、と、それこそ うれしそうに、楽しげに

笑い声を漏らしてきた。

「ごめん」

そうゆうしか、ほかにない。すべてのボキヤブラーーが、脳内から蕩けて消えてしまっていったからだつた。

「オトコの女って、ほんとにサイテーね」「あん

やがて、ふるいわづ、とそれはほんとにおかしそうに、十一歳の少女そのものって感じの笑い声がおこった。

少女は笑いをなんどたりも

そういうで、手で水をすくいとアマビエ細胞にしきつぶつかけてあ

「今更」

そんなマリヤを見て、また少女はかるやかに、のびやかに笑い声を上げるのだった。

ねつ

「こやらしい、とつても口くちいやらしい獵騎兵さんだもの、大  
きに見てあげるわ。

すっかり、余裕をとりもどした調子でいつてくれる。

そのくせ少女のほうにしたくて  
あいかれらす全員肩まで  
ルに浸かつていたけれど。

ついでにきまでと打ってかわって、その白い肌

らないんだから

健気に、懸命にそつと告げてくるかのようだった。

「リカの想い出、ふたつで充分ですよ。」  
ベルリンへ

「ねえまだあー？」

エリカが呆れ声とゆうか、愉悦の含み声とでもゆうのか、なんとも生き生きとしてうれしげに声を上げ訊ねてくるのが、マミヤはたまらなく悔しかつた。

彼女はプールの中、うじろをむいてやつぱり肩まで水に浸かつている。

彼はプールサイドのビーチニアに座りっぱなしだつた。

七月の陽光が照りつけてくる。

それにもかかわらず流れる汗は、焦りをともなう脂汗だつた。少年の青い欲望は、履いてるடੈਨੈਮのせいでぴっちりと抑え込まれ行き場がどこにもない。

ないもんだから、猛り狂つたまんまだつた。

暴発こそ、しなかつたけれども。

マミヤは徹夜のナチュラル・ハイな気分も手伝つて 疲労して るのにもかかわらず

気持ちをどつこにも手のつけられないレベルにまで昂揚させていた。

脚を何度も組み替えつづけている。

いま、また組み替えたとき、ヒリカが、「ほんと、サカリのついたヒロワソロちゃんは始末に負えないわね」「誰のせいだと思つてる？」「さあ、誰かしらね？」「マミヤはどうとう、根負けした。

「エリカ、頼みがあるんだ」

途端、びくん、と少女の両肩が震えた。

「……なに？ なによ？ ヘンな頼みとかだったら承知しないんだから

すこし語尾がおかしかった。

なんだか照れて、うわざつている感じがする。

まちがいない、彼女だつていつぱいいつぱいなんだ、マリヤは思つた。

それが、なんだか無性にうれしかつた。

「そんなんじやないつ、だから……話題を、なんかいい感じの話系の話題を頼む

「なに？ その無茶振り」

「なんでもいい……そつだ、きみの昔のこと、やつことこのの想い出話とか、どうだ？」

彼女がゆつくり、「ちりむきなある。

ふたりはよじやく、その瞳同士で互いの存在をたしかめあつた。エリカはプールサイドで両手を組んで、かたちの良いちいさなあじを上に乗せた。

中庭の芝生と、素焼きのテラコッタの石畳とをぼんやり、眺めやつていた。

マリヤは辛抱強く、脚を組み替えながら待つていて。

いい風が吹いていた。

水面が揺れて、少女のクリーム色の貌に眩しく光が乱舞する。

「……私のまだ幼いころ、ドイツでの話よ、

パパに立食パーティーに連れて行つてもうつた

マリヤは額に流れる汗をぬぐいながら、

「いいもんだな、いかにもヨーロッパらしい」というか

「ええそつよ、私よろこんでパパについていったの。

エアマシンで、ベルリンの空を飛んでね、街の中心街にてつりこくもんだと思っていたら、

とんでもないところちやつちやつたの

「とんでもない？」

「そう、繁華街のなかでも場末のほう、小汚いちいさな店、立食スタンドよ、パパつたら平気で入っていくのよ」

怒ったような、つっけんどんな彼女の口調。その貌のほうはちがつた。

言葉とは裏腹にたいせつな、とってもなつかしい記憶なんだと、そう表情が告げている。

「私まだ背が低くつて、スタンドに置かれた料理も見えなかつたの、ふて腐れちゃつてそっぽ向いてた。

パパは残念そうに、私のこと見て寂しげに笑つてたつけ

「ドイツ料理だとして、軽食スタンドだる、なんの店だつたんだ？」

「日本ソバよ、立ち食いソバ」

マリヤは瞬きをした。

あまりに予想外だつたから。

「パパつたらたどたどしいニッポン語でソバを注文してるので、ところが店の人がガンコオヤジつてヤツ？」

「パパとけんか腰で口論になつちゃつてね」

「なぜだ、ソバの注文をしただけなんだろ」

「パパが頼んだのは、エビ天ソバよ、

トッピングに大エビ四つくださいつて頼んでたのよ、店の人、そんなに食べれないから、残飯出すのはだめだから二つで充分ですよ、つて、

それでケンカ」

「昔気質の店主だね」

「そうね、いまでもあの店主の言葉、ニッポン語で怒鳴った言葉、憶えてるんだ……

？ふたつで充分ですよつて何回もそうニッポン語で怒鳴つて怒るの、

残飯残すは二ツポンの恥、つてね、口うるさい店主だつたみたい、

それでもけつこう繁盛していたのよ、

ニッポンびいきのドイツ人たちが常連でひつきりなしに出入りしてたわ

「それで、エビ天はどうなったんだ？」

「結局ふたつしか乗つけてくれなかつたの、ソバの上に。あとから聞いたんだけれど、パパつたら四つのエビ天を私と一個ずつ半分こするつもりだつたのよね……で、パパね、

一本のうちのひとつをね、不器用に箸でなんとか挟んで、私に差しだしてくれたのよ、

エリカ、これがママの故郷のニッポンの味なんだ、つて……そういうてね……」

ベルリン時代を懐かしむ、少女の貌。纖細な微笑みがそこにはあつた。

「美味しかつたか？」

エリカは首をふつた。

一転、表情を消して、首を横にふつた。

「食べなかつたの、意地張つて、立食バー テイーつて騙して連れてこられたから、

私、馬鹿な意地、張つていたのね

後悔している話しぶりだつた。

彼女の口調からは、たしかに後悔の記憶が読みとれた。

「ほんと汚い店だつたの、なのにとつても美味しそうな香りがするの、

ダシの香り、油揚げるパチパチつてゆう音、

不思議なお店だつたな、エビ天、コガネ色にキラキラしていく

エリカは瞳を閉じた。

「美味しそうだつたの、とつてもね、美味しそうだつたのよ、

やせ我慢して食べなかつたの、パパがみんな食べちつたわ、  
サクサクッ、つてすんごい良い音させながら、ソバをヘタツペで  
すりながら、

熱い熱いっていいながら……美味しそうだったの、とでも……

「アハヤはじつと、耳をかたむけていた。

「そのあと、お父さんとこく機会はあつたのか？」

「エリカは、ペリッ、と舌を出してきた。

「それがね、家庭の事情つてヤツ？ ？ いろいろとあつた？ のよね、  
よくある家庭の不和つてゆうか、『タタタタ』があつてそれつきりパパ  
といく機会はないまんまよ、  
いまも、そのまんま……」

「……」

「あ、詮索はしないでよね

アハヤはうなずいた。エリカの家庭の事情。  
深く立ち入るのは憚られる気がした。  
ふたりの手首のリストアが震動した。  
バイブルータ機能だ。  
メールの受信だつた。

「いま、じる学校から連絡きたのね

「ああ、有事につき無期限の休校か…… やむを得ないな  
「これで安心して？ 魔導の姫？ に？ 挑める？ わよね？」  
エリカはいたずらっ子のよみ、元気ひつ、とまた舌を出してきた。  
アハヤは真顔で、

彼の表情を見て、彼の聲音を聞いた少女の貌から一瞬で笑顔は消えた。

「ああ、きみのやつとつ、姫を離音抜きで～倒せ～？」

かき消えていった。

ふたりは真剣な眼差しで、互いを見つめあつていた。  
しばらくのあいだ、微動だにせず、少年と少女は見つめあつてい  
た。

プールの清らかな水だけが、そよ風に揺られ、夏の曇下がりの陽  
光をはね返していた。

## アルバトロスM VK36タイプ110～哀しみのエリカ～

服を着替えたエリカ・ヴァンデル・メアが、  
ホテルの屋上でエアマシンタクシーに乗りこむマミヤを見送ったと  
き、

うまくちゃんと笑顔で見送れたかどうか、自信はなかつた。  
なぜなら彼は倒すと、エリカを倒す、  
よりもよつてそう断言してきたのだから。

いつも彼に見せてきた冷笑的な微笑を見せる余裕など、とうに  
喪つていた。

独りのとき思わず妄想でうかべてしまう十一歳の少女のあどけな  
い笑顔を見せたわけでもなかつた、当然ではあつたけれど。  
この笑顔は、マミヤに見せるためにだけ、

それだけのために今までとつておいてきたものだつた。

そう、とつておきの笑顔。大好きなマミヤにだけ、  
あのひとにだけ見せることのできる、飾り気なし、  
心から、エリカは心から思つ、これがほんとの私の素顔、素の私な  
んだと 。

私たち魔導少女のために、  
プライドを捨て十四戦敗北を重ねつづけてくれた、  
唯一の男の子。

強い、貴方は強い、

わかる、私にはそれがわかる。天才是天才を知るものなのだ。

魔導少女の動体視力をもつてすれば、

どれほど貴方が苦心して呪法弾をわざと外してきてくれたのか。  
ここぞというタイミングを数瞬ずらしてミサイル弾を撃つてきたの  
か。

私たち魔導少女の投射した呪導爆雷をかろうじて回避する演技。

無能者を装う演技。

ほんとに凄い、エリカは思った。神業としかいいようがないくらいに。

エリカはそんな気持ちを、抑え込まないとあふれ出すあのひとへの想いを、

からうじて心に押し込めていた。

ちょうど魔導爆燃機関が、少女から吸いとった魔導エネルギーと魔導石の対消滅による大爆発をそのシンクダー内に封じ込めるように。

圧縮と燃焼のサイクルをくりかえすのとおんなじよ。

けれど、排気は？

この想い、吐きだす相手は？

マミヤ、貴方はまだ、私のものじゃない。

貴方は事もあろうにこの私を倒すと言い切った。

世界一難敵ひしめく欧洲リーグの、その霸者たる？魔導の姫？に本気で勝つ気でいるじゃない？

怒りだ、これは本物の怒りだ、この私を舐め切っているのだから。

この魔導の姫を、本気で倒すつもりの貴方。

真の実力者であるからこそそう思つてしまふ貴方が、この上なく愛おしい。頼もしい。

男の子として、私の身も、心も、捧げる相手は世界中で貴方を置いて他にはいない。

けれど。

異端審問獵騎兵は、獵犬のパイロットは、ヤクトラント

決して魔導少女と交際してはならない。

決して両者のあいだには、異性交遊許可証は下りてはくれない。下ろす国家はこの地球上のどこにも存在はしない。

「だから私が勝つわ、マリヤ、貴方がそれほどまでにこの職業を巴み嫌っているのなら、

だいじょうぶよ、私が、

せめて私の手で貴方の苦役でしかないキャリアにピリオドを打つてあげる」

ホテルの地階へとづづく秘密エレベータの箱の中、

彼女は独り決意をこめてささやいた。

黒い真珠のように光を放つ瞳を閉じ、想う。

貴方は強い、たしかに。

でも、私の敵では無いの、

それがわからないの？

なぜわからないの？

私の愛する貴方

。

定員八名の箱から解放され、地下五階に下りたつた。  
まぶたを開き、我に返る。想いをふりきる。

ヘルマン&ハイネマン社の武装警備員たちが 一二十四時間常駐する鬱陶しいボンクラ連中が エレベータホール前で一斉に敬礼してくれる。

魔導の姫に、エリカ・ヴァンデル・メアにむかって。  
エリカはいつものように無視寸前のおざなりな動作でそれに応えた。

シャワールームに直行する。

ワンピースを乱暴に脱ぎ、一糸まとわぬ裸身となる。

全身に温水を浴びる。滅菌洗浄され、更衣室へと足を運ぶ。

ここは、二ツポンでつくられた姫の聖域だ。

金属質な灰白色の部屋。右にずりり、  
魔導防御兵装が何着も収納されていた。

マギアパンツ

正面に等身大の姿見。巨大なミラーに美しい乳白色のフルヌードを惜しげもなく晒け出す。

まだ幼いながらも、しつとりと息づくふたつの胸を、ほそく締まつた腰を、カラダの中心の未成熟なアンダーへアを、傷ひとつない、完璧な自分の肉体を凝視する。

「見て？ マミヤ私を見て？ このカラダはあなたのものなのよ？ あなただけのもの……」

長い、とても長いため息を吐きだす。

怒りのあまり、奥歯を噛みしめるのがとまらない。

愛するひとからの侮辱は、断じて容認できなかつた。哀しかつた。

なぜなら。

ヒリカは思う、私がこんなに愛しているのに、

貴方は？魔導の姫？に夢中なのだから、と。

パンツァーを裸身の上に装着して更衣室を出る。

カラーはローズレッド。長い黒髪とミルク色の貌にとてもよく映えるカラーだつた。

姫のほそい、しなやかな肉体にフィットして、全身のボディラインをくつきりと浮きあがらせている。

地下五階の格納庫。姫専用の格納庫だ。

上の地階は、キャロルやチハヤたち避難者の格納庫や更衣室にあてがわれている。

学校の体育館ほどの広大なスペース。

高い天井。

無影灯がぬくもりの欠片もない照明を放つてている。

いくつも連なる大型工作機械の群れ。

ここはたつた一騎のためだけにある精密工場だ。

技官、魔導工学エンジニア、メカニックマンらが一斉にうやうや

しい挨拶をしてきた。

その有象無象すべてを無視して、

愛騎の魔導一輪装甲車輛へと最短距離で歩いてゆく。

パンツァーとおなじカラーリング、

深みのある格調高い緋色の山猫<sup>ヴィルトカツシヨ</sup>。

前面装甲板はシャープな流線型。

機体後方へゆくに連れ、少女の肉体のよつと艶やかな丸みを帶び波打つフォルムとなつていて。

アルバトロスM VK36タイプ一一〇。

一〇〇%ドイツ連邦共和国純正部品で製造された赤い山猫だ。

互角の性能を誇るあのマミヤたちのフォツカーム?とならぶ傑作

騎だった。

「姫、メンテナンスはすでに?完璧に?済ませております」

H&H社の主任技官が シャハト直属の部下 が丁重な言葉遣いで告げてくる。

魔導の姫は、黙つて唯、うなずいた。

姫の双眸が妖しく輝き出す。

あの魔導の光を、蒼白色の光を放ち始めていた。

## ポールポジション

「なんじゅうといひ、武裝を全部外せだああつ？」

その老整備兵の大声は、猟騎兵の大隊整備工場に轟いた。

老人の雄叫びが、マミヤの愛騎の搬入された、だだつ広いガレージの壁に跳ね返る。

すぐそばで聞いたマミヤは両手を耳に当たがい、無難にやりすごした。

ガレージにちらほらと見える整備兵たち、

猟騎兵らが整備機器の陰からこりこりとちら見していく。

「そりだよ、おやつわん、じんどのベースでは無用の長物なんだ、武装はね」

おやつさんと呼ばれた老兵は顔面を蒼白にするべきか

赤面して怒りの説教をつづけるべきなのか、迷い込んだみたいだった。

結局、孫が自殺すると聞いたんで、

慌てて自分の墓から甦つて飛びだしておけりつたゾンビじこわん、そんな風な訳のわからない顔になつた。

「……マー坊まあ座れや」

「その呼び方、いいかげんよしつくださこ」

マミヤはこの敬愛する老兵にふれわしい敬意をこめながらも、せん不敵に笑みながら床に座つた。

おやつさんも座りこむ。

上りつなぎのジャンパースーツのポケットから歯みタバコをとつだして、

一粒口に放りこんだ。

苦虫ならぬ歯みタバコを、不味えうて歯みつぶしながら、

「相手はあるの？魔導の姫？わまじゅ、おめえがヒントリーしたと聞

いたときも、

わしゃうれしかつたぞ、なんせ

「

マリヤに顔をよせ、上田遣いとのぞきここんでくる。  
タバコのメンソールの匂いがした。

「一七戦田にしてやつと、本氣出しやがつたな、  
このガキ、わしゃ畠疋にそつ弾ひたんじや

「俺はいつだつて本氣ですよ」

おやつさん、ばちんつ、と派手に音を立てながらマリヤの肩を  
ひっぱたく。

「アホヌカせ馬鹿たれが……おんめえ、なに考へてやがる?」  
マリヤは笑みを引っこめた。

「勝ちたいんです、姫に

「……丸腰でか?」

声をひそめて問うてくるおやつさんと、

マイリヤが答えるよとしたとき

。

跳んできた、スパナが工場の床の上、飛び跳ね回転しながら、  
マリヤにぶつかりそうになり、

「危ないな

マリヤがすんなり、片手で受けとめる。

高笑いがおきた。

そいつらが、声の主たちが近づいてくる。

天井にマウントされた、いくつもの専用クレーン、

それにつり上げられているマシンの裏手から姿を現した。  
数はふたり、大学生ぐらいの年格好だ。

「ミミヤはふたりの猟騎兵の姿を認めるに、直立不動の姿勢をとつた。

「こんな連中でも一応上官だからだ。

おやつさんもうさんくさげな顔をしながら、立ちあがる。ひとりは筋骨隆々のプロレスラーのような体躯の持ち主。もうひとりは痩せきすの鋭い印象を与える軽薄そうなタイプだ。おやつさんがふたりを睨みつけて、「こらあつ、スズキッ、オーハシッ、てんめえら、ガレージでなにしてやがるんだつ」

スズキと呼ばれたレスラータイプの筋肉ダルマが、

「悪かつたな、おやつさん、手が滑つた」

「そうそ、床を勝手にころがつてつたんすよ」

「馬鹿野郎つ水平定盤の上転がるスパンなんぞビンの世界にあるんだあつ」

完全な球体でも自然に転がつたりはしない水平を保つた床、水平定盤。一流のガレージに必須の設備である。

猟騎兵連隊随一の老練なベテラン整備兵、おやつさん自慢のガレージを平気でバカにしてきたのだから、老兵の怒るのも無理はない。スズキ大尉は素知らぬ風で、「なあおやつさん、いいかげん意地張つてないでシゲミシさんのお備にもどつたらどうだ?」

「こんな三万しか回せないクズにいつまで肩入れするつもりなんだ?」

「決まつとる、マー坊が本気を出すまでじやつ」

「本気い?」

クズの出す本気つていつたいなんなんすかあつ?」

オーハシ中尉がすかさず口を挟んでくる。

ひとり愉快げにグラグラと笑う。

スズキ大尉は静かに笑みながら 小物が大物ぶるときよくやる仕草で マミヤを見た。

「なあ曹長、敢えてクズとは呼ばず曹長と呼んでやるぞ、貴様にG?のエントリーが認められたのはたちの悪いジヨークだ、まちがいなんだよ、いまからでも遅くはない、出走、辞退しろ」

「その御命令には従えません、大尉殿」

オーハシがスズキを見て、

「コイツカド番すからね、負けてクビになつたあとで、?魔導の姫?が強すぎたせいだからだ、とかなんとか調子こくつもりなんすよ、負けの言い訳づくりつすよ、あつとつ」

そういうて、

オーハシ中尉は訝知り顔でマミヤを見下す視線を投げてくる。

「おまえらなんじやつ、自分に自信がないからレースのライバル漬しきたんかあつ」

老兵は噛みタバコを床に吐き捨て、ふたりの青年を挑発してくる。

「ライバル?」

スズキはそりつとぼけた風に顔全体を疑問符にして、脇にいるオーハシを見る。

「俺らはG?で実績あるつすけど、

だからこんどこのインター杯エントリーしたんすけど?ええ? 俺らのライバル?

おやつさんそんな強えヤツどこにいるんすか?

田の前にG?で一四連敗の鼻クソみてーんなりこむけど?」

オーハシはまた笑いころげた。

おやつさんも黙つてはいない。

「マー坊はな、初陣第二戦、そりやあ見事な勝ち方じやつた、シゲミツの全盛期を超えるぐれえのな、

それぐらいなんだと、本物なんじやと、俺は見たんじや、俺の田はごまかせねえつ」

スズキは呆れかえつて、

「おやつさんの見る眼を悪くこいつもつけめりせらうないんだ、たしかに曹長は一戦田までは良くやつたよ、それは認める、だがビギナーブラックだつたんだよ、

怖い物知らずの初心者は、勝負の世界には地雷の埋まつてゐることを知らないもんや、

知らずに猪突猛進する」と、あるだらつ?

それで偶然地雷を踏まづに成功しちまつたことがまれにあるんだ、それが一戦田までの「コイツや、

地雷の怖さに気づいて、パイロットは初めて中級者の門を叩けるんだ、

偽もんはそこで地雷にビビつて足踏みする、

そのまま人生<sup>キャラ</sup>が終わる、

それがいまのコイツなんだよ、

おやつさんは薄い頭髪を搔きむつた。

「マー坊、なんか言い返してやらんかいつ」

「大尉のおつしゃる」とは正論ですよ、おやつさん

マミヤの飄々とした口ぶりに、

老兵は自慢の水平定盤の床面を何度も踏みつけ、

「なんじやつ、がつんといえんのかいつ」

軍隊内において上官に対し、がつんといつなど論外、もつてのほかだつた。

古参兵であるおこちやんはこのふたりをまったく評価していない様子で、

「じゃあアレが、おまえらは姫に勝つ自信があんのかいーつ」

老整備兵も、なかなかに痛いところを突いてくる。

初めて、スズキとオーハシは、鼻白んだ。見下しきつた笑みを引っこめる。

「おやつさん、こくら古参兵でもこいつこいつと悪いことがある

ますよ」

マリヤの態度は、いたつて自然体だった。

「つむせえつ、マー坊つ」

「弱い者にじめは、かつこわるいですよ  
さらつ、といつてのけた。

おやつさんは、じつと、マミヤを見て、それから一ヤつ、  
ひと笑いして噉みタバコをまた口にした。

果然としているスズキとオーハシを尻目にし、  
「そうじやつたのう、？弱い者？いじめは良くないのう、  
ふたりとも、スマンかつたわいつ」  
はじめに切れたのは、オーハシだった。

マミヤにつかみかかつて、

「オメエ誰が弱いもんだつてつ、ああ、いつてみるよ」

マミヤの胸ぐらを激しく揺するオーハシに、

おやつさんがつかみかかる。

おやつさんは引っ込んでくださいよおつ、ヒオーハシが金切り  
声を上げる。

老兵は口から泡を飛ばして、おまえらレース前の大切な体じゃあ  
つ、と叫び返した。

スズキが、三人の取つ組み合いを思案顔で眺めていたとき、  
ふと、うしろをふりむいた。

立派な体格の獅騎兵がひとり、いた。こちらへ真っ直ぐ歩いてく  
る。

「やめろお前たち、シゲミツさんだぞつ」

スズキのうわづつた声に、三人の動きは途端、

やんできました。

古参のおやつさんも例外なく、全員最敬礼してむかえた。シゲミ  
ツ中佐をむかえた。

彼は静かに笑みながら答礼してきた。

「マリヤ曹長、このふたりは貴官同様、魔導の姫を相手に今回エントリーした猛者たちだよ、だがG?ベテランの彼らをもってしても、今レース前の緊張感に耐えかねたと見える、

軽いジヨークで気を紛らわせようとした、

それだけだ、貴官と同様にだ、

そうだろう? 諸君?」

スズキ大尉とオーハシ中尉がちいさく目配せをしあう、ふたりして、

「は、そうあります?」

ふたりの返答に、シゲミツは満足そうにうなずいた。

「おやつさんも曹長も、私の顔に免じてこの場合はなにも無かつたことにしてもらえませんか?」

「おつづ分かった、おめたちは仲間じやあつ、

仲間割れしどつたらあの?魔導の姫? たは勝てんしなつ?」

「申し訳ありませんでした」

マリヤは殊勝な態度で謝つて見せた。

また、シゲミツ中佐はつれしげにひとつなずいて、一同を見渡した。

「マリヤは今回、念願のG?初参戦、

しかも……残念なことに力不足の危機を迎えてる、私はこれを勘案し、私の権限においてマリヤ曹長? 魔導の姫? 戦の? ポールポジション? を譲りたいと思つ、異存ある者は遠慮なく申し出でもらいたい」

いつのまにかガレージ内にまじの五人を注視するギャラリーの輪ができていた。

幾人の獵騎兵、整備兵たちのあいだにざわめきが起つていて、

た。

## ポールポジション。

レースに出走する獵犬<sup>ヤーグトハウンド</sup>のスタートにおいて、もつとも有利な位置。

今回のレースのよう<sup>、ワンオンファイブ</sup>、一対五ともなると、公道に五騎の獵犬が一列平等に並走するスペースは無い。このような場合公式ルールにより、各騎のスタート位置がずらされる。

最先頭の車輛の斜め後方に一番騎、おなじよう<sup>、その後方に二番騎</sup>……と斜め後方へと布陣しての出走となるのだ。この最先頭を？ポールポジション？と呼ぶ。

本来ならそのレースでもつとも戦績の優秀なパイロットの陣取れるスタートラインだつた。

その戦績をもつシゲミツの宣言なのだ、誰が異論を唱えられるだろうか？

シゲミツは皆の表情を順繰りに見渡してから、また満足そうにこんじはおおきくうなずいた。

「私の提案は通つたようだね」

二十四歳にして現役の異端審問獵騎兵の 魔導石適性〇・〇〇一%の壁を破つた 日本のトップHースは、マミヤに握手を求めてきた。

マミヤは差しだされた手に応えた。

「カド番脱出、期待してゐるマミヤ<sup>曹長</sup>」

「ありがとうございます、中佐殿」

中佐は、かわいがつてきた実の甥つ子の晴れ舞台を祝うかのよう<sup>に、</sup>

さわやかに振る舞つてゐる。

マミヤはなぜか 不可解なくらいに 控えめな笑みで応じた  
だけだった。

他の猟騎兵たちなら有頂天になつてよろいびぶ場面だとゆうのこ  
である。

## ナホの賭け

四日後。時刻は二二二〇（フタサンイチマル）時。ナホは首都圏上空をタクシーハマシンで飛翔していた。機長は寡黙な男だった。

三十代くらいで運転の少々荒っぽいのは困りものだった。けれど今夜はそんなことはどうだつていいのだ。

ナホはリアシートから、コクピットに設置されたちこちなテレビに食い入るような視線を送っている。

機長も耳をかたむけている様子だった。

『全国のみなさま、全世界のみなさま、

今晩は、古町です、

お待たせいたしましたつついにこの夜を迎えました、

インター杯G?レース、ターゲットは?

そう、世界に知らぬ者はいない、欧洲リーグの覇者について、

ついに来日しました?魔導の姫えええーーー?』

古町とゆう男性の同会アナウンサーは姫、の一言を絶叫口調で伝えてくる。

放映権を獲得したこの民放局、総力を挙げての中継体制の敷かれている様子だ。

熱の入りすぎである。

まあ無理もない。世界の魔導の姫の初来日、初の日本でのレースの生中継なのだ。

前回の対シゲミツ中佐戦においてはレースは試合結果のみ速報が流されただけである。

そのため今夜は生で姫の爆走が拝めるとあって、視聴率がどれだけ上がるか予想もつかないのだ。

『と、申しましてもですねえ、はつきりって今夜の見所は姫がどうやって勝つのか、それしか見所ないんですけどねえ』

「つうつ何いつてんのこの古町ってキヤスター・ムカツくつ、獵騎兵もがんばつてのつ」

機長が柄の悪そうな顔だけれど、温厚なしゃべりで、

「お嬢さん、ひいきの獵犬でも、今夜の五人のなかにいるんですかね？」

「……ええ、あの、あたしの幼馴染みが出走するんです」「へえつ、そりやあめでたい、俺もね、応援してる獵犬がね、ひとり出走するんですよ」

そうですか、とナホはうわの空で返事をする。

テレビではその獵騎兵たちや姫のオッズの最新情報のテロップが流れ出したのだ。

『一三時集計分の単勝オッズ最新情報をお伝えします』

スタジオの女性アナが読みあげだした。

『魔導の姫、貴禄の一・〇一倍、シゲミツ中佐八・七五倍、スズキ大尉六二・一八倍、オーハシ中尉一四八・九四倍、ソルベ中尉二〇・九七倍、ソルベ中尉は一八勝無敗、今回の大穴、台風の目となるかも知れません……ええと、マミヤ曹長一・一万一一五三倍、あ、万獵券です、カド番のマリヤ曹長、単勝オッズとうとう万獵券出しちゃいましたね』

スタジオで隣に座る古町が、ぶふつ、と汚い笑い声を上げてしまう。

ナホは悔しさのあまり、

フロントシートの背中にキック一発お見舞いしてやつた。

「つぞけんなつフルマチーツ」

「荒れてんねえお嬢さん?..」

「今夜のために十万親からお小遣い前借りしてきたんですつ」

「おう、一口分かい?」

「高すぎますよつ、G?つて、

一口分のチケット最低十万からなんだもん」

「そりやあ、まあねえ? G?は世界中で取引されつから、ステイタスつてやつだよ、G?、?あたりとはね、やっぱ格がちがうからね」

機長は興奮してきたようで、寡黙さを捨て去つてきた。

「お嬢ちゃん、あんたがどの獵犬に賭けたか当てるやううか? そうだなあ、幼馴染みだから、歳も近えつぽいしソルベだろ、大穴のソルベ中尉、アタリだろ? なつ」

「ち、が、い、ま、すつ」

「なんだよなんだよそんな怒なんくつてもいいじゃねーかよ、つたく、まあいつか、とにかく聞いてくれよ、俺つてばこのまえ獵騎兵を寄に乗つけたんだよ、この五人のうちのひとりをよ」

「……へえ」

ナホは初めてちょっとだけ機長の男の話に興味をそそられた。しかし。

『 それにつけましてもG?初参戦のソルベ中尉とマミヤ曹長、明暗くつつつきり別れちゃいましたけれども、

これね、ほーんと、なあーんとマミヤ曹長エンタリーできたのか、これ 자체がですね、すでにしてからびっくり仰天つ、世界の七不思議つ

ナホと機長は同時に舌打ちした。

「俺、この男のしゃべり嫌いでね」

「あたしもです！」

機長は、フロントウイングから見える、無数のエアマシンの放つ白いストロボライトを見やつた。

「このまえ、デケえ暴動あつたろ？　あの夜だよ、あの晩俺はあの若僧を乗つけたんだ」

「偶然で、あるんですね」

「おうひ、お嬢さんの幼馴染みつてのも、たまげた偶然だけじなつ、でよ、そのガキ、このデケえレース控えて怯えてやがつたよ、震えてやがつたよ、

ちょうどあなたのその席に座つてよ、

可哀想だつたよ」

「……獵騎兵つて、そななんだ？　意外かも」

「だろ？　世間様でいわてるほど、

天下の獵騎兵もタフな連中じやあねえんだな、これが、あいつらだつてよ、ただのガキなんだよ、だからよ、俺はいつてやつたんだよカツ入れてやつたんだよ、そいつによ、俺がオメエを応援してやつから、せめてな、惚れた女の前でくれえ……？　オトコを見せてみろ？　つてなつ、バシッとよつ

「ふーん、機長さん、いい」とこづじやんつ

ナホは素直に感心した。

実に奇妙な縁だ、そう思つ。

南東京市のエアポートで駐機していたタクシーを偶然拾つたらこの展開である。

世の中、案外ずいぶんと狭いものだ。

「へ、まあ、なつ」

機長はなんだか誇らしげに鼻を鳴らした。

「で、その獵騎兵つて誰なの？」

ナホが興味津々に聞くと、

Digitized by srujanika@gmail.com

『こちら木更津です、ただいま、スタート地点の木更津からライブ映像お届けしていますつ』

まだ若い女性の現地レポーターが興奮気味にしゃべりだした。  
低空で飛ぶ民放のエアマシンに乗ったままの中継だった。  
女性アナの後ろ、キャビンの窓から見える背景は、一面深淵の闇、  
夜の東京湾だ。

対岸に打てかねて神奈川や首都圏

大都市の脅大な街の灯であふれかえつてゐるのか魚明はわかる  
ナホと機長はまたテレビに釘付けになつた。

『ええ、特別許可を得て獵騎兵さんに特別インタビューを敢行したいと思いますっ、

おはようございます。今日は朝食のトマト炒めにトマトソースを試してみます。

ナホがあらん限りの黄色い声援を悲痛な色も混じりつつもフロントシートをひつぱたきながらテレビにむかい送つた。機長が、ぽかん、と口を開け、ナホをまじまじと見つめてくる。

「幼馴染みつて、え？」

「うん、ママのななちゃん」

「どうしたの、機長さんがなんでそんなに驚くの？」  
「いやつ、アレだ、そのう、お嬢ちゃん万獣券に一口十万、

ぶつ込むつもりかなと想つて驚いちゃつただけだよ?」

「うんもちろんつ、機長さんは? 誰応援してるの? もうその人のチケット買った?」

「いやあ、いま金欠でよう、今回は応援だけなんだ、応援、誰乗つけたのかは秘密な」「なーんだ……とにかく芝浦の特設チケット売り場急いでね、まだあたしマミヤのチケット買ってないから」「お、おうつ、わかつた、出走は一四時ジャストだから余裕だ、心配しなさんな」

機長は顔中から脂汗を流しながら、操縦桿を握りなおした。

## 策謀／エース・シゲミツの底意／

軍政異端審問局のエアマシンが木更津金田料金所の広大なスペースに何台も駐機していた。

パイロット及び魔導二輪輸送のための専用エアマシン、  
通称トランスポーターである。

マシンのライトや特設照明の光で、廢墟と化した料金所はライトアップされていた。

まるで一〇世紀の現役のところを懐かしむよう、

かつての車輌の往来を取りもどせたかのように華やいでいた。

アスファルトのいたるところに見える雑草、  
スプレー・アート氣取りの下品な落書き、

どれもこれもいまは、この瞬間だけは、なりを潜めていた。

G? のビッグタイトルに、その白熱した熱気の渦のまえには、  
荒廃したその景色すら見事にショウアップされ、背景として取りこ  
まれていた。

空に浮かぶ何機ものマスメディアのエアマシンが唸りを上げ、  
撮影のベストポジションを争っている。

「うるせえなあ」

ソルベ中尉は、苛ついた声音でつぶやいた。

ここ数日間、何度怒りの発作に襲われたことか？

それもこれもあのシゲミツさんがマミヤにボールポジションを譲  
つたと知つたからだつた。

時刻、一三一五時。

トランスポーターの一つの一機、

ソルベを輸送したマシンは、後部ハッチを開いて彼の愛騎、  
フォッカーム? をすでに搬出し終わったところだつた。

彼はいま、パイロット専用キャビンのわりと高級なシートにふんぞり返っていた。

けれどその表情はちがつた。

月面戦争で、弾薬も、携帯酸素も水もすべてを喪い、敵に銃口を突きつけられた一等兵の顔をしていたのである。

要するに魔導の姫を相手に、土壇場にきて怖じ氣まくつてこるのでつた。

そこへリスタブにビデオ通話が入ってきた。

緊張のレース前だ、無遠慮極まりない。

怒鳴りつけてやるうとして通話に応じたら、

三分割された画面に映つたのは、とんでもない相手だつた。

シゲミツ、スズキ、オーハシの三人のライバルたちだつたのだ。だから。

「お、お疲れ様でありますつ」

階級のおなじオーハシといえども、G?のベテラン獵騎兵だ。非礼は許されない。

緊張の極みに達したソルベをなだめるように、

シゲミツは鷹揚な笑みを見せてくる。

『ソルベ、君と話をしたかったところだつたのだよ』

「はつ、光栄でありますつ」

シゲミツはビジネスライクにしゃべりだした。

彼の話す今夜の?作戦?はとてもシンプルなものだつた。

サー・キットコースは、木更津側がアクアブリッジと呼ばれる海上を渡る橋となつてゐる。

ひたすら一直線である。

魔導の姫の希望の悲鳴を避ける場所は、

カーブになつてゐる箇所はビニにも無い。

そこで、ママ、やつた。

ヤツをポールポジションに、姫の矢面に立たせるのだ。  
ヤツが真つ先に姫の必殺技を浴びて大破した直後、  
四騎が一斉に姫へ総攻撃をするのである、

だいじょうぶだ、いかに姫といえども、希望の悲鳴には  
パワーチャージサイクル、といつものがある。

つぎの悲鳴の放出まで、時間が、間隙が生じるのだ。

『そこを叩くのだよ、問題は無い、コースはストレートだからな、  
四騎一斉にすべての呪法誘導ミサイルを叩き込むんだ、  
姫に避けられる余地は無いのだ、これで勝てる、  
絶対に勝つ。』

復讐に猛り狂う、中佐の一四歳の若者の陰惨な聲音がそこには  
のぞいていた。

ただし、勝者は誰となるのか？

公式ルールにおいては、インター杯の勝者とは、  
ターゲットの爆燃機関に直撃弾を撃ち込み、撃破した者を指  
す。

『うむ、今夜の勝者は？四人？だよ、ソルベ君、  
姫の撃破が最優先事項だ、

互いに協力し合つのだ、結果として誰が？勝者認定？それとも  
恨みっこなしにしよう、

日本得意をかけ、プライドをかけ、欧洲リーグの支配者を倒すの  
だ、  
今夜、我々が史上始めて姫に勝つ。』

「 はい中佐殿。」

感動した、ソルベは感動の渦中にあつた。

月面で戦死しかけていたところに、来援の獵騎兵一個連隊もが殺到して、

救助されたも同然だつたからだ。

ソルベは三人に丁寧に礼をいった。

シゲミツとスズキは勝利を確信した笑みで応えてくれた。

ひとりだけ、オーハシ中尉だけは顔を強張らせている。

『おいソルベ、貴様階級がおなじだからつてこの俺に舐めた態度とするなよ？

だいたいテメエの単勝オツズ、なんなんだよ？  
なんで俺が一四八倍でテメエが一〇倍なんだ？』

『やめないかオーハシッ』

スズキ大尉が鬱陶しそうに声を荒げる。

オーハシは不承不承黙りこんだ。

通話を終え、ソルベは身震いした。

オーハシのことなど、どうでもよかつた。

「僕のG？初陣は、魔導の姫の撃破だ、僕の成功に満ちた人生の、  
これは輝かしいメルクマールになるんだつ」

ソルベ中尉は、感涙すら、両眼にうかべ始めていた。

ナホ、生まれて初めてG?のチケットを買つて芝浦にて

古町アナのしゃべりは絶頂にあつた。

芝浦の特設チケット売り場前。

巨大なオーロラビジョンにこのアナウンサーのアツツ苦しい顔がでかでかと映つている。

それでもつて、世紀の一戦、世紀の一戦、とこのフレーズを、脳内発作起こしたオウムみたいに際限なく繰りかえしているのだ。短気なナホでなくとも嫌になるつてもんである。

「馬つ鹿じやねーの、フルマチーツ」

ナホの渾身の叫びなんぞ、

この周囲を埋め尽くす群衆のなかではわずかなノイズに過ぎない。大群衆が、このチケット売り場に押しよせていた。

老若男女、誰もが予想を口にしてあちこちで口論に発展している。なかには手を出し合う連中もいて、ケンカになると、

即座に現場に大量動員されている武装警官に取り押さえられる始末だつた。

チケット売り場の建物の直上、高速道路の高架橋が南北に連なつてゐる。

首都高速一一号、台場線だ。

その漏水とひび割れの走つたコンクリの架橋が、晴れきつた夏の夜空を覆つてゐる。

オンボロの高架橋が、イルミネーションで目の眩む売り場に汚い漏水をひつきりなしに落としてくる。

群衆は形状記憶式のレインコートやら、伸縮自在の発光型の傘をさしてひしめき合い、

天を覆う一一号線を恨めしげに見上げるのだった。

「もつツキッタナイなあつ、傘もつてくんだった

「まあそうゆうなやナホちゃん」

機長がナホの横に連れ立っていた。

付近のエアポートはどれもキャラパいつぱいになつており、仕方なく近場の路上に違法駐機してきたのだった。

取り締まる交通警察官はない。

いたるところ違法な路駐エアマシンで、地上の道路はあふれかえつていたからだ。

ナホは機長に肩を抱かれ守られながら　心のなか、マミヤ「めんね、とつぶやきながら

押し合いへし合い、券売機の列に並んだ。

ならんで早々、ふたりは汗だくになつてしまつた。

ナホは汗をハンカチで拭きながらへろへろになつていた。地面で拾つたEペーパーを頭に垂らして、汚い漏水しのぎにしている有様。

機長は汚水をまるかぶりになつて、

腕で汗といつしょに乱暴にぬぐつてている。

「なあナホちゃん、そのEペーパーさあ……」

「え？」

ナホは、ばて氣味の不機嫌な瞳で

頭の上のペーパーをちらり、仰ぎ見た。

ペーパーに、削除し忘れたらしい文字列がうかんでいたのだ。手にとつて見てみる。

『また負けだ。全財産すつた。俺はもう死にたい』

「ちよ、ちよつとなによつこれえーーっ

彼女はぶつくさいながり、

ペーパーの端のデリートボタンをタッチする。

……どうやら壊れてるペーパーらしく、文字列が削除できない。

「こりやあ、持ち主の怨念かねえ？」

呆れ声の機長だったけれど、

汚水がまた彼女の頭上に落ちてきたとき

彼女がイラついて動くたんびにポーテールが可愛く、

ふわふわと揺れるもんだから 手でかばってやつた。

ふたりがあーだこーだと削除に悪戦苦闘するつち、アリスはじりじりと行列は進んだ。

で結局、ナホは切れた。

縁起でも無いペーパーを地面にはたき落として、足で踏みにじつてやつた。

そうして、よつやく先頭がめぐつてきた。

ナホは券売機にならんだ色とりどりのタッチパネルのボタンを見て、

「あれ、えつとマミヤの勝ちに賭けるのは、ええと、ええ、つと…」

「なんだナホちゃん、インター杯買つのは初めて?」

「うん、だつて親が許してくれなくつて」

後ろの列から、早くじろじろあーーーつ、と罵声がひつきりなしに飛んでくる。

「だからさ、こっちのボタンの列が、

単勝な? んでもつて下の段が姫に撃破された獵犬の予想ボタンだよ」

「ええつと、じゃあ……これだつ?」

「ああつ、ナホちゃん、それレースのスポンサーの出しているドリンク買ううボタンだつて」

「ええーーつ」

途端、券売機横の自販機から自動音声が流れ出した。

『ヘルマン&ハイネマン、この夏一押し天然 エンドルフィン配

合、

飲めば多幸感に包まれちゃう覚醒系ハッピーソーダ、

特設会場限定特価七五〇円になります』

「高ーしいらねーよバカ野郎ツ」

機長が自販機相手に毒づいて、

マミヤの単勝予想のボタンを勝手に押そつとする。

「ダメツ、機長さんつ十万払うのあたしなんだからあたしが押すつ  
「はいはい、わあーつた、わあーたよつ」

早くしやがれ、クソ野郎―――つ、またしても列の後ろから

怒鳴り声。

機長が舌打ちして、つるせえなあ、と独りいづる。

漏水が、ピチヨン、と機長の額に垂れてきた。

「あ、きつたねえなあ、おいつ」

機長がいまにもブチ切れそうに頭上の高架橋を仰ぎ見る。

汗と泥水を手でぬぐつた。

ナホが単勝ボタンをタッチしようとしたとき、自販機がまた、

『1』一緒に、北海道産ほくほくフライドポテトはいかがですか?』

「チツ、いらねーよつバカ野郎つ、

イモはおとなしく北海道でブタの工サになつてりつ

機長はブチ切れて、大声を上げ自販機をべーでぶん殴つた。

「もつ機長さん、うるさいつ

「だつてナホちゃん 」

いきなり、機長の襟首が後ろからつかまれた。

「? なにしやがんだコラアアツツ」

機長が、十代のころのやんちゃ時代にもびつちやつて、  
ドスをきかせてふり返る。

機長の襟首をつかんだのは、大男だった。

男は段違いのド迫力で、

「……誰がイモだ? あ? 誰がブタの工サがなんだ?  
誰にむかつて口きいてんだ? 一イちゃん?」

ふたりの真後ろにならんでいたこの大男、

どうからどうみてもブラック、そのスジの人であつた。

「あ、ハイあのう、すんません」

機長はすぐさま卑屈に笑んだが、

怖いおじさんは 顔面が、遺伝子を疑うレベルでジャガイモそつくりだった 思いつきり機長に顔をよせてきて、

「わ、舐めどんのか？」  
「ああああんんっっっっ」  
「な？」  
「一イちゃん？」  
「なあ？」  
「一イちゃん？」

すんません、ホントすんませーーんっ

激怒したジヤガイモが機長の腕ぐらをつかんでナホのほうへ押し倒さんばかりに突きを入れた。

ナホが券売機に頭からぶつかって、

勞壳幾加少

「あれ、あたし、押しちゃったの？」

ナホが、一〇万円をチャージしたリストアを券売機の接触面にタッチせざる。

『そこなにしてる、ケンカはやめなさいっ』

警視庁の機動隊員が列を割つて突進してくるのが見えた。

機長が泣きべそかきながら、おまわりさーーん、と呟んだ。ジャガイモのおじさんの威勢のよかつたのはじこまでだった。

「あ、無かった」といつぶ、「やがんや」

ジャガイモ顔をサシマイモのようすに怒りで紅潮させながらも、機長に笑いかけた。

警官が群衆をかきわけ、こちらにたどりついた。

大男は笑顔で釈明を始めだした。

「なに？ なにがあつたの機長さん？」

「なんでもねーし、さあいこうぜつ」

機長は顔面の涙と汗を拭きながら、ナホの手をとつた。

彼女が、券売機から吐きだされた紙幣サイズのエペーパーをつかみ取る。

ふたりいっしょに、警官に説教されてるジャガイモを尻目に列を離れ、

群衆のなかへ紛れ込んでいった。

## 番組コメンテーター、パンダ・信田の“希望の悲鳴”解説講座

古町アナはあいもかわらず巨大なビジョンのなか、コメンツの機銃掃射をスタジオにぶちまけていた。

変化したことといえば、お気に入りワードが？世紀の一戦？から？魔導の姫の必殺技、希望の悲鳴？にチエンジしたぐらいだつた。

『さあそれでは皆さんここでおそろいしてみましょう姫のつ、必殺技つ、全世界の獵騎兵どもを震え上がらせてきたあの

？希望の悲鳴？、

希望の悲鳴の対抗策ですつ、

解説は元・獵騎兵、番組コメンテーターでおなじみパンダ・信田さんです、

よろしくお願ひしますパンダさんつ、

『どうも、パンダ・信田です』

無表情な中年男が古町の右に座つている。

自己紹介を投げやりな口調で済ませると、

『魔導の姫のこの技なんだけど、

はつきりいつて技の発動前にミサイルの遠距離攻撃で姫のマシンをね、

あの深紅のアルバトロスを撃破するしかないよね

熱意のこもらない解説を始めました。

『はいはいはいはいつ、

やつぱり姫は無敵なんですかねーつ信田さんつ？』

『この希望の悲鳴つて技の正体なんだけどね、

巨大な重力場異常をアルバトロスの後方に展開する技なんだよね

『はいはいはいはいはいつ、

『その原理なんだけどね、

魔導メーターの魔導力場展開値をね、

姫の強力な魔導パワーで一気に跳ねあげるのよね、

例えば八万アーテルハイド（A・H）から一一万AHまで爆上げしたとするよ、

その差四万AH分だけの強力な重力波が獵犬に襲いかかってきて、  
獵犬の車体を破壊しちゃうワケなんだよ、

技の強さはこのAHの値の差に正比例しているんだよ、

『なるほどなるほど』

『技の有効射程は一〇〇メートルちょっとといわれてるんだよ、

そんで世界戦公式ルールで、

山猫のケツから

三〇〇メートル超えて距離つけられちゃつた獵犬は即失格になるからね、

一〇〇メートル以上、三〇〇メートル以内の範囲内で逃げつづける羽目になっちゃう』

『はいはいはいはいつなんとか打開策は無いもんでしょうかねー?』

『なんたつて三〇〇キロ超す高速の世界でマシン同士走つてんですよ、

相対距離をそんだけ維持するみたいな器用なマネ、

手練れの獵騎兵でもつづけんの難しいよね、

相手が姫だしね』

『はいなるほど、はいなるほど』

ここで芝浦特設会場のビジョンの映像が切りかわった。

スタジオからスタート地点の木更津金田料金所にかわった。

テレビカメラは上空から、照明煌めく廃墟の料金所を撮影していく。

スタジオのふたりの映像は、画面右下に小窓のよつになつて映しだされていた。

『こちらスタート地点からライブ中継です、

いま時刻は二三時五四分です、まもなくスタートです』

女性レポーターが、パンダ・信田とは雲泥の差の熱狂ぶりで話しが始めた。

古町も興奮しながら、

『はいはいはいはいーつ、

姫と獵犬たちのスター・ティング・ポジションの紹介お願いしますつ』

『はいえーとですね、姫のスタート位置は、

料金所を出て中央分離帯の始まる地点となっていますつ、

いっぽう獵犬側です、

ポールポジションが姫の後方五〇メートルの位置になります、  
ポールポジション、この？一枠？からの出走はミスター・カド番、  
マミヤ・曹長ですつ』

また古町が、ぶふつ、と汚い笑いをこぼして、

『パンダ・信田さんの解説からすると、真っ先に悲鳴喰らつてオダ  
ブツですかねーこの獵犬』

パンダ・信田も、こんなガキどうでもいいといった口調で、

『コイツ死んだも当然だよね、

つてゆーかG？にエントリすると自体まちがつてるよね、  
公式ルール改めたほうがいいよね、だつて試合になんないんだもん、  
俺ひさしぶりに見たよ、単勝オッズで万獵券出しちゃつた間抜け野  
郎、郎、

獵犬の恥さらしだよね』

女性レポーターが言葉を引きついで、

『その斜め右後方です？一枠？二ッポンのHース、シゲミツ・中佐で  
すつ』

女性がうれしげに名前を告げると、

パンダ・信田も、

『姫に対抗できんの、いまこの人ぐらいかもね、

買づんならまあこれ鉄板でしょ、このまえ負けちゃつたけど、  
でも俺が現役だったら姫と良い勝負になつたと思うんだけどなあ

古町も女性アナも、このコメントをスルーした。

『三枠、スズキ大尉、四枠、オーハシ中尉』

『シゲミツのね、走りの邪魔になんない程度にね、  
がんばればいいんじやないの』

『五枠です、一八連勝中、オッズも上昇中です、  
ソルベ中尉です』

『大穴狙いならね、買いかも知れないね、  
コイツの走りイイ感じよ、

見込みあるよね』

『もうまもなく一四時です、日付変わつていよいよ出走ですーっ  
はしゃぎまくる女性アナに、

古町も負けてはいない、ひとり有頂天にしゃべりだした。  
『世紀のつ、ま、さ、に世紀の、一戦つ……んんんんつ、いま、ス  
タートですっ』

オーロラビジョン前、大群衆から、

？引つ込めフルマチ？ゴールがつなりを上げわき起こっていた。

## 希望の悲鳴～ゲシュライ・トラウム～

魔導の姫の、あの深紅のマギアパンツァーを脱がすのは、俺の仕事だ、シゲミツは思つた。

容赦はしない、

引きちぎるように脱がしてやる、そう決めていた。

姫の　噂に尾ひれはつきものだけれど、

美少女だと聞いている　あの約五〇メートルちょい先に見える小柄なシリエット。

ひきしまつたケツ、ぐびれたほそい腰がパンツァー越しにくつきりと見える。

一枠の自分の位置から手にとるよつて見える。

アレを、引きちぎつてやるのだ、

そう想像するだけで、最高に嗜虐心をそそられる、そんなカラダをしていた、姫様は。

「情けはかけんぞ、体中を見てやる、犯すよつに見てやるが、オマエのカラダのすべてをな、ほかの三人にはやらせん、俺の手で脱がしてやるんだ」

フォックターM?に騎乗した彼は、荒く吐息をついた。

料金所のすべての特設照明、全部が自分をライトアップしてくれるために点灯しているのだ、

彼はそうも感じていた。

一〇分前、係官から渡された一〇(テン)カプセルの魔導石。

とつぐに消化されその成分がシゲミツの体内を血流とともに荒れ狂つている。

フルフェイスのヘルメットの下、

シゲミツは舌なめずりをして、快感の奔流を我慢していた。

このシゲミツの名声に泥を塗つた、美少女。

そう、ただではおかしい、思い知らせてやるのだ。

あの七一連勝中の、世界を支配し魅了づづけているメスの山猫に、だ。

病魔に冒された魔女の分際で、

巨万の富と名声を欲しいままにしづづける、美少女。

その少女がいま、自分の眼前で悔し涙を流しながら、すべてを脱がされようとしているのだ。

彼は勝利をすでに確信していた。

その光景を想像するだけで、目の眩む思いがするのだった。

前方、すでに誰も使わなくなつて久しい道路標識が撤去され、スタートシグナルを告げる五個のレッドランプが敷設されている。いま赤く点灯している。

あの五つがすべて消灯したときがスタートだ。

魔導少女狩りの、

インター一杯の、

G? レースの開幕だ。

軍政異端審問局から通信が入ってきた。

相手はR大佐である。

『全騎に告ぐ、魔導爆燃機関を起動せよ!』

「シゲミツ、アイ・サー了解」

クラッチを切り、爆燃機関を起動。

耳に、体中に慣れて染みついた震動が始まる。

金属の灼かれる異臭が鼻をつく。

シゲミツはバイザーを下げ、顔を密閉した。

ヘルメット内、超小型酸素ボンベのチューブが自動で鼻腔に装着されてくる。

臨界点の一萬AHまで順調に上がる。

魔導メーターの数値がどんどん上がってゆく。

爆燃機関の発する金属同士の擦れる音が変わる。

臨界に到達した証だった。

八秒台で、一万を、臨界点オーバー。

絶好調だ、今夜の俺は最高だ、シゲミツは思つ。

一四時になる。〇〇〇〇時。

シグナルのレッドランプ、ひとつめが消灯した。

ミラーで右斜め後方の三騎を確認する。

「スズキ、オーハシ、ソルベ、作戦どおりいくぞ、準備はいいか?」

通信を飛ばした。

三人からオールグリーン、の声が返つてくる。獲物を狩る男たちの声音だ。

ふたつめのレッドランプ、赤い光が消滅した。

突然、三枚のスズキから通信が入る。

『中佐つ、ヤツをつ、マミヤを見てくださいつ』  
「うん?」

シゲミツが左斜め前方を見る。

一杵、囮に使うチキン野郎、マミヤのフォッカーを。それは、彗星だった。

排気口のマフラーから蒼白の光の奔流が、

それは見事な彗星の尾を思わせる光の束が噴き出しているではないか。

姫と、魔導の姫とおんなじぐらい強烈な炎が。

『そんな、あ、あり得ないつすよ』

オーハシが慌てふためいてくる。

『あいつは三万がやつとのクズのはずですよつ、そんなつ、あ、あんなスゲえ』

「黙れ、オーハシ」

シゲミツが突き放すように冷酷に命じる。

オーハシは沈黙した。

三つ目のシグナルが消灯する。

「三騎とも見ておけ、ああいうのを瘦せ馬の先走りというんだ、スタートから全力をふりしぼつてゐに過ぎん、すぐに精神集中できなくなつてレースから早々に脱落だ」

『そ、そうでしょうか？』

スズキが、おずおずと疑惑に取り憑かれた声を上げてくる。

四つめ、赤い光が消える。

「いくぞ、貴様ら」

五つめが消える。

クラッチャレバーをもどす。

スロットル開放。

一騎の山猫ヴァイアント・カット・オフ・ショットと五騎の獵犬ヤーク・クト・フント、

魔導二輪装甲車輛マジック・ツーリングどもが発進した。

スロットル開度を上げる、さらに加速する。

六騎は距離を保つたまま走った。

シゲミツのフォッカーの左右、景色が瞬く間に海に変わる。すでに東京湾アクアブリッジの上を走行していた。

シゲミツは姫とのあいだにマミヤを挟みながら、慎重に走った。姫との相対距離、一二〇。

「ハハツ、バカだヤツはやつぱりただの阿呆だ、

マミヤを見ろ、距離詰めすぎだぞ！」

加速した。

姫が一気に加速をかけたのだ。

彼女のシルエットが遠ざかり、橋の上、消失点にむかい疾駆してゆく。

いま彼女の魔導マーターかうなき登りに上かっているはずだ。来る。

魔導の姫の？希望の悲鳴？がやつて来るぞ、  
ゲシュライ・トラウム

シケミツの口せか恐怖にひりついた。だが、それは勝利のまえの試練だ、そう思い直す。

唾液は出ない。出ではくれなかつた。

シゲミツは思い出していた。前回の敗北のときの希望の悲鳴を、あの重力波の爆発を。

砂漠に捨てられたラクダは死期を悟ると、涙を流すといつ。

泣いていた。シゲミツは涙を滲ませていた。  
どうした?  
俺?  
自問する。

レース中だぞ、なにを考えている？

彼は悲鳴を上げそうにな  
両翼、翻り、真っ暗な海。

ハイビームの照らし出すその先、左、照明灯の残像が、魔導の動

視力でもとらえきれないほどのスピードで消える。見えた瞬間、つぎからつぎへと後方へ流れてゆく。

尻の後ろの爆音、震動、流れ襲いかかつてくる暴風。

氣流が水塊のように車体に、シゲミツの全身にまともにぶつかり、まとわりつき殴りかかってくる。

ハのまか絶叫していた。

シゲミツの脳裡にマヌケなラクダの顔がこびりつき、

そのせいで彼は笑いの発作さえ起こしがけでいたマリヤを盾にして、マリヤを、

あの能無しの陰に隠れるんだ、自身に言い聞かせる。

相対距離を100メートル以内に、それをえ帝ていれば

姫との相対距離、一四〇。

マミヤは？ あのバカ野郎、姫のすぐ後ろを走つていやがる。シゲミツは愛騎の魔導メーターを見た。

10万VAH以上の回転数に達していた。

この数値を

それだけのAHを誘導に振り向けることができる数値だ。

シゲニツが絶叫する。

「各騎、  
アイ・サー  
了解つ  
『  
呪法誘導ミサイル全弾発射準備つ  
』

心強い、僚騎たちからの返事がヘルメットの中で響く。

目盛状格子が彼の目の前にひろがる。

勝利の瞬間を告げる照準のレティクルがマリヤの後ろに、その陰に隠れてしまえば。

そのマニヤが、動いた。  
彼は動いた。

マニヤのフォッカーが車線を変更、右へとふわり、鳥の羽ば

たくみたいに  
移動した。

マリヤのスロットル全開らしき加速で、

彼は並んだ。

魔導の姫と並んでしまったのだ。

いま、シゲミツの眼前。

姫のすぐ右でマミヤが並走しているではないか。

いつたい、何万回転出していやがるんだ？

ヘルメットをかぶった姫が それは驚愕か？ 真横のマミヤをちらり、

ふりむくのが見えた。

手にとるようにわかる。なぜなら。

姫は急加速のあと、この瞬間、急ブレーキをかけていたのだから。目前、気がつけば、姫のアルバトロスはシゲミツのすぐ前を走っていた。

レティクル越しに、それがはっきりと見える。

「距離取れええっ」

シゲミツの短い悲鳴だった。

揺れた、東京アクアブリッジ全体が、鳴動した。

以前聞いた。たしかに聞いた、シゲミツの聞いた、これは？絶望

？の悲鳴。

ゲシヨラライ・トラウム

希望の悲鳴が鳴り始めた。

姫とアルバトロスのシルエットが歪む。

重力レンズが発生する。

その歪んだ残像そのものが、シゲミツのフォッカーに迫り、襲いかかってきたのだった。

シゲミツは何かを言いかけ 。

姫の背後の橋梁が、アスファルトが、裂ける。

鱗状にバラバラにめぐれ上がり、その残骸すべてがフォッカーに押し寄せた。

魔導の支配下、橋の上の空間はねじ上げられ、

ねじれの渦にシゲミツたちは突つこんでしまっていた。

シゲミツのフォッカーの前面装甲板フロントガードが吹つ飛び、前輪が消し飛んだ。

ラジエータの冷却水とエンジンオイルの熱を浴びながら、シゲミツは宙を跳んだ。

跳びはねていた。

騎乗すべき己の愛騎は、もはや尻の下で残骸となり、彼といつしよに鱗のアスファルト、

そのせもくれ立つた路面上を滅茶苦茶に転がるばかりだった。

そう、無数の破片と化して。

シゲミツの愛騎は廃車となつた。

前回の対戦につづいて、廃車となつた。

パンダ・信田『俺、最初からマリヤべとの実力気づいたよ?』

芝浦の巨大ビジョン、

右下の小窓に映っている映像は珍妙なものだった。

古町とパンダ・信田、ふたりそろって口を半開きにして、固まっていたのである。

それを見ている観衆たちもぶつ飛んじやつた顔を、皆一様にうかべている。

しん、と静まりかえった芝浦のチケット会場広場。

それでいて、異様な殺氣立つ気配に包まれていた。

口半開きの群衆は、さながらアサリの酒蒸しで殻を開いた貝そのものだった。

それでも古町は違つた、テレビ慣れした男は違つた。

石化呪文を解呪された魔法使いのように、

固まつた状態から一転、言葉を呪文のように吐きだした。

『ええとですね、はいっ、世紀の一戦始まつておりますがさて、ここで一大ハプニングビッグサプライズが我々のまえに出現したわけであります、

シゲミツ、スズキ、オーハシ三人の獵騎兵が一瞬にして

姫の必殺技、希望の悲鳴の餌食となつてしましました、

現在トップは姫と並走するマミヤ、あのマミヤ曹長であります、その後方一〇〇メートルに生き残りのソルベ中尉が追走中であります、

さあ、ここで解説のパンダ・信田さん?』

古町がすかさず右にいるパンダを見た。

パンダは未だ固まつたまんまである。

古町はそれでもめげずに、さあ世紀の一戦、

とか、マミヤ・曹長がついにほんとうの実力見せましたね、とか、姫のいまの希望の悲鳴について一言お願ひします。パンダさん、だとか話をふりつづけている。

パンダが、射殺されたジャイアント・パンダみたいに無反応なので、

古町も切れたらしく、

『さあパンダさん、解説の仕事してくださいよ、

パンダさん、ねえパンダさん？

パンダさん

パンダさん

パンダさん

パンダさん、パンダさんあーーんつ』

こんどはパンダ・信田が切れた。

我に返った様子で、

『パンダパンダうるせえよフルマチ、俺その芸名嫌いなんだよ、こんど事務所に文句について名前替えてもらひやわ』

『あ、話逸らしちゃってーつ、

さすがのパンダさんもマミヤ・曹長の真の実力に

気づけなかつた訳なんでありますけれどもつ』

『バカ野郎、俺は最初からマミヤくん？の実力、気づいてたよ？

もちろん、でもさ、オツズ見てよ、

マミヤくん？は万獣券力ワソウにつけられちゃったんだからさ、雰囲気つてもんがあるよね、

そこで俺ひとり反逆児になつて、マミヤくん？の真の実力に言及してもさ、

場の空気壊すだけなんだよね、

テレビ的にそこら辺気を遣つてあげただけなんだよね

『なるほどつ、さすがはパンダさんつ』

ふたりとも、妙な汗を搔きながら、引きつった笑いをうかべ合つ

た。

いつぱつ公場のほうはといえは、死んだアサリ状態だつた群衆も、息を吹き返していた。

方々から、万獵券だよ、ひょつとしたら万獵券いつけやつこれーつ、

と驚きの声が上がり始めた。

シゲミツらに賭けていたらしい人々は、死んだ虫のまんま、その場に座りこんでしまつている。

ソルベに賭けたらしき人々から絶望的な？ソルベコール？がわき上がる。

そのうちあけこむから、

またしても？引つこめフルマチ？コールが上がつてきた。

それはうねるよつにひろがつて、

「てめえ、フルマチーツ、

おめえマミヤ紹介のとき笑つてたじやねえかあーつ

ひとりが怒鳴り声を出した。

そういうやそだつた、と周囲の群衆がそれに同調し始める。

その同調の輪はあつといつ間にひろがつて、

会場は、？引つこめフルマチ？と？がんばれマミヤ？コールの大合唱となつた。

マミヤコールを叫ぶ連中がマミヤに賭けていないのは、そのやけつぱちの怒声から歴然としていたけれど。

？ソルベコール？を叫んでいた連中は、とうとう沈黙してしまつた。

ナホモマミヤコールのひとりに加わつていた。

「引つこめフルマチーーーつ、もつ、マミヤッ、がんばってマミヤ

ーツ

恋心のフルパワー全開の悲鳴をビジョンにむかつて投げつけていた。

恋心の瞳はつとつ、マミヤのサーチライトブルーのマシン、

その一点のみに夢中になつてゐる。

「あたしのために、あたしとの交遊許可証のために、  
マミヤががんばってくれてゐる、  
マミヤー、超愛してゐるつーつ」

となりでは、機長が貧乏搖すりをしながら悔しがつてゐた。

「チッキショウ、俺も買つとくんだった、  
十万、いや一十万払つてもマミヤ曹長に賭けときやよかつた、  
夢の万獣券つ、クソツ、俺のバカ野郎つ、バカツ、バカアアアアー  
——ツ」

金の亡者も、乙女の恋心に負けないぐら、地獄の底からの雄叫  
びを上げていた。

ジジョンのメイン画面、暗闇のなか、エアマシンから空撮によ  
る中継はつづいてゐる。

マミヤと魔導の姫は並走しながら、  
ライトアップされた東京湾アクアブリッジを通過してゐた。  
荒廃した海ほたる跡地を抜け、  
いま、アクアトンネルへと突入した。

そんなはずは、

この私の走りについて来られるなんて？

マミヤ、あなた、どれだけのパワーを纏してきたの？

姫は、魔導の姫は、世界を支配づけてきた最強の魔導少女は思つた。

急ブレーキをかければ、

すかさず真横の彼もブレーキをかけてくる。

あくまで右隣の位置をキープしてくる。

ときおり、マミヤはフルフェイスのバイザー越し、自分のはづを見てくるのだった。

この魔導の姫と、そのアルバトロスを、じつく、観察するのみだ。

そんな彼が愛おしくもあり、そしてすこし憎らしくも、せんべりも、嫉妬すらも感じ始めていた。

彼の走りに。

彼のもつ、魔導の秘められたパワーに対して。

彼女のアルバトロス、いま現在、

魔導メーターは一三万回転を突破している。

いまのメーターは値が高すぎる、

希望の悲鳴のために上げるだけの余裕が無い。

下手に上げれば、一五万に、赤い絶対危険領域へと突入してしまう。減速よ、メーターの値を落とすのよつ 八万AH？ 九万べつ いに？ そこまで落とす、

それから再び、今夜一度目の希望の悲鳴をあなたに、愛するあなたにお見舞いしてあげる、

許してね、マミヤツ 姫は瞬時に決断した。

右のブレーキレバーを全力で握りしめる。

怒りなのか？ 握る指は震えた、震えつづけた。

トンネル内。

オレンジに輝く照明灯の光に満たされた閉塞空間。左の側壁、見る間にマシンのスピードが落ちて、そこに描かれたくだらないスプレーの落書きが見えるようになつてくる。

今まで一瞬で後方へと吹き飛んできたトンネルの壁。天井も、トンネル全体の光景を余裕で目視できるスピードまで落とした。

時速一五〇キロメートルちょっとぐらう。

姫は魔導メーターを確認した。

七万回転ちょっと。マミヤは？

やつぱり、ぴたり、右横に密着するよつこ、幅寄せをしてくる。

幅寄せ？ まさかつ。

姫は見た、マミヤのサー・キットブルーの車体を。

フォツカーの基本装備、一〇ミリ機関砲も、  
シートカウル  
後部装甲板付近のミサイルランチャーも装着されてはいなかつた。  
そのかわりあつたのは。

マミヤの超軽量化して、高機動性能を得たマシンの左の兵装吊り  
下<sup>ロ</sup>げ架には、  
黒いボックスが装備されてあつた。

それがいま、破裂した。

中から单分子ワイヤーが何本もこぢらに飛び出していく。  
ワイヤーどもは、前部と後部の装甲板に、  
今まで傷ひとつつけられたことの無かつた姫のアルバトロス、  
その深紅の装甲板に食い込んできた。

先端が打ち込み用の装甲貫徹穿刺針となっていた。

山猫を捕獲するための装備。

狹犬が、自分より弱い格下の山猫を、マシンの破壊をすることなしに丸ごと捕獲してしまつ装備。

「ナメた真似をつつつ

魔導の姫は、混じりけ無しの怒りを、叫びをヘルメットの中、爆発させた。

姫が周囲の重力波を一気に膨張させる。並みの狹騎兵なら、一撃で吹き飛ばされるほどの勢いで膨張する。マミヤはすかさずそれ以上に強い中和力場を展開、無効化させてくる。

歪み始めた姫の周囲の空間が、

即座に均衡のとれた状態へと逆戻りする。

さらに彼は、ワイヤーの根元にあるウインチを起動させた。放たれたワイヤーを巻き取り始めたのだ。

フォックターとアルバトロスの車間距離が見る間に縮まりだした。

「くつ

姫は屈しない、あくまで諦めたりはしない。それが魔導の姫の、姫たる証だからだ。

左の爆雷ポッド、装填口の蓋をはね開けて、一番上の呪導爆雷を素手で取りだす。

マミヤのフォックターに押しつけてやるつもりだった。激怒しながら彼のほうをふり向いたとき、

彼は自分の手首のリストア画面をこちらに向けていた。そこににはこう表示されてあつた。

《非常事態につき、国際標準非常時通信回線を開かれたし》

マリヤ、どうしたこと? なにが起きたとゆつの?.

姫は緊張しながらも、回線を開いた。

『レース中よ、説明してつ』

音声変換装置を通した、

姫の電気的に変声された音声がマリヤのまつたに達された。

『初めまして、魔導の姫、

貴女のアルバトロスにはトラップが仕掛けられてあります、  
あともう一度希望の悲鳴を発動させると、  
爆燃機関が暴走して、メーターが一五万を振りきつてもどれなくな

りますつ』

『

姫は即座に理解した。

それがなにを意味するのかを。

私を、暗殺しよとした? でも誰が? 姫が疑問を口こじよう

とすると、

マリヤが、

『H&H社のシャハト氏、それに審問局の上層部です

『いつたい誰からの情報よつ?』

『カグラ護民官ですつ』

『……無能なオンナだつて話を聞いてるけど?』

マリヤが首を横にふる。

『暗殺の情報を察知してから、

カグラさんは必死に貴女の正体を調べてきました、

でも最後までこの機密情報だけは入手できなかつたんだ、  
だから貴女に伝えられなかつた、

俺がこのレースで貴女を捕獲する以外、暗殺を防ぐ手立ては無かつ

た

『そんな、なんてことなの……』

裏切られた、無様だ、

自分のスポンサーに裏切られてしまつとは。

『姫、後ろつ』

マミヤの叫び。

彼女がミラーで確認する。

直線のトンネル後方、相対距離一二〇〇の位置にフォックターが一騎走つていた。

オレンジの照明を浴びて、

ムーンミストグレーの装甲カラーが艶光りしている。

ソルベだ、ソルベのカラーだ、

ヤツのフォックターが後方から猛追してきていた。

呪法誘導ミサイル弾を全弾、一斉発射した。

魔導の姫と、マミヤのフォックター、両車輛にむけて。

## ソルベの嘲笑

やつぱりだ、マミヤの野郎、

実力を隠してきたんだ、

わざと一四連敗してきたんだ、

ソルベ中尉は確信していた。

おそらく奴は魔女たちに同情してきたんだ、だから前回のG?で奴は、乱入してきた記者どもにむかつてほざいたんだ、

?女の子が可哀想だ? そういうたんだ、奴は。

これは明白なサボタージュだった。

ひょっとしたら魔女たちと内通していたのかも知れない。ゆゆしき事態だつた。軍政異端審問局の獵騎兵といつ要職にありながら、断じて許されない。

国家反逆罪に相当する犯罪行為だった。

「魔導の姫と仲よくレースから消えろマミヤ、僕の手で君のキャラリアに終止符を打つてやる!」

ソルベはヘルメットの奥、歯をむき出しにして壮絶な笑みをうかべていた。

あの、魔導の姫を捕獲してのけるほどの化け者だったんだ、マミヤの野郎は。

だからこのレースで一五連敗させてクビにしてやるんだ、奴ほど手強いライバルはおそらく世界のどこにもいないからだ、ソルベの決意は断固たるものだった。

だからマサイルの半数をマミヤに向け発射した。いま、発射した。

全弾を。

ソルベは魔導力場<sup>アーティルハイド</sup>展開のふりわけられるありつたけのパワーを呪法誘導に割いていた。

精神を極限まで集中して、精密誘導に専念する。

トンネル内のオレンジの照明が、

勝利を祝うシャンパンの色にすら思えてくる。

飲んだことはまだ無いけれど、彼は酩酊しているといつて良いほど、

すでに勝利の快感に酔っていた。

あのふたりはなにか通信をしあつてゐる様子だった。

隙を見せたのが運の尽きだぞ、笑いが止まらなかつた。

ミサイルが、ワイヤーで絡み合つた二輪の魔導二輪を猛追してゆく。

「この直線距離、逃げ場はないぞマニアック」

ソルベは嘲笑した。

## G?レース、終了

『姫つ、強制終了つ  
マミヤが叫んだ。

強制終了、ただそれだけ、

そのひと言で姫はマミヤの戦術を解した。

ふたり同時にクラッチを切る。

コクピットの片隅、ちいさな保護カバーを指で跳ねあげる。カバーに守られていたリセットボタンを押した。

己のマシンの魔導爆燃機関を強制終了させる。

瞬時に冷温停止状態にステージを強制移行させる。ふたりの周囲、

魔導の異常重力場が一挙に消失した。

それと同時に動力源の停止したふたりのマシンが急速にスピードを失う。

呪法誘導ミサイル弾は、ターゲットの異常重力場を探知して追尾していく。

それが突然、消えた。

ミサイル全弾は目標をロスト。

迷走状態のままトンネル内を飛翔する。

そのままマミヤたちを追い越していつてしまつ。

それを追うようにして、

ソルベのフォッカーが時速三〇〇キロのスピードでやつてくる。

ソルベのマシンも、ふたりとすれちがい、彼らを追い抜いていつてしまつた。

ふたりの右の車線を走り、ソルベは走つていつた。

ふたりのほうをふり向きながら。

そのフルフェイスの奥には、

どんな驚きの表情のうかんでいたことだらうか？

迷子になつて飛んでいたミサイル弾は、

みづやく目標を探知した。

ソルベのマシンの異常重力場を探知、認識したのだった。  
マミヤたちの前方、数百メートルのところで

ソルベのフォックーが急ブレーキをかける。

彼は、間に合わなかつた。

ミサイル弾すべてが反転していく。

ソルベのマシンに向かい、喰らいついてくる。

爆発。

ソルベのフォックーは全弾被弾して跡形もなく爆散、  
装甲板の破片が飛び散る。

トンネルの内壁にぶつかり跳ね返つてくる。

炎に包まれる。

轟音がトンネルの中を伝わり、残響が何度も重ね合つた。  
マミヤと姫は、黒煙の充満するトンネルを惰性にまかせ、  
低速で走つていった。

まもなく、炎のくすぶる弾着地帯までやつてきた。

爆心地、ソルベがいた。

膝立ちの姿勢で、ふらふらと揺れていった。

全身、エンジンオイルやらスス汚れやらこまみれてしまつていた。

通りすがりのとき、マミヤはねぎらいの言葉をかけてやつた。

「おつかれ、ソルベ中尉、本レースは終了した

『『苦勞様中尉さん』』

姫もなんだかものすこい冷淡な口調で変声した言葉を投げつけた。

ふたりは弾着地帯をやりすこし、

慣性にまかせてマシンを徐行運転していった。

ふたりがミラーを見る。

ソルベがふらつきながら、立ちあがっていた。

ヘルメットを脱ぐと、放り投げてきた。

こちらにむかいで、罵声を浴びせているのがわかつた。

マミヤと姫は、互いを見合つた。

姫にはわかる気がした、

彼が、自分の愛するひとがどんな表情をしているのかを。

ヘルメット越しに見えたけれど、それが手にとるよつに見える、姫

は思つた。

ふたりは、互いの拳と拳で、ぱちんっ、と呴きあつた。

互いを祝福するそれは、確かな証だった。

相手を認め合つた、その証だった。

芝浦の特設会場では、

サッカーワールドカップでニシポンまさかの世界王者、優勝しちゃったかのような空前のらんちき騒ぎになつていて、興奮する群衆をとめる警察の機動隊員などいはしなかつた。警官たちもレースの信じがたい結果をまえにして、

同僚同士、あるいは群衆と手に手をとつてお祭り騒ぎに荷担している隊員まで出でている始末だったからだ。

もはや誰も高架橋からの汚水を睨み上げる者などいない。みんな平氣ですぶ濡れになつて、

あるいは勝手にアルコールやソフトドリンクを互いにぶっかけ合い、いまこの瞬間を楽しんでいたのだった。

ナホと機長も見知らぬ人からアルコールをぶっかけられ、はしゃぎまくつてハイタッチをしあつていた。

ナホは、アクアトンネルのあちこちに設置されていた中継カメラでマミヤの勝利を見届けた。

たしかにこの瞳に焼きつけたのだった。

「やつたあああああああつ機長さんつ、マミヤがあたしのために、

あたしとの愛のために勝つてくれたのよーつ、愛は奇跡を起こすのよーつ、

ざまあみろつエリカ・ヴァンデル・メーアツ」

機長は知らない外人のオツサンからビンビールを一本もらつて、ラップ飲みでいい感じにできあがつてしまつていて、酔いのまわつた赤ら顔で、

「でもなあナホちゃん、曹長勝つたの俺もうれしいけどよ、賭けのほうは……残念だつたなあ

ナホが、ジャンプしながら万歳するのをやめた。

「え？」

「うん、ナホちゃんの単勝狙い、あれな、

曹長が姫のマシンを撃破するつてゆう予想なのよ」

「え、じゃあ、さつきフルマチのバカが

ホカクーツ、ホカクーツて叫んでたけどあれは？」

「そう、山猫を捕獲つつー超絶レアな予想が別にあんの、  
捕獲はただでさえ難しいから、

あの魔導の姫を捕獲つつたら、

倍率は鬼のようにスゲえことになつてんだけうな、

まあ買つた奴なんていねえだろうけどよ」

「……なーんだ、お金持ちになれると思つたのになあ

「しゃあねえよ、そう上手くはいかねえつて」

「うん、だよねー」

ふたりはびしょ濡れになりながら、

それでもほがらかに笑いあつた。

ナホは購入した一口のチケットをブラウスのポケットからとりだした。

「でもこのチケットはね、一生の宝ものにするんだ、あたし決めたのつ」

「おうつ、それでいいと俺も思うぞ」

そうしてふたりは、顔を寄せあい、単勝のチケット、そのEペー  
パーの画面に見入つた。

デジタル表示の画面はこいつ、告げていた。

《購入者の予想結果：山猫の捕獲 最終倍率：七五万一四四二倍》

ふたりの顔から、笑顔が消えた。

消えて終いには、中間テストで零点とつたのに、

先生から「こんなことを言われちゃったときの生徒の顔になつた。

？あんたは良い子だから、特別に七五万点にしてあげたんだから、感謝しなさいよね？

機長は目をしばたたいてから、

「悪いいナホちゃん、俺酔つて幻覚見てるわ、

あちゃーつ、つてか俺ガキの頃一〇〇点だつてひとつなんてね

しよ、

どつちかつつーと悪ガキだつたし

「あたしだつてテストいつも赤点だつて……つてなんの話よつ

？」

「あ？ 僕もわからんね」

ナホは、酔つてなどいなかつたので、立ち直りが早かつた。

「幻覚じや、ないよ？……捕獲のチケット、あたし買つちやつたみたい、つかな？」

機長がぼんやり、ナホを見つめてくる。

「オトナをだな、その、からかうのはよくねーんだぞ」

「だつてほらつ」

彼女がそういつて、機長の鼻つ面にチケットをもつていく。

機長は、しばしのあいだ、

そのダウンロードされ、保存された画面を、削除も上書きも改変もできなくなつているプロテクトの施されたデジタルの文字列を見ていた。

ナホが熱に浮かされた様子で、

茶目つ氣たつぶりのガイジンサン口調で、

「あなたのー、墜落したー、マシンはー、このー、

六人乗りエアマシンタクシーですかあー？」

それとおーもー、このー、超弩級宇宙戦艦ですかあー？」

機長は、さつ、と手を上げて、

「宇宙戦艦でーす」

ふたりは夢じやない証拠に、もう一度チケットを食い入るようご覧いた。

「……ナホちゃん、単勝買うつもりが、ボタン押し間違えた？」

「機長さんに背中押されても、頭つから券売機に激突する拍子になんか押しちゃったみたい」

ふたりは見つめあい、互いに手をとり、

そしてよつやつと喜びを大爆発させたのだつた。

調子つぱずれの社交ダンスみたいに、

ぐるぐる回つて、喜びの輪をつくり踊つた。

「機長さーんつ、うれしそぎて、

十万かける七五万の計算ができないよ？ ビーしょりつ？

「あははっ、俺もさつぱりわっかんねーわ、  
いいんじやねーか、家帰つてからでよつ」

「だよね、それからでいつかあつ」

ナホは踊り疲れて、息を切らした。

機長は近くの若者グループからビールをわけてもらい、また飲み始めている。

彼女は、紙幣サイズのペーパーをしまいながら、

「待つてねマミヤツ、あたし大金持ちよつ、でも……」

もう一枚のペーパーをとりだす。

異性交遊申請書だつた。

うつとり、見つめる。

くすり、とうれしげに微笑み、

大事そうにまたポケットにしました。

七五万かける一〇万円の？テストの答案？よりも大事そうに、ポケットにしました。

## 大佐のオフィスの“三つのクルミ”

そのオフィスルームは、窓の無い閉塞した空間だった。

魔導一輪装甲車輜の一輛すっぽり収まりそうな個室である。この部屋の主に招かれ、退出した部下たちはたいてい、トイレに直行してストレス緩和向精神薬やら、持病の胃潰瘍や不眠症の薬を飲むのだった。

持病の胃潰瘍や不眠症の薬を飲むのだった。

今夜訪れている部下は、第一異端審問獵騎兵連隊の副官である。瘦せぎすの四〇代の男だった。

副官は、胃けいれんと胃酸过多の薬があと自分のオフィスに何錠残っていたのか、ふと考えていた。

それと減る一方の自分の体重のことも。

副官に相対して、スチールデスクに部屋の主が座っている。主はビデオ通信中だった。

彼はヘルマン&ハイネマンのシャハトを呼び出したのに、かわりに秘書の女性がモニタに現れた。

『申し訳ございませんが、シャハトは急遽帰国するためハネダエアポートにむかっております』

R大佐は、極めて落ちついた手つきで通話を切った。

副官は決して大佐の目を直視することなく、その背後の五脚台に掲揚された日本国旗と髑髏の連隊旗との中間に視線を彷徨わせていた。

大佐のデスクの上に置いてある？三個のクルミ？を絶対に見ようとはしなかった。

「事態がどうなっているか貴官もわかったことかと思つが、『はつ、直ちに空港の審問歩兵中隊に身柄を拘束するよう下達いたします』

「拘束、いま、拘束と貴官は答えたのか？」

大佐は右手の強化義手でクルミを一個取つた。

メタリックなカラーの義手の中、

クルミが瞬時に握りつぶされ、粉みじんになってしまった。

副官は頭の片隅で死力を上げて罵けいれんのピンクの錠剤の個数を数え始めた。数えながら、

「では、処断、でありますか」

暗殺を意味する隱語を語るとき、

いつも声の上擦つてしまつのがこの副官の悪い癖だった。

「貴官はその癖を治した方が良い、

生きて局から出て家路につきたければ、そのほうが賢明だ」副官のピンクの錠剤の数え方が三倍速に跳ね上がる。

「至急、手配、いたします」

「それと、マミヤ曹長の件だが」

「はつ、魔導の姫共々、速やかに処断を

メタリックの義手が、一個目のクルミを破碎してしまつた。

副官は、痙攣した胃全体が喉元にせり上がりつてくる感覚に、眩暈に襲われた。

「どこの世界に貴重な獵騎兵を、手塩にかけた部下を処断する馬鹿がいるとゆつのだ？」

「……で、では？」

「マリヤ曹長の一因連敗は明白なサボタージュ行為であった、

国家反逆罪の構成要件を満たすものと思料する、

よつて、ゴーレの芝浦パークリングエリアに審問憲兵一個小隊を派兵、速やかに逮捕せよ、

なお、？抵抗する場合は即座に？射殺せよ、

即座にだぞ、？抵抗する場合は？だ

「……はい」

「魔導の姫も銃撃戦の中、

流れ弾を受け死亡するかも知れん、

残念ながら混乱した戦場では、？よくあること？だ、ちがうか

「はっ」

「そしてこれが最大の任務だ、

姫のアルバトロスを確實に全壊、廃車にするのだ」

副官は、ほんの数瞬、理解するのが遅れてしまった。

「解らんのか？

あれは、トラップの仕掛けられたままの

？証拠物件？なんだぞ、

なぜマミヤが難度の高い捕獲を試み、成功したのか、貴官は考えたことが無かつたのか？

副官は、ほとんど波打ち際に迫いやられてきた深海魚のようになつていた。  
口からすべての内臓の飛び出していくのを、両手で押しもどす妄想にとらわれた。

「マミヤ曹長が、司法関係者に、内通していたと……？」

「警視庁か、護民局か、いずれかだ」

副官が脂汗を垂らし始めたとき、

デスクのビデオ通信で審問局諜報部から緊急の知らせが入った。

相手は諜報部長だつた。

大佐の顔を見るなり、即座に本題を切りだした。

『最新情報です、南東京市から人権護民局のヒアマシンが「ゴールにむかっております、

カグラ護民官の機体です』

「わかった、ご苦労」

『信じられません、あの無能な女護民官が』

「なら君が無能で、

あの女狐は有能だったということだな、我々の敵は護民局に決まりだ』

『……』

諜報部長がなにかを言いかけた。

大佐は無視して回線を切った。

副官はトイレに駆けこむときの来るのを秒数で数え、待っていた。

大佐は、デスクの上の二個のクリミの残骸と、

生き残っている一個とを見くらべて、

「君の副官としての？ライフ？は本日残り一個な訳だが、

有効に活用したまえ、

君の、

その、

中佐の、

階級章は、

一体何のためにあるのかね？』

『連隊副官の軍務を全うするためであります』

「なら全うしたまえ、今、すぐにだ』

魔導の姫が、マリヤの態度に相当お怒りの様子です。

マリヤのフォッシカーと魔導の姫のアルバトロスは、ワイヤーでつながったまま並走していた。

魔導爆燃機関を強制終了してしまったため、メンテナンスを受けるまでは使用できなくなっている。

かわりに予備の動力源である水素燃料エンジンに切りかえていた。ふたりの運転は、息がぴったりだった。

まるで昔からツーリングを重ねてきたカップルのように、むかつっていた。

時速八〇キロ未満の安全運転で、ゴールの芝浦パークリングエリアに

マリヤはこれからことを、

非常時通信回線を通して姫に語って聞かせていた。

姫が彼の説明を聞くにつれ、怒りに頬を強張らせていく。

『じゃあ、私のアルバトロスが証拠品なわけね？

これをカグラ護民官に渡すまでは死守しないといけないってこと

？』

マリヤはうなずいた。

『このG-は姫の出走したビッグタイトルです、

世界中のマスメディアの注目の的です、

だから芝浦でゴールするまでは、

R大佐といえども思い切った措置は講じてほこれないでしょ？

『問題は、そのあと、ね？』

『はい』

『護民局ってどこまで頼つていいのかしら、

つてゆうか護衛とか、頼りにできるの？』

『無理ですね、都内の護民局本局はカグラさん曰く、ふぬけの集まり、だそうです、

南東京市の護民局分室には、カグラさんの指揮下に精銳の護民局捜査官が結集しています、

しかし兵力差が違すぎるんです、

圧倒的に異端審問局のほうが戦力は強い

『じゃあどうすればいいの？「ゴールを過ぎたあと？」』

『カグラさんのエアマシンがゴールで俺たちを待っていますが、大佐はそこで総力を挙げ妨害してくるでしょう』

『私は魔導の力があるわ、なんだつたら感情を高ぶらせて、第三級暴走くらいやつてもいい気持ちよ

今は？ でもマミヤ、貴方は？

魔導石の補給がつづかない、たしか出走前には

『はい、一〇カプセルの魔導石を服用しましたが、時間的に余裕は無いでしょ、

それにしても暴走とは、姫も過激ですね』

『そんな余裕かましてる場合じゃないでしょ？

なんだつてやってやるんだから』

『ご安心を、一応秘策があります』

『どんな？』

マミヤが姫のほうをふりむく。

姫には、彼がヘルメットの奥でなんだか微笑んだよ、そんな風に思えた。

『これです』

彼はそういうて、股のあいだの燃料タンクを手で叩いた。

『あ、そつかつ』

『はい、姫の魔導力で燃料タンクを切り開いて、中から未使用の魔導石を取り出します、

それを俺が服用してなんとかしきりますよ、少々機械臭いでしょ、ここは我慢です』

姫はなんだか気分の浮き浮きしてくるのを抑えきれずについた。  
マリヤ、貴方はいつたいじこまでいこいつとやうの、

「の私はすり、ついてゆくのがせこまつぱこつてところかも知れ  
ないのに？」

そんな感慨に浸つてしまつ。

いつそつこのひとへの想いの高まるのをひしひしと感じてしまつ  
……。

けれど、油断はできない。気を引き締めなければ。  
敵は、未だ健在で自分たちの飛びこんでくるのをすぐすね引いて  
待ち受けているのだから。

姫はそこまで考え、とある想いに行き当たつた。

途端そわそわと落ち着かなくなつてしまつ。

『姫？』

すぐに気づかれた、

やつぱりこのひとにはかなわない、そう思った。

『マリヤ……曹長？』あ、あのね、あのう、し、視診……は

彼が一ひじりを見てくる。

姫は真っ直ぐ前方を見たつきり、

マリヤのほうを見れなくなつてしまつ。

いま、ふたりは多摩川トンネルから羽田エアポートを通過、  
湾岸線に入つていた。

東京湾岸の重工業地帯。

深夜を過ぎてもなお、煌々と人工の光が満ちあふれている。  
正面も左右の景色も、どこもかしこも。

上空には飛行機たちの大渋滞が見える始末だった。

『あのね、あの、できればなんだけど、ね、

この先の東京湾トンネルあたりで、  
その、人の田の届かないところでね、  
わざわざ、と済ませてもうるさい

……私は、は、はず、恥ずかしくないってゆうか、

なんてゆーか……いちお、その、

姫とまで呼ばれてきた私、だし、その……』

顔が火照る。

ホントにもう、このひとのほうを見ることが好きやしない。

マリヤは前方をむいて、

『視診はしません、』安心ぐださこ、姫

え？……クエスチョンマークがうかぶ。

姫の思考がちょっとヤバくなつた。

真つ赤っかとゆうか、

ピンク色つてゆうか、

うれし恥ずかし貴方に捧げちゃうモードだったモノが、

思考回路が破綻を来してしまつた。

『…………しないの？』

『はい』

『マジ？』

『はい』

『なんですよ、ビーして？ 私の……ホウキへし折らないの？』

『しません』

『なんで？ 貴方まだこの期に及んで公式ルールを破るの？

理由はなによ？ いってみなさいよ』

そういうで、マリヤのほうを睨みつけた。

マリヤがこっちを見た。

姫はすぐさま、前方にむきなおる。

……こまは、できません……。

『理由ですか？

いまはそれどころでは無いからです、  
証拠品を一刻も早くカグラ護民官に『届けねばなりません』

姫が、がつん、と一発、

自分の両の太もものあいだの燃料タンクを握り拳でぶん殴つた。  
思いつきり、ぶん殴つてやつた。

愛騎のアルバトロスにこんなマネをしたのは初めてのことである。

『姫？』

『あつ

そつ？

そうなんだ？

それどころではない？

ふーん、そうなんだ？ それどーじゅー？

どーも失礼しましたわね、

私の……（ふるぬーど、なんて口が裂けてもいえないから省略）

……なーんて所詮、貴方にとつては、

それどーじゅの一言で片づけちゃうシロモノなんだ？  
はいはいそうよ、どうせお粗末なもんですよ、

私の（略）なんてつ

怒りにまかせて、呪導爆雷の投擲スイッチ〇二。

しゃこんつ、と小気味の良い音を立てて、

爆雷が後方へと一発吹っ飛んでいった。

時間差を置いて湾岸線の路上、大爆発をおこす。

マハヤマ、のけ反り、ばかりに驚いた様子で、  
後方を見やつていた。

しばし、呆然としていたようだ、それから姫のほうを見て、  
『レースはもう終了です、

姫、初めての敗戦と陰謀に巻きこまれて殺氣立つお嬢持ちは解ります、

ですが何卒お控えください、

老朽化している路線とはいえど、我が国のインフラですので

がつーーーーんつつつ、ぶん殴つた。燃料タンクを。

また姫は、がつんづ、と猛烈な一撃を拳に託して殴りつけた。自分のふたつの、ふるん、とした太ももに挟まれた燃料タンクを、愛騎のタンクを一度にわたつてぶん殴つてやつたのだつた。

姫はバイザー越しに、その太ももを、肉感的ないい感じのラインを描く下肢を見た。

肌にぴつたりと吸いついたマギアパンツァーにくるまれた肉体。胸のふたつの曲線。

小ぶりの魅惑的なふくらみが、カラダのすべてのシルエットが、肉体が露わになつたようにくつかり浮きあがつてゐるといつのに。

姫自身、

そんな肉体を見せたいのか、

見せたくないのか、

いつたい全体どっちなのか、

もうすでに訳がわからなくなつちゃつていたんだけれど、とにかくムカついたのである。

絶好のチャンス？

つだつてゆーのにこのアホンダラのスジトコドジコイはつ  
愛してるけど、

許さんつ、姫は思った。

愛してるからこそ、許さんつ、

そう思い、怒りを異常重力場の爆発の「」とく膨れあがらせていつた。

マリヤは、そんな姫をしげしげと眺めやつていた。  
ひとつ、おおきく、うなずいた。

『俺のせいで七一連勝の大記録が破れた件、  
たしかに心中お察しします、俺のせいです』

そういうて、しゅん、となつてしまつた、彼は。

そうよ、あんたのせいよつ、全部あんたが悪いんだからつ、

姫は思つた。

もしあなたなんかこのアホンダラが言おうもんなら

一発目の爆雷を投擲してやる、そう決めた。  
決めて指をスイッチにあてがつた。

## カグラ、祈る～#N浦の「ホールにて～

高度三〇メートルの低空から見た、

芝浦パークイングエリア、栄えあるG?の「ホール。

普段なら勝者を讃える栄光の舞台だ。

ライトアップされ盛大にセレモニーのおこなわれるのが常である。それが今回は違った。

普段なら群がっているマスメディアの姿は、

民放のエアマシンは影も形も無かつた。

かわりにいたのは、軍政異端審問局の武装エアマシン。

それと人権護民局、南東京市分室のエアマシン、

カグラのマシンだった。

ふたつのマシンは、ホール上空で睨みあいつつして、ホバリングの姿勢をとっている。

野戦服姿のカグラは、Hアマシンの胴体ハッチを開放して、身を乗りだすように地上を見下ろしていた。

ゴール地点、マミヤと魔導の姫の姿が見える。

フォックターとワイヤーでつながった深紅のアルバトロスの姿もだ。パークリングエリアの路上で、少年と少女は微動だにせずにいる。ふたりから距離を置いて、審問局の憲兵隊が配置についている。高速道路を封鎖して、ふたりを狙撃する布陣を敷いていた。

両者の対峙は、一触即発の雰囲気である。

カグラは舌打ちして、

「やつてくれんじやないのR大佐？」

でもそろは問屋が卸さないのよんつ

にやつ、と笑んで、ヘルメットのヘッドセッタマイクで通信回線を開く。

「地上上班つ、準備はつ？」

『こちら地上A班つ、姉御つあともつ五分お待つをつ』

カグラの部下である特別捜査官が野太い声で地上から応答してくる。

さうにB班、C班からぞくぞくと報告が入り出す。

「一分でやれつ」

カグラが怒鳴る。

おまえら遅いつなにやつてんのつ、

そう彼女が威勢よく　　姉御と呼ばれる由縁だ　　さうじぞやつける。

それからマリヤと取り決めておいた非常通信のチャンネルを選択して開いた。

「マリヤ曹長、聞こえますか」

『　　はい、カグラさん』

「いいですか、絶対に憲兵の挑発には乗らないでください、予定どおり地上班の工作開始を待つていてください」

『……でも、カグラさん、それは』

「これはすでに戦争です、奇麗事のいえる段階を超えておりますつ」

カグラはとなりに陣取つている部下の捜査官に、

「憲兵隊、戦力は一個小隊つてといふよね」

「はい、姉御の読みが当たりました、

騒ぎおおきく出来ねえから中隊規模はさすがに派兵できんかつたようですが、

伏兵の配置も対人レーダーに反応はありませんつ

捜査官が答えると、

カグラは男の短髪をぐりぐりとなでながら、

「OKツイイ感じつ、あとは地上班ね」

捜査官が双眼鏡で地上を観測しながら、

「ただ、憲兵隊の猟騎兵たちがマミヤ君にどれだけ敵意をむけるか、気がかりです、猟騎兵の連中、化けもん？で狙撃するつもりですよ、姉御」

カグラも地上を注視した。

少年たち、異端審問猟騎兵だ、六人の少年が伏射の姿勢になつてアスファルトに身をあずけていた。陣地を構築し、自動車道を塞いでいる。

同僚のはずのマミヤに、一脚に支えられた巨大な銃身をむけているのだ。

ヘルマン＆ハイネマン社傘下の軍需企業の開発した、アンチ・マ

ギア・ライフル。

対魔導狙撃銃。呪法弾を装填し、

マギアパンツァーを貫通させる、そのための専用ライフルだった。対空機関砲としても使われる「〇／＼×—〇／＼」の強装呪法弾薬を使用する、

まさしく化けものライフルだった。

六人の陣地は強化複合装甲板と土嚢を組み合わせ、結界呪符の張られたもので、防御に関しても手抜かりはない。その背後に指揮車の装甲車輛が一輛停車しているのが見える。

「早く、地上班急いで！」

カグラが祈りの言葉をつぶやいた。

その時。

動いた、マミヤと魔導の姫が動いた、ふたりがなにかささやき合づ仕草をして、前進を始めだした。魔導一輪から降り、徒步で進み出したのだった。二輪の愛騎とともに。

「マミヤくん！」

カグラが叫ぶ。

六人の二〇ミリ狙撃銃が、一斉に火を噴いた。

『マミヤ醜長、聞こえますか  
カグラ護民官からの通信だ、  
マミヤは通話を始めた。

魔導の姫はアルバトロスに騎乗して、  
停車したままの、この膠着状態を不快に思つていた。  
いつもなら押し寄せる報道関係者はひとりとしていない。  
民放のエアマシンも、ふたりがゴールの瞬間をむかえると、  
直ちに審問局によつて撤収させられてしまつたのだった。  
これが報道協定、つてヤツです、  
そつマミヤが教えてくれたのだ。

『……でも、カグラさん、それは  
マミヤは沈痛な表情を見せていく。

カグラとの通話を終えた。

『どうしたのマミヤ?』

まだわだかまりは残つてゐるので、  
ちょつと怒つたような口調になつてしまつ。

でもあの数十メートル先、あの強固な憲兵たちの陣地を見ると、  
さすがの姫も痴話げんかを そうだ、痴話げんかなのだ、  
あれはまぎれもなく 引きずつてゐる場合ではない、  
それはわかる。

姫は、自分と彼のマシン、

両方の燃料タンクを見た。

姫が引き裂いた裂孔が無残に刻まれている。

マミヤは? 秘策? どおり、

すでにタンクにけつこう残されていた魔導石を服用してゐた。  
マミヤの助言で、姫も生まれて初めて魔導石を服用してみた。

パワーが、全身に漲つてくるのがすぐに解る、恐るべきシロモノだつた。

その証拠に、ふたりの体のシルエットを覆つてゐるのは、まぎれもない魔導の光、蒼白に美しく光り輝く、月光を思わせる哀しげな光である。

マリヤは考え方をしていようつだつた。

うつむいて、なにかじつと思考をめぐらせてゐる、そんな雰囲気だつた。やがて、

『姫、憲兵隊は思った以上に強固な陣地を構築していますがしかし突破しようつと思ひます』

『望むところじゃない?』

姫は、うつすら、笑みすらうかべていつてのける。

第三級アーデルハイド暴走ぐらいなら起こしてみせる、そつ彼にいつた。それは、本気の言葉であつた。

やつてやる、マリヤに害を為す敵は、ひとり残らず倒してやるんだ、

そつ、姫は強い決意を固めていた。

憲兵隊陣地から、スピーカの声が大音量で聞こえてくる。

『マリヤ曹長、降伏したまえ!、

貴官には国家反逆罪の容疑がかけられてゐる、投降すれば、"身の安全は保証"する!』

『どの口でゆうのかしら、よくいえたもんよね?』

姫の憎まれ口こ、マリヤも肩をすくめて、

『いきましょう、姫』

『ええ、元のパワーに石の力もプラスして、いまの私は無敵って感じよ?』

全力で中和力場の掩護を貴方にしてあげる、

大船に乗つたつもりでいてね』

『心強いです、姫』

ふたりはうなずきあつた。

水素燃料の切れかかっている車輛から降りる。

互いのマシンを押しながら前進を開始し始めた。

連続で爆音がした、いや、これは銃声、

アンチマーキアライフルの銃声だった。

マミヤの中和力場に、六発もの呪法弾が直撃する。

彼がその衝撃にのけ反る。

呪法は中和され、強装弾は、跳ね返り跳弾となつて、車道の先、アスファルトの彼方へと消えていった。

『マミヤッ』

彼は頭を数回振つて、姫にうなずいてきた。

だいじょうぶです、そういうてくれた。

時間が無い、焦つた様子で、

つぶやきをもらしてくる。

『急ぎましょ、姫』

ふたりは駆け足となつた。

魔導の力で増した腕力で重装甲のマシンをかろやかに押しながら、自動車道を駆けていった。

さらに爆音。

マミヤと姫、双方に精確な弾着で襲いかかつてくる。

それでも中和した。

それでも衝撃波はものすごいものがある。体の芯まで響いてくる。

『強烈ね、あのライフル、思つた以上だわ』

『ええ、叛乱を起こした猟騎兵を射殺するための物ですから痛みをこらえる、それは聲音だつた。

『だいじょうぶつ？ 怪我したのつ？』

『平気ですよ』

「マリヤは、姫を勇気づけるように首を縦にふっててくれた。

何度も。

陣地まで、

あと魔導一輪が三輪分ほどの間合いで詰めてきていた。

陣地内の混乱がわかるよくなつてへる。

指揮車の脇で、審問官たちが通信をおこなつていた。声が漏れ聞こえてくる。

『はい、たしかに魔導石の力です、

マリヤは未だ魔導石のパワーを保持しております、

理由は不明で』

ざまあみろ、姫は思った。

さらに至近距離から爆音が六発。

姫のヘルメット付近の中和力場に命中、それと胸のあたりにも。鋭い痛みが走っていた。

姫は呼吸が困難になってしまった。

すかさずマリヤが そんな余裕無いはずなのに 腕を肩に回

してくれた。

ふたりは互いを支え合い、

陣地突破を目指し、

前進をつづけた。

陣地から、ひとりの少年猟騎兵が、立ちあがつた。

「マリヤ曹長、もう止めろつ、限界じゃないのかつ、

俺はもう撃ちたくないんだつ」

ほかの五人に、後方の指揮官たち、

審問官たちにも動搖のよつたものが駆け巡るのが見えた。

審問官が、貴様裏切るつもりかつ、

そう少年を怒鳴りつける。

『仲間割れだわ、マミヤジ』

肩を寄せあつてゐる最愛の人を見る。

ヘルメットの下、バイザーの下から、流血が見えた。  
マミヤは、吐血していた。その血がフリッシュヘルメットからじりじり  
れだしていたのだ。

『しつかりして、マミヤジ』

中和力場をあつたけ割いてあづようとした。

『駄目です、姫、貴女の命が危ない』……

『そんな、だつてつ』

さりに五発の爆音。

ふたりは体中に撃ち抜かれたような打撃を受けた。

アルバトロスにも何発か命中してくる。

装甲板と中和力場でなんとか切り抜けた。

ところがマミヤに異変が生じた。

膝を震わせ、路上に屈しそうになってしまつ。

『マミヤ、嫌つマミヤ駄目、しつかりしてお願いつ』

姫はパワーの死力をふりしぼり始めた。

やつてやる、皆殺し、にしてやるんだからつ。

アーデルハイド暴走を。

姫の目の前、怒りに視界の狭まつてゆくのがわかる。

マミヤが強く、とても強く、手を握りしめてくれた。

『駄目、です……姫』

『つ……でも、貴方の傷がつ』

陣地にさりに騒ぎが広まつていて。

『俺も嫌です、こんな処刑はごめんだつ』

路面に伏射の姿勢をとつていた別の獵騎兵が立ちあがる。

後ろの審問官が彼を殴り倒した。

俺もだ、僕も嫌ですっ、

つぎつぎと狙撃手たちが反旗を翻し始めた。

陣地が混乱を極めだしたとき

パーキングエリアの両脇、地上とつながつてゐる非常階段から群衆が溢れんばかりに路上へと飛び出してきた。

『始まつたか……カグラさんの作戦……』

『なに、どうゆうこと?』

群衆は鯨波を上げて、

マミヤたちと目前の陣地の小隊にむけ突進してくる。

憲兵小隊はパニックに陥つた。

審問官たちが威嚇射撃を始め出す。

群衆はとまらない。

怒りに染まつた市民らは、陣地に殴り込みをじみつとして、

結界の呪符に触れ悲鳴を上げた。

マミヤと姫はあつといつ間に人々に守られるかたちで取り囲まれた。

階が口々に、ヒーローのマミヤ曹長だつ、

マミヤを守れつ、そう叫んで氣勢を上げる。

陣地の呪符結界で失神した民衆がつぎつぎと折り重なりだした。人々はその体をよじ登り、

土嚢と装甲の遮蔽物を乗りこえ陣地内に殺到した。

憲兵小隊は、指揮車と降下していたエアマシンに逃げ込み、命からがら、潰走していった。

マミヤたちの輪の外、怒声が響いた。

どかんかいおんじれらあつ、どう聞いてもそのスジの人の怒鳴り

声だった。

厳つい大男が　遺伝子レベルで顔面がジャガイモにそっくり、

姫は思った　人の波をかきわけてふたりの元に現れた。

その後ろにつづく人影はなんと、

ナホと、マミヤを乗せてくれたあの機長だった。

『いつたいどうしたの、これ？　なにが起こったの？』

姫は軽くパニックになっていた。

「マミヤッ……え？　やだ、怪我してるの？」

ナホが悲鳴を上げて、マミヤに駆けよる。

彼の両手を握りしめた。

『かすり傷さ、ナホ』

「でも、だつてつ」

『水を差すようで恐縮だけれど、事情をじて説明願いたいわ』

姫が愛するひとつ、

突然現れた？私を犯していくださいと懇願中？のセンパイとを引き離した。

ナホがあからさまにイラッ、とした表情を姫にぶつけてきた。

姫もバイザー越しに睨む。

機長が咳払いひとつしてから、話を切りだした。

「あんたが魔導の姫様かい？

まあ曹長も聞いてくれや、

下の国道でよ、俺らのヒーローマミヤが銃殺されるつづー噂が急にひろまりだしてよ、

最初誰も信じなかつたんだけど、

高架橋の上で憲兵のクソどもがスピーカーでがなりだしたろ？

あれでマジってわかつてさ、

みんな一斉に非常階段昇つて応援にきたつて寸法だぜつ

機長は実に得意げだった。

「なによ機長さんはなんにもしてないじゃないつ

「ナホちゃん、それはいっこ無しだぜつ

周囲の輪に笑いの大合唱がひろまつた。

誰も、なぜ、厳重に封鎖されているはずだった非常階段が実際に都合よく開放されていたのか、気づいていない様子だった。

マリヤは、呼吸を整えて、

『市民に、犠牲者は出でませんか?』

彼が周囲に訴えた。

みんなが、そうだ救助だつ、と口々に叫び出す。

群衆の中で即席の救護班がつくられた。

誰もが手伝い合つて、失神していた人々を助け起こす。

医師が数人名乗り出てきて、

かんたんな治療がパークリングエリアの路上で始まつた。

## マリヤとカグラの約束

「勝つたわ！」

カグラが勝利のガッツポーズをした。

その満面の笑顔が、

上空から聞こえてきた爆音とともに急速に薄れてしまつ。

カグラ、部下の男、コクピットのパイロットらは上空を見た。  
飛来してくる武装エアマシンを見た。

第一異端審問獵騎兵連隊、

第三大隊の獵騎兵と審問官らを満載した大型エアマシン、  
四機がパーキングエリア上空にその姿を見せた。

「ちっくしょう！」

カグラは怒りを露わにして、

近づいてくるエアマシンを睨みすえた。

眼下には、回収する予定だったマリヤや曹長、

魔導の姫と深紅のアルバトロスがいるとゆうのに。

ふたりは群衆に囲まれて、

すでに海岸通りの高速自動車道を北上し始めていた。

マリヤと姫は肩に互いの腕を回し合つてゐる。

魔導二輪は大勢の群衆の手で押され動いていた。

カグラの機体に第三大隊のエアマシン一機が近づいてくる。

『人権護民局のエアマシンに告ぐつ、

直ちに当該空域から離脱せよつ、

その他いかなる行動も叛乱帮助と見なし、

暴徒並びに貴機に対し攻撃を開始するつ

スピーカで警告してくる。

エアマシンの回転式銃座がこちらに機関砲の砲口をむけてきた。

カグラは地上のふたりを見た。

「あとすこし、もうちょっとで回収できるといだつたのにつ」

「無理です姉御、ひとまず撤収しましょ、うつ」

カグラの決断は早かつた。

「マリヤ隊長、応答願います」

『…………カグラさん…………』

声が弱い。

カグラは唇を噛みしめた。

焦りをこらえ、噛みしめた。

「法務省の庁舎前で待つております……待っていますつ絶対につ」

『はい、必ずいきます、アルバトロスを、

届けます、必ず……待つていてください』

通信が切れる。

カグラはヘッドセットマイクをいつのまにか握りしめていた。きつく、握りしめていた。

爆発しそうな感情を押し殺し、深呼吸ひとつしてから、  
「本機はこれより法務省エアポートへむかうつ」となりの部下をふり返り、

「ネット班へビデオ送信しろつ」

「了解つ」

「地上班は撤収つ、ネット班は受信次第、情報拡散開始つ

『こちら地上A班了解』

『B班了解』

『C班了解』

『こちらネット班、作戦を開始しますつ、現地映像送られたし

つ

パイロットと部下、各班班長らが同時に叫ぶ。

カグラの部下が、

録画した? マミヤ VS 憲兵隊? の映像をネット班へむけ送信開始した。

彼女のエアマシンは急速反転、一路霞ヶ関の法務省庁舎へむけ、全速力で飛翔を始めた。

「いまからそつと行くから、クビ洗つて待つてろ」

熱帯夜だった。都心環状線、芝公園出口付近。

高架線の路上に猟騎兵連隊第一大隊、  
及び審問局の普通科歩兵一個大隊が展開、  
環状線を封鎖していた。

時刻は〇二〇〇（マルフタマルマル）時。  
第一大隊の指揮官である、その少佐は、  
ブラックコーヒーを飲み終えて、  
再び己のリストラブに見入った。

『人権護民局より全政府関係者へ通達』

そのメールに添付されていたのは、

R大佐とヘルマン&ハイネマン社の癒着、

今回の？魔導の姫？暗殺計画の概要、

それを阻止したマミヤ曹長の活躍を要領よくまとめたテキストファ  
イル、

さらに憲兵小隊が、  
？ヒーローであるはずのマミヤと魔導の姫を一方的に狙撃しつづけ  
る？

現地映像だった。

ほんのつい、さっきまでおこなわれていた？処刑失敗？の映像だ。

少佐の鍛えられた体を駆け巡るのは、  
虚脱感、疲労感、怒り、

部下のマミヤを誇りしへ思つ氣持  
第一大隊はマミヤの属する  
隊だ

なぜその実力を今まで隠してきたのか？

その疑問、彼の才能への嫉妬。

これ以上数え上げても切りはないので、  
「一ヒーカップを口にもつていった。

空だったことに気づく。

少佐は、空の「カップをしげしげと眺めやつてから、  
指揮下の獵騎兵たちを見た。

少年たちは、陣地で配置についていた。

ただし、？敵？のほうではなく、少佐を、

装甲指揮車のかたわらに佇む自分のほうを見ていた。

定員一七名のうち、

マミヤをのぞく一六名全員が、

ひとり残らず少佐のほうを見つめていた。

おなじ陣地で配置についている普通科歩兵の一・三〇〇代の若い兵  
たちは、

奇異な顔でこの？ヒーラーの一六人？を注視している。

陣地のさりにそのむこうがわ、

都心環状線いっぽいに大群衆がヤジを飛ばしている。

サーチライトのビームを浴びて、はつきりとマミヤたちが見える。

最前列、中央には、

マミヤ曹長と魔導の姫、

そして「一輪の魔導」一輪装甲車輛があつた。

その両脇を市民らが溢れかえらんばかりの熱氣とともに守りを固  
めている。

市民は、移動できるように車輪のついた強化複合装甲板を

憲兵小隊からの戦利品を前面に押し立てていた。

彼らは、歩みをとめる「となく、  
すこしずつ、

こちらへとむかってきている。

大隊副官の大尉が装甲指揮車から降りてきた。

少佐に敬礼してから、

「連隊本部の R 大佐からです」

副官の声には、あからさまに恐怖、そして緊張がある。強張った仕草で、指揮車のビデオ通信端末を差しだしていく。

少佐は受けとった。

『大隊長、なぜ攻撃しないのだ?』

少佐の顔を見るなり、R はいった。

少佐は脳内で翻訳してみた。

R がこいつゆづ聲音のとき、ヤツはこいつてしているのだ。

? 大隊長、貴様の最後のクルミを叩き潰すぞ? と 。

少佐は微笑んで、

「連隊長、しばしあ待ちを」

いやいやいや、軽く走りだして、

陣地の土嚢を乗りこえた。

ジャンプして飛び降りると、市民たちに、マミヤに向かって走つていった。

背後から、副官の呼びとめる声がした。

若い猟騎兵らも口々になにか興奮して叫んでくる。

「おひつ、使者か? 審問局から使者がきたぞーーー!」  
市民たちのあいだで方々からそんな声がわき起つる。  
少佐はマミヤの真つ正面に立つた。  
マミヤは、魔導の姫、それと見知らぬ少女に両肩をあずけていた。  
ふりつきながら、少女らに回していく腕を引つこめ、  
直立不動の姿勢をとる。

「大隊長直々、恐縮であります」

マミヤは敬礼すると、いった。

「さて、マミヤ曹長、降伏してはみないかね?」

「出来ません」

『なにをしているのだ』

端末からRの声が響いてくる。  
マリヤが惊讶な顔になつて、

「R大佐と、通信が？」

少佐はうなづいた。

端末を高々と掲げた。

「さて市民諸君つゝて、護司から的情報はすでにネットで知つてゐる  
とかと思つがつ？」

市民たちが、

知つてゐるぞーつ、と揃えたよつこ一斉に答えてくる。

「ここに？黒幕の？R大佐とつながつてゐる端末がある、  
誰かひとり話があれば好きにするといつ

「おひせ仕事やあつ」

三〇代ぐらいの男がすぐさま乗り出してきた。  
ペールビン片手にイイ感じになつてゐる。

「君は？」

少佐の間に、男は、

「名乗る由は無えなあ、しがねえタクシーのパイロットよ

その男は、少佐から端末を受けとるなり、

「おー、あんたがRかい？　ああ？」

『……何だ？　この酔つぱらーいはつ？』

「いいか、耳かっぽじつて良く聞け

『誰にむかつて物をいつてゐる？』

機長は、盛大に息を吸いこむと、

「　いまからそつち行くからよつクビ洗つて待つておや、じひらあ

あああああああつつつ

「

機長はまたビールを呑んで、上機嫌に少佐に端末を返してきた。

「だ、そうあります」

『少佐？ 君のクルミは』

「いまはつ、いまは、連隊長、あなた御自身のクルミの残り数を数えたほうが賢明ですな？」

Rがまだ何か言いかけるところを、

少佐は通信をたたつ切ってやつた。

後ろをふりむく。

「第一大隊の諸君つ、ここに諸君の同僚、

マミヤ曹長がいるつ、

私はあえなく捕虜となつてしまつた訳だが、  
君等は？ 君等はいつたい、どうするかねつ？」

一二六人の少年たちが、一瞬息を呑んだ様子だった。それから。

少年たちは拳を突きあげ、絶叫した。

ガツツポーズをし合つと、魔導の力で邪魔な土嚢を片づけ始めた。  
猶騎兵の狙撃なくして、マミヤと魔導の姫の前進を阻止することは不可能だ。

魔導の力のない普通科歩兵大隊の隊員らは恐慌状態に陥つた。  
統率を喪い、陣地後方の何機ものエアマシンに搭乗してゆく。  
兵を満載したマシンから順に、都心環状線から飛び去つていく。  
猶騎兵第一大隊付きの審問官らは憎しみの視線をむけてから、  
指揮車で逃げ去つた。

## 大佐の？切り札？

法務省の隣、軍政異端審問局庁舎の地下六階、作戦司令室。

R大佐は自分のオフィスからこの堅牢な地下のひろい空間へと移動してきた。付き従うのは、暗殺作戦に参加した異端審問官たち数名、それと連隊副官のあの瘦せた中佐だった。

司令室には、そこには、いるはずのオペレータも事務官たちの姿も誰もいなかつた。磨き上げられた床には、エペーパーが無数に散らばっているばかりだ。

連隊副官が声を震わせて、

「スタッフが……逃げたのか？ ひとり残らず？……」

R大佐は無人の己の城を一瞥してから、副官にむかい、

「第一大隊総員に動員命令を出せ、第三大隊、空中から催涙弾を散布せよ、防衛大臣に国軍の出動を正式に要請せよ、理由は首都において大規模な叛乱発生、狹騎兵第一大隊が叛旗を翻し、暴徒に合流した旨を伝える」「はっ」

副官の中佐と審問官たちが散らばり、コンソールに陣取った。

大佐の命令どおり、各所にむけ命令や要請を発信し始める。

しかし、返ってきた答えは……。

「第二大隊、全狹騎兵、動員命令を

……拒否して……あります……」「

「第三大隊、空中からの散布不可能との返答ですつ」

そう答えた審問官のデスクへ、

大佐がゆるやかな足取りでやつてきた。

通信機にむかって、

「理由を説明しろ」

ビデオ画面に第三大隊長自身が現れて、

『現在、暴徒どもは国道一号線に隊列を組んで、霞ヶ関に行進中であります、

付近の麻布、虎ノ門一帯は、

各国大使館やゲーテック「ミコニティなどの高級住宅街がひしめいており、

現時点で各界の有力者多数から、エアマシンの騒音苦情が多く寄せられております、はつきり申しあげてこの地区上空での催涙弾散布など、軍政府にとつて自殺行為です』

「なぜ、そこまで行進を許した？」

「上空でなにをしていたのだ？」

第三大隊長は、ちょっと間をおいた。

それからにんまり、笑みをつくつてきた。

『リストラで護民局の情報を見たからであります、

R 大佐』

「貴官も裏切るつもりか」

『失敬ですね、

では？大佐の御命令どおり上空からの監視任務？を続行します』

回線を切られてしまった。

そこへ副官が顔面を痙攣させながら歩み寄ってきた。

「防衛大臣は就寝中につき出れない、とのことです、かわりに秘書官が……」

「秘書官がどうした？」

「異端審問局と、人権護民局との？政争？は

……当事者間で解決してもらいたい、と。

国軍は……その、ちゅう、

中立の立場を……」

司令室にいた審問官たちが、

ひとり、

またひとり、色を喪い逃げだし始める。

R大佐は、敵前逃亡の裏切り者たちのことをふりむきもしなかつた。

だだつ広い司令室に、

R大佐と副官ふたりだけが取り残された。

副官は胃の薬を飲むために、

給水器の紙コップをとつた。

手にとるとき指先が震えていた。

コンソールのひとつが着信を伝えてくる。

大佐自らがコンソールに座る。

「私だ」

『こちらシゲミツ、シゲミツ中佐でありますつ、

今し方警察病院から無理矢理退院を』

『手短に話したまえ、中佐』

『はつ、大佐の権限で兵器廠の？ロングランス？出動許可をくださ

いつ』

シゲミツが一タリ、と笑んでくる。

副官が紙コップとピンクの錠剤を取り落とした。

「あれば、実験段階の兵器です大佐つ」

『よろしい、許可する』

『ありがとうございます、

必ずやマミヤたちを地上から消し去つて御覧に入れますつ、  
副官が駆けよつてくる。

通信は切れた。

「大佐、ほんとうにロングランスを使用するおつもりですか？」

大佐はチエアに座つて、

優雅な仕草で椅子を回転させてきた。

副官のほうにむきなおつた。

「今使わずに、いつ使うのだ？」

東の空は、白み始めていた。

きょうもまた、快晴のおだやかな夏日になりそうな気配だった。  
芝浦を出発した群衆は国道一号线、  
通称桜田通りを北上して霞ヶ関の法務省へ真っ直ぐ行進をつづけて  
いる。

カグラのネットにばらまいた情報はつぎつぎと拡散されっこり、  
首都のあちこちからデモ隊が息を吹き返した。  
デモ隊はぞくぞくとマニヤたちを先頭にした芝浦の行進に参加して  
きた。

人いきれでマニヤも姫もナホたちもいまや汗だく状態になつてい  
る。

『アツイわね

姫は、空調の電源の切れてしまつたマギアパンツァーを指先で引  
つぱつた。

肌とパンツァーとのあいだは、ぬるぬるの汗だく、  
サウナ地獄状態である。

ナホが、あいだにマニヤを挟んで、

姫のほうをのぞきこんできた。

「あら、魔導の姫様はもうこれ以上日本の問題につきあつ義理ない  
んだし、

ドイツへ帰ればいいじゃないですか？」

『……そつはいかないわ、

この私を暗殺しようとしたヤツがまだのうのうとしてるんだから、  
きつり落とし前つけてやらなければ、私の気が済まないの

「ふーん、そうですか？

ところで、ねえマニヤッ、

「タタタタが片付いたりさ、あたしたちの異性交遊申請書なんだけど、

サインをね、すぐにしてくれると、うれしいんだけどなあ……』

『マミヤ曹長は、この私に勝ってしまったのだから、世界中からレースのオファーが殺到してくるでしょう、恋愛じっこに興じている暇はないじゃないかしら?』

マミヤが姫を見た。

ナホがあからさまに可愛い貌に怒りの形相をうかべてぐる。姫にはそれが、

『マミヤ、いますぐあたしを犯したいの?

犯したくはないの? どっちなのよ? ?

とまあ、恋の押し売り強盗をしてくる顔面凶器にしか見えなかつた。

「……なんで、お姫様が? あたしたちの愛? に口を挟むの?」

『ごめんなさいね、ナホさん、だつたかしら?』

私とマミヤ曹長は、これから世界を相手に闘つ宿命を帶びた超有名人、

残念だけれど、一般人のあなたと、

曹長では……ねえ?』

「ふんつ、有名人? あらそう?

そちらさんが有名人ならあたしはねえ……』

そこでマミヤがナホに、

『さつきからアラーム音が鳴つてないか?

ナホの服のほうからかな』

ナホが耳を澄ます。

大群衆を後ろに従え、喧騒だらけのなか、たしかに聞こえた。

「ええ? あ、ちょっと、ごめんね」

そういつて彼女がマミヤにまわした腕を放した。

ちょっと小走りになつて、行進のさらに数メートル先にいつた。歩きながら小ぶりのEペーパーをとりだして見ていく。

鳴っていたのはそのペーパーだつた。

彼女はふり返つたとき、顔を真つ青にしていた。

まるで宇宙游泳中、母船に帰るまで一時間はかかるところまではしゃいで来ちやつて、

気づいたら酸素残量が残り一分切つてました、つてゆうか、そんな風な絶望的な表情だ。

「機長さんどうしようつ？」

「んん？ どしたのナホちゃん」

最前列で酔つ払つていた機長がナホのところまでよたよたと走つていつた。

ナホがペーパーを見せている。

「メッセージツ、

受信していたのにあたしぜんつぜん気づかなかつたよおーーつ

「なになに？」

「いますぐ一四時間営業中の政府系銀行に来いだつて？」

「有事につき、

本日午前六時に全ての金融機関は店頭業務を一時的に停止します、だあ？

「……それまでに……」

店頭にて血液採取による遺伝子本人確認をしてください？」

「……お越しになれない場合……」

ナホと機長、ふたりが謎のペーパーを食い入るように見た。

「 本券は無効とさせて頂きますつ？」

「ええええええつつ」

ふたりが同時に叫んで、パニックになつた。

「機長さんつ、政府の銀行つ近場のはどじよつ？  
どじおーーーーーつ？」

「ええつと、この辺はもうテモのせいであらかた閉まつてんぞつ

ナホがパニクリだした。

ピーピー鳴つてる謎のペーパーを握りしめながら。

そこには機動隊に警護された一四時間営業の銀行がある、  
そう教えた。

「マニアックあつがどひつ、ひじ」という

愛せ、愛つてやつぱ、すべてを救ひのよね——??.「

「ナホカヤヒルハタダヒ、早ハシメテナヒ

機場に、なかざわ

あたし、立派になつて帰つてくるからね！」

幾長といつしよに塙田通りから左の道路に入つていつた。

手を上げて、ふたりを見送った。

なんのかしらあのふたり、とにかく、仲のよきじい」とね。

111

あら、幼馴染み、なんでしょう？ やはり心配？』

モウ? 」

姫はマリヤをヘルメットしか見えないけれど

見たかつた、いますぐ、このひとの顔を。

でも駄目だ、いまは駄目なんだ。どこから狙撃されるかわからな

頭部を守るフルフェイスのヘルメットを脱ぐ訳にはいかない、う、ふたりともだ。

そう、ふたりともだ。

姫は、マリヤに回す腕に力をいっそう込めてやつた。

ママヤは、かくん、と頭を彼女の左の肩にあずけてきてくれた。  
姫は照れくさくなつてしまい、

そっぽをむいた。

『暑いですね、姫』

『へ、そうよね……』

マリヤがバイザーをスライドさせて、鼻から下の部分まで開放した。

鼻のチューブを抜き取つて、

おおきく息を吸つてこむ。

『やつぱり、酸素ボンベの匂いがつ、いいもんです、外の空気は』

『そう?』

ふたりの左右と後方に長くつづく大群衆は掛け声を上げ、疲れるところを知らずに行進をつづけていた。

霞ヶ関の法務省にむかつて、

姫の聴覚から、群衆の立てる騒音が消えてゆく。

マリヤの心臓の音、

自分の心臓の音、

ふたりの脈拍の音、

それだけに耳が支配されていった。

『姫……姫?』

『え、あ、はつ、はいつ』

物思いにふけつていた。

つい、声が裏返つてしまつた、恥ずかしい。

『姫に逢えてよかったです、感謝しています、

最期まで貴女をお護りいたします』

『あ、あらそう? でつ、でもねつ、

私はそんなつ、よ、弱い女じや無いんだからねつ

マリヤはよりいっそう、全身をもたれかからせてくる。

『マリヤ、あ、あの?』

姫の左半身が、熱を帯びる。

愛するひとの体を全身に感じる。いま、感じている。

『すこし、クリシ、ヒ、せたんです、眩暈がしたんですね』

姫は慌てて両腕でマリヤを支えた。

『怪我つ？ 悪化してこむの？

さつき花浦でお医者さんは、だいじょうぶってこつてたの『元気ですか』

姫が医者の姿を探し、周囲を見回す。

『ちがいます姫、姫と肩を組んでることがうれしくて』

『……え？ わ、私ど？』

『はい、貴女が、その、あんまりに臭い香りをかかれてるものだか

ひ、

若輩者の自分には、刺激が強すぎたんですね』

姫はバイザーをほんのすこし押し上げて、

右腕のにおいを嗅いでみた。

汗のにおい、しかしなかった。

『私、香水とかつけてないんだけど？

つてか、汗くさくて』

『……』

『汗？』

マリヤは深呼吸をつづけている。

『ちよつ、ヤダツ、なあに？

あんたそーゆーフェチがあつたの――――？』

『申し訳ありません、姫、フェチのつもりはないのですが

マリヤはバカ正直に、謝つてくる。

『あつ、謝ればいいってもん、じゃないんだからね？』

姫は思わずとこから丸裸のすっぽんぽんにされた気分になった。

気分が昂じて、よりいっそうへんな汗をかいてしまつ。  
そこへ、なんだかうれしげに微笑みをうかべたマミヤが肩によう  
かかつてくる。

すーーつ、と空氣をそれは美味しいに深呼吸して吸いこんでいた。  
彼の吐息が頸筋に触れてくる。

ヘルメットとパンツァーとのあいだ、  
わずかに露出した頸筋に。

顔に急激に血の上つてくるのを、姫は感じていた。  
バイザーをすぐにまた下げてしまつ。

『もういいわよっ、あんたもバイザートークなさいよ、もうつ

『あと、すこしじだけこのままで、いいですか？』姫

姫のカラダ中の血液が沸騰してくる。

水蒸氣爆発みたく、頬に血の上つてくるのがわかる。

『……うつ、この、ばかっ』

すみません、姫、とほんとうに済まなそうと、アリヤはもう一度謝った。

国会議事堂を取り囲む治安用防護壁は高さ四メートルあまりあつた。

その若い警視庁機動隊員はいつものように壁の外で警備任務に就いていた。

自分の立番の位置からは、

東の方角へと延びる道路が桜田通りと交差しているのがよく見える。その通りのほうからは、きょうもまた七面倒くさいデモ隊の行進していく喧騒が聞こえてくる。

また鎮圧にかり出されるのを覚悟したのだけれど、上からの指示はめずらじいことに、暴力行為に発展したら、鎮圧せよ、だつた。

リストラに同僚からのメールが回ってきたのだが、どうやら審問局と護民局、要するに法務省内の内紛らしいので、警視庁としては関わり合いになりたくないようだつた。

だから若い機動隊員はあくびをしながら、

深夜の立番でやる気ゼロのまんま、携帯端末で流行りの曲を聴いていられた。

けれどすこしも気は晴れない。

今夜のG?でボロ負けしちゃつたので、自分も暴動に参加したい気分だったのだ。

「ちっしきょう、力欲しいなあ……」

彼の足もと、路上に震動が走り始めた。

金欠の鬱つぽい気分がいつそう最悪になる。

地響きはエンジン音をともない、おおきくなつてきて。

隊員は左手の方角に険しい視線をくれてやつた。

それは路上を軋ませながら、走行してきた。

隊員の目前を通りすぎ、

桜田通りとの交差点が見える位置で急停車した。

重低音で響くエンジンは巨人のいびき、

エアブレーキは鼻息みたいにやかましかつた。

機動隊員は、ぽかん、と口を開けてそいつを見ていた。

ぱつと見、クレーン車、っぽい。

けれど黄色くはない。

国軍のカラーリング、オリーブドラブ 暗い緑色

一色に塗装されている。

そいつは、クレーン車に恨みを抱くヤツが、  
悪夢の中で描いた妄想のように薄気味の悪い、  
攻撃的な外観だった。

深夜、街路灯の光を浴びてそいつはいまにも  
？なにか？とんでもないことをしでかしそうな、  
そんな雰囲気を醸し出している。

何人乗りだか知らないが、

分厚い装甲で覆われた運転席部分のハッチが開いた。

長身の若者が現れた。

夏期軍装に身を包んでいる。

ハッチの脇の梯子を使い地上に降りてくる。

化け者クレーンもどきの車輪の直径は若者とおんなじくらいのお

おきさだつた。

「あ、エース・シゲミツッ」

若い隊員はインター杯が好きで、シゲミツの顔をよく知っている。

今夜のレース、シゲミツとソルベに一口ずつ、

夏の給与をつき込んだのである。

その本物が出現したので面食らってしまった。

シゲミツが自分のほうへ近づいてくる。

顔や腕に包帯を巻いていた。

田の前にくると敬礼してきた。

機動隊員が慌てて答礼する。

シゲミツは身分証を提示すると緊張した面持ちで、  
「この車輌の後方一〇メートル以内は放熱による危険が生じる。  
貴官はこの立番位置からいますぐ移動していただきたい」

「はつ、了解しましたつ」

シゲミツはうなずくと、運転席をふり返り、

「オーハシッ、子機の飛行を開始しろつ」

運転席部分から若者が顔を出してくる。

「わかりましたつ」

機動隊員には誰だかわかつた。

G? に出走した、あのオーハシ中尉だった。額に包帯を巻いている。

巨大な車輌の後方、タンクのように丸くなっている箇所がある。  
そこが、上からふたつに割れ始めてきた。

中に収納されていたのは、全高一メートルくらいだらうか、  
小型の無人偵察エアマシンだった。

マシンは、ふわり、浮きあがりだした。

エアを下部から吐きだして、一気に上空へと舞いあがつてゆく。

シゲミツは満足そうに見ていた。

マシンが遙か高空へと飛翔してゆき、田で確認できなくなつてい  
つた。

日本のHースは、それを見届けると、

踵を返して化け者車輌の運転席のハッチへもどり始めた。

機動隊員は急いで、

「あつ、シゲミツ中佐つ、  
あのつ、よろしければ、

のちほどサインを頂きたいのであります」

田の前の工ースさまのせいで夏の給料吹っ飛んだんだけれど、レースで怪我した 男の勲章だ 本物をまえにするとどうでもよくなってしまうのだから、

不思議なものである。

シゲミツはこちらをふりむいてくれた。

「うっすら」と笑んだ。

「作戦成功後、何枚でも差しあげよう」

機動隊員は有頂天になつて、感謝の言葉を何回もくりかえした。意外と今夜はツイてる、彼はそう思った。

## 大佐の？握手？

法務省庁舎は、古風な赤レンガの壁面をもつ、  
ドイツ・ネオバロック様式の優雅な洋館であった。

正門もレンガの柱でつくられた威風堂々たる姿を桜田通りまえに  
晒している。

同省の内局である人権護民局はこの洋館内にオフィスをもつてい  
た。

カグラは今し方、

正門を出て桜田通りに立つたばかりだった。

仁王立ちになり、

腕を組んだ彼女を護衛するのは部下の精銳捜査官たちだ。

ど派手な赤いサマージャケットを着た？姉御？と

彼女に付き従う黒スーツの屈強な男たち。

群衆が見える。

桜田通りいっぱいにひろがつて、

左右に林立する政府庁舎を圧倒する勢いでカグラのほうへとむかつ  
てくる。

マミヤ曹長と魔導の姫が、先頭に見えた。

そして一輪の魔導一輪装甲車輌が群衆の手で押されてくる。  
群衆の上空では、

敵の第三大隊の武装エアマシン四機が低空飛行をつづけていた。

カグラたちの上空、

二機の武装エアマシンがホバリングしている。

カグラの必死の説得で　ただし少々暴力を借りたが  
護民局の局長を説き伏せ、かき集めた同局のマシンだった。

カグラの姿を認めたマミヤと姫が駆け足になつてくれた。  
群衆も血氣盛んに走り出す。

少年と少女が互いにかばに合つよう、腕を肩に回しているのが、

手にとるまつに見える。

「最後まで気を抜くんじやないよ、おまえらつ」

「はい姉御つ」

カグラの一聲に男たちが吠える。

犠牲を出さない、絶対に一人も、

そう彼女は念じていた。

第三大隊のエアマシンは一糸乱れぬダイヤモンド隊形のまま、  
桜田通り上空を直進していく。

カグラは待つた、微動だにせず、待ち続けた。

彼女の隣の部下がイヤホンマイクで上空と連絡をとっている。  
苦り切つた顔でカグラに耳打ちしてきた。

「うちのマシンの連中ビビつてます、

（ミサイルの）ロックオンの許可求めてきました

「やつたら終わりだと言つてやれ、

（ロックオンのレーザー照射は）宣戦布告も同然だ、

うちが負ける

部下がマイクにむかい小声で罵声を浴びせた。

マリヤと姫と、市民たちがすこしずつスピードを速めながら通り  
を走つてくる。

マリヤがすこし体勢を崩してしまつ。

姫と周りの人々らがすぐに手をかじのべる。

カグラは、見つめつづけた。

地上の味方を、

空の敵を。

敵、四機は隊形を崩さず直進、

こちらへ近づいてくる。

カグラは確信していた。

第三大隊は、必ず戦闘を回避する、と。

仮に戦意があるならば、すでに空から市民たちを攻撃していたはずだからだ。

四機はなおも直進していく。

と思いきや、機首を上げた、四機が一斉に機首を上げ、底部の回転式機関砲がこちらを向いて 。

部下が叫ぶ。

「姉御、攻撃許可を 」

「駄目だつ

搖るがなかつた、

カグラの確信は決して、ぶれなかつた。

向いた機関砲座、  
動かなかつた。

砲口は、沈黙したままだつた。そして 。

止まつた、  
直進を止めた、

四機は機首を上げ急速停止、空中でホバリングを始め出した。法務省のワンブロック手前、  
交差点の直上でようやく接近を止めてくれたのだった。  
彼らは急上昇を始めた。  
旋回して西の空、自分たちの基地の方角へむかい、  
撤収していった。

部下の男たち、その張りつめた空気が一気にやわらいでゆく。

皆がとめていた呼気を吐き出す。

喘ぐ者もいれば、冷や汗をぬぐつている部下もいる。

カグラだけが何事もなかつたかのよつに、  
唯、マミヤ曹長を見つめていた。

大群衆から、盛大な喝采がはじけ、爆発する。  
空に拳を突き上げて、誰もが、叫んでいた。

失せる、審問局、と。

市民の声はいまや霞ヶ関で、ダムの決壊してできた洪水の濁流だ  
つた。

群衆の先頭に立つ少年と少女が、立ち止まつた。  
カグラのまえまで走り終え、ようやく歩みをとめた。

三人は、交わした約束を、  
法務省正門前で、いま、果たしたのだった。  
市民の流れはかんたんには止まらず、

そのまんま桜田通りを北上して、マミヤたちを分厚く取り囲んだ。  
まるで周囲を守ろうとしてやるかのよつに。アツイ。  
都内最大のデモ隊は霞ヶ関の官庁街をもはや、完全に埋め尽くして  
いる。

カグラは敬礼した。

マミヤが答礼する。

「怪我を負われたと伺つております、曹長」

「カグラさん、ご心配には及びません、

魔導の姫の深紅のアルバトロス、たしかに届けました」  
カグラは深くうなずいて、

魔導の姫に瞳を転じた。

「魔導の姫、初めてお目に掛かります、  
人権護民局、護民官、カグラと申します」

姫はすこしづかり、

場の熱気に当たられちゃつた様子で、

「……私の暗殺の陰謀を防いでくれて

……感謝します、護田官

「仕事ですか？」

カグラはようやく、微笑んだ。

それは晴れやかな微笑みだった。

法務省の正門のむこうから、

人影がふたつ見えてきた。

マミヤが、姫が、カグラが、

部下の大男たちが一斉にふりむいた。

法務省正門の守衛は、群衆に怯えてしまい逃げていたので、

その男は自らの手で門を開けた。

マミヤたちのまえにその身を晒してきた。

相対する者に恐怖を抱かせる緊張を身にまとった男、

白髪を丁寧に整えている。

男は口を開いた。

「私が市民諸君からリンチを受けないよ、  
取りはからつてくれるだろ？」  
護田官？

カグラは男と相対した。

「もちろんです、R大佐」

彼女の声には、なんの感情もこもってはいなかつた。  
敢えて激情を殺した声音だった。

マミヤがバイザーを跳ねあげる。

魔導の姫はヘルメットをかぶつたまま、

Rに顔をむけた。

正門付近の市民たちは驚愕の声を口々に上げだした。

「この野郎がRかよ！」

ぶちのめしちまえ、とか殺せつ、奴を許すなつ、

そんな声がつぎからつぎへと起き始める。

すかさずカグラの部下たちが正門の市民たちのまえに壁をつべつた。  
部下たちが、マミヤ、姫、カグラ、R大佐の周りに扇状にひろがる。

ひろがつて市民に対して、

携帯スピーカで呼びかけだした。

『R大佐はつ、彼は法の裁きにより罰を受けますつ、  
市民の皆さん落ちついてくださいつ』

市民の怒号は一向に收まらない。

もうひとつ影の主、

Rに付き従つてきた副官は恐怖に引きつた顔になつており、  
正門から決して出てこよつとはしなかつた。

カグラは、法務省のレンガ色の庁舎、

その裏手にある現代的なビルを見上げた。

法務省の古風な洋館とは好対照をなす、無機質な庁舎を。  
軍政異端審問局の本局庁舎である。

「あの庁舎に籠城されたら厄介でした、大佐」

「私はそこまで卑怯者では無いのだよ」

大佐はカグラからマミヤに視線を移した。

？右手？を差しだしてくる。

黒革の手袋をはめた右手を。

マミヤは不思議そつとして、Rと彼の手とを見くらべた。

「マミヤ課長、君は、

君は立派な部下だった、

最後の最後に君のような逸材に出会えたことを私は誇りに思つのだ、  
握手によつて君との別れの挨拶にかえようではないか？』

カグラは無表情に しかし警戒心最大にして  
ことの成り行きを注視している。

魔導の姫はマリヤに肩を貸したまんま、  
「こんな奴と握手することないよつ」

「だいじょうぶです、姫  
マリヤも右手を差しました。

マリヤとR大佐、左下へ上唇に固い握手を交わした。

## 一四・九三式重力場圧壊因子自走砲 “ロングランス”

「一四・九三式重力場圧壊因子自走砲……で、ありますか？」

スズキ大尉は、

シゲミツ中佐から教わった奇つ怪な名称をオウム返しにつぶやいた。  
「そうだ、この化け者の制式名称だよ、  
通称？ロングランス？だ、

貴官は座学講習で習わなかつたろう？」

操縦室の後列の右、指揮官席におさまつたシゲミツはいった。

「は、はい」

スズキはシゲミツの左、副官席に座つてゐる。  
ヘッケラー＆コッホ社製のマシンガンの一種、

コンパクトなP D Wで武装してゐる。

スズキ大尉が猟騎兵の士官学校で  
この化け者についてなにも知らされなかつたのは、  
開発が一次頓挫していたためだつた。

巨額の開発費と政治的な糾余曲折を経て、  
ようやく完成にこぎ着けた、

これは？要人暗殺専用？自走砲、  
とでも呼ぶべき怪物兵器だつた。

操縦室内は、さながら戦車のそれのように狭苦しい。

前列左、観測員席にはオーハシ中尉、  
そして右、暗殺のターゲットの現在位置、  
座標を入力する火器管制員席に座つてゐるのは、  
ソルベ中尉だ。

「ソルベ中尉つ、

マミヤの奴はたしか貴様の同級生だつたな？

あの目障りな野郎の座標位置、入力の榮誉を与えてやる、

貴様が自分で立候補した以上、絶対にぬかるなよ？」

「はつ、光栄でありますつ中佐つ」

ソルベはシゲミツのほうをふりむき、それこそ最高に？会心の笑み？を見せてくる。

そこでスズキが疑問を口にした。

マミヤたちはいま、桜田通りを法務省まえへ向かっている。  
ここからだと官庁街の巨大なオフィスビルが射線を妨害している

のでは？

そういった。

シゲミツは笑い出した。

勝利をすでに確信した、笑いだつた。

「なあスズキ？ お前のいいたいことはわかるぞ、なんせ自走砲と銘打つてるからな、だが、この化け者はひと味ちがうのだよ、

こいつの積載砲から放たれた

？重力場圧壊因子？はな、

入力された座標上へと空間を超越するんだ、

超越してその空間の重力場をねじ曲げるんだよ、

だから暗殺する相手がその座標上を動かない一瞬を狙えば、確実に殺せるんだつ」

そういうて、さもうれしそうに笑い出す。

スズキは息を呑んで聴いているようだつた。

「オーハシ、子機からの映像感度は良好か？」

「はいっ、文句ないつすよ」

オーハシは舌なめずりして、その瞬間を待ちわびてている様子だ。

「よし、作戦通り、

大佐がお見えになつたら知らせろ」

「はいっ……あつ、R大佐ですつ、

法務省庁舎の陰から出てきましたつ、

手筈通りマミヤたちのまつへむかつてますつ  
「よし、いいぞつエネルギー充填開始するつ」

シゲミツが興奮して、鼻息を荒くしてくる。

握手の瞬間だ、握手のつ、シゲミツがわせやべ。  
握手の時、

R大佐から握手を求められ、

右手の義手でしつかりと握手を交わした、  
その瞬間、マミヤは動かない、動けない！

「で、ですが……」

スズキが疑問を口にした。

マミヤ一人、座標を指定して暗殺に成功しても、  
アルバトロスも、ほかの関係者も、  
目撃者の多数の群衆も生き残るのでは？ と。

「面制圧するのだ」

シゲミツが鬱陶しそうに答えた。

「面制圧？」

「座標一点を指定すれば、  
そこを起点に好きなだけの面積をも指定できるんだよ、  
ソルベの座るコンソールの操作でな」

「で、ではつ」

「そうだ、大佐の周囲のすべての人間、数千人か？  
数なんぞどうでもいい、

大佐以外どいつもこいつも重力場の圧壊でひねり潰してやるんだよ  
つ、

造作もないことだつ、ハハハハツ」

操縦席の真上、後方から音が、震動が起き始める。

それは未知の怪物が、自分を捕らえた檻を破壊して暴れでいる、  
今にも飛び出そうとしている、

そんな得体の知れない恐怖を連想させるものがあった。

スズキは、大音響をまえにして、完全に血相をかえている。

「……それ、はつ、あんまりだ、大量虐殺じゃないかつ」

「大佐の御命令に、逆らうのか？ スズキ大尉？」

シゲミツの声が陰にこもつてくる。

ソルベ、オーハシが後列席をちらり、とふりむいた。

爆音は、震動もさらにボルテージを上げてくる。  
操縦席全体が小刻みに揺れ出した。

「エネルギー充填率一〇〇%、発射準備完了です」

ソルベが堅い声音で告げてくる。

「お、俺は下ろさせてもらいます、虐殺者の汚名なんか、いるもんかつ」

スズキは左のハッチを開けて、外へ飛び出していった。

「スズキーツ、貴様あつ」

「シゲミツ、中佐、ちゅ、中佐つ、

握手ですつ、R大佐が右手を出したつすよつ

「ええいつクソツ、オーハシツ、

ターゲット、マミヤの座標解析つ

「はいつ、緯度（LAT）三三四〇三三五・五三三一六  
……経度（LONG）一三九四五一〇・六三三五〇一ツ」

ソルベが復唱して、

コンソールの三次元地図画面上、  
ホログラム

タッチペンで精確に座標を指定する。

「ソルベ、面制圧つ、桜田通り南北数百メートル好きに指定してやれつ、

暴徒は皆殺しだあつ」

シゲミツは驚喜している、絶対の力を手にして、

自らに酔っているかのようだつた。

「わかりました、好きにやらせてもらいます」

ソルベはニヤリ、笑つた。

「大佐とマミヤが握手しましたつ

「オーハシの声も興奮の極みにあつた。

「よしオーハシッ、副官席に移れつ

「はいっ

彼が後列のスズキのいた席に素早く移る。

シゲミツとオーハシの席上、コソソールには発射スイッチがひとつずつ設置してある。

ふたりがセイフティロックを解除、

同時にスイッチに手を聞いた。

ふたりがうなずき合ひ。

ふたりが押した瞬間、化け者は解き放たれるのだ。

「これで終わりだつマミヤッ、こんどこそ俺の勝ちだああああつ

シゲミツが嘲笑し、叫ぶ。

「三・二・一っ

カウントしてふたり同時にスイッチを押した。

操縦席の直上、稻妻の直撃を浴びたかのよう

な、破壊的なまでの音が空間をほとばしつた。

三人が反射的に頭を引っこめ、両耳を手でかばう。

ソルベの指定した座標上、重力場圧壊因子は放出された。

「曹長、君にどうしても質問したかった、なぜ一四連敗してまでその実力を隠そうとしてきたのかね？」

R大佐は、固く握手をしてマミヤの手を離さずに、問い合わせを投げかけてくる。

「魔導少女迎撃競技杯の、その有り様事態がまちがっている、自分にはそうとしか思えません」

「君は勝利の美酒を味わいたくはないのか？ 社会の敵たる魔女を一掃したいとは思わんのか？」

「彼女たちは、敵なんかじやありません、なんにも悪くないんだ、

ホウキを折られる辱めを受けていい訳がない

「甘いな、曹長、君は

……最期の最期まで、甘すぎたのだよ

「つづら、笑んだ、Rはほくそ笑んだ。

「？ 時間？ だ」

大佐がそういつた瞬間

。

天空を稻妻の轟いたかのような音が奔った。桜田通りにいる誰もが咄嗟に空を見上げた。嗤つているR大佐以外、

全員が空を見た。

大佐だけが眼前、マミヤを凝視していた。

彼の、裏切り者の最期を見届けるために。

その、大佐の笑みが、

凍りついていった。そんなハズがない、  
あり得ない、そんな表情をうかべだす。

マミヤには、

彼の周囲にも、何も起こらなかつたから。

目の前でマミヤたち、邪魔者の肉体が無様に圧縮され、  
異常重力に押し潰される世紀の一大ショーの開幕、  
そのハズだつたのに。

そのかわり、東の方角、

法務省の洋館庁舎の裏手、

軍政異端審問局本庁舎から地響きが鳴り出した。

皆が審問局を見る。

局の庁舎が、一〇階建ての高層建築ビルが崩落を始めたのだ  
つた。

ビルの最上階が見る間に崩れ落ち、地上へと落ちてくる。

粉じんと爆風が遅れて桜

田通りへ迫りくる。

群衆がパニックになる。皆が路上を西や南のほうへと走り、逃げ  
だした。

崩れ落ちて生まれた空間、さつきまで庁舎のあつた空間には、  
巨大な黒い球体が浮かんでいた。

あまりにも非現実的な光景。

球体は、子どもの思い描く空想のブラックホールさながらだつた。

それは重力レンズの影響で、周囲の景色をねじ曲げながら、  
無数の稻妻を、プラズマ放電のような不気味な光を放ち、  
徐々に縮小していった。

空間に歪みを残しながら、やがて球体は消えた。

マミヤと姫が呆然と崩壊を見るなか、  
カグラはちがつた。

SIGザウアー自動拳銃をジャケットの奥のホルスターから引き抜く。

Rのこめかみに銃口を突きつける。

「よくも？ロングランス？まで持ちだしてつ、R大佐つ、指揮官に使用中止を命じなさいつ」

「ロングランス……ツ」

マミヤが慄然とした顔になる。

「なにつ、なんなのよいまのつ？」

姫がマミヤをかばうように両腕を彼に回してくる。

大佐は、

奥歯に仕込んでおいた魔導石を噛みつぶした。

「シゲミツツ、何してる第一射を撃てつ」

軍服に隠されていたピンマイクに叫ぶ。

大佐の両眼が魔導の蒼白の光を宿す。

全身が光を帯び出す。

カグラが発砲した。

銃弾は、大佐を包み込んだ重力場に跳ね返されて、遙か空の彼方へと跳弾して消えていった。

「私も、現役の適性保持者なのだよ」

大佐は嘲笑つた。

「使用中止を命じなさい大佐つ、

マミヤくんつ、コイツから手を離して今すぐつ」

マミヤが大佐の手をふりほどこうともがいた。

マミヤが薄れ始めてきた魔導石のパワーで重力場を展開する。大佐の重力場に抗い、義手をどうにか引き離そうとする。

魔導の姫は強力な重力場を

ありつたけの怒りを込めて R大佐に叩きつけてやつた。

大佐の肉体が後ろへ、正門へ吹き飛び、

門扉に激突する。

右腕はちぎれていた。

超鋼チタニウム製の義手が、

肘から先の部分がマミヤの手を握りしめたまま残っている。

「地獄へ堕ちろマミヤッ」

大佐は吠えた。

門扉に寄りかかり、笑い出した。

義手が、腕の部分が破裂、爆発した。

腕の部分に搭載されていた呪導爆雷が、起爆した。

「マミヤッ」

姫が絶叫しマミヤの盾になり、彼をかばった。

## ？切り札？の崩壊

狭い？ロングランス？の操縦室内。

シゲミツとオーハシは呆然自室の体で席に座っていた。

彼らの席のモニタには、

子機のエアマシンからの映像が送られてきている。

ふたりは異端審問局庁舎に撃ち込まれた重力場圧壊因子の巨大な球体を無言で見つめていた。

「なんだこれは？ 実験段階の兵器、だつたからなのか？」

シゲミツがうめく。

「座標、ずれちゃいましたねー、所詮未完成だつたんでしょう」

ソルベの投げやりな言葉。

シゲミツは猜疑心むき出しの目を彼にむけてきた。

「ソルベ中尉？」

まさか……座標をずらしたのか？ わざとつ？」

「さあ、なんのことでしょう」

ソルベはとつてつけたような笑みをうかべるばかりだった。オーハシが副官席から前列へ、

ソルベを押しのける勢いで彼の火器管制席をのぞきこむ。

「シゲミツさんつ、やっぱりつ、この野郎、

座標を庁舎にずらしてやがつたつよつ」

ソルベがオーハシの喉仮に貫手を叩き込む。

ぐえつ、と情けない声を上げて彼が真後ろに倒れこむ。そのまま失神した。

そこへ、シゲミツがベレッタ製小型自動拳銃を、

ソルベの胸に突きつけてきた。

「裏切つたなつ、ソルベッ」

怒号は狭い操縦室内に響きわたった。

「僕はシゲミツさん、あんたにね、

憧れてきたんだずっと、それがどうだ？

マミヤの才能に嫉妬したいまのあんた、

どう思う自分で？ エースの名が聞いて呆れるよ

「いいたいことは、それだけ、かつ」

突然右のハッチが開いた、

外から開けられた。

シゲミツのこめかみに、P D W の銃床が叩き込まれた。

シゲミツが自席に倒れこむ。

スズキ大尉だ、彼がハッチ脇の梯子につかまっていた。

P D W を構えなおして、

「怪我ないかソルベ中尉つ？」

「危うく死ぬとこでしたよ、大尉」

ソルベとスズキは手伝い合って、

シゲミツを外の路上へ引きずりおろした。

まだ意識のあるシゲミツは、呂律の回らない口調で、

「貴様ら、こんな事、して……」

スズキの後ろから警視庁の機動隊員が顔を見せた。

あの、シゲミツにサインをねだつた若者である。

彼は機動隊のヘルメットに手をやり、呆れかえった様子で、

「日本のエースさまがねえ、無様とゆーか、姫に二連敗した挙げ句  
大量虐殺未遂とは……」

シゲミツは、隊員の姿を認めると、

「サイン、やるぞ…… やるから、

こいつら…… 反逆者、だ、逮捕しろ……

「サイン？ いるわけねーじゃんよ？」

隊員は電磁警棒をシゲミツに押しつけた。

「ぐおっ、と蛙の鳴き声を発して、

日本の元エースは失神してしまった。

三人は、シゲミツとオーハシ、

氣を失つたふたりを電磁式手錠で拘束して路上に転がしてやつた。スズキは汗だくになりながら、

「俺がもし、貴官の反逆行為に荷担しなかつたらどうするつもりだつたんだ？」

「僕ひとりでも、この化け者を阻止しようと黙つてましたよ」

ソルベはいっただ。

化け者自走砲のハッチを、がつん、と一発ぶつ叩いてやつた。

「参つたな、俺は最後まで迷いつづけていたんだぞ、君から反逆行為を持ちかけられたとき」

「でも大尉はもどつてきてくれました、感謝してますよ」

「ひとつ教えてくれ、あのマミヤ・曹長だがな、俺はいまなら彼をヒーローと認めるのにやぶさかではないが、

君はさんざん敵視してきたんだろ？

なぜ彼を助けようと決めたんだ？」

ソルベは芝居がかつた仕草で、

両肩をすくめてみせて、

「あいつは僕の永遠のライバルなんです、

あいつをレースで打倒するのは、

僕です、僕がマミヤを倒す、

そう決めたんです、

ヤツに勝つまえに死なれたら、勝ち逃げじゃないですか？」

「ふつ、とスズキは噴き出した。

笑いの発作にとらわれたようだつた。

「ヤダなスズキさん、笑うことないでしょ？」

「いやすまん、しかしあの姫に圧勝したマミヤをライバルと断言で

きる君はある意味大物だ」

そういうてまた笑いをこらえきれずに、腹を抱えている。

ソルベは苦り切つた顔になつた。

「あのーすんませんけどもソルベ中尉?」

機動隊員が恐る恐る口を挟んでくる。

「なんでしょうか?」

「俺、あんたのファンなんですよ、サインもらえませんかねえ?」

「これもなんかの縁です、いいですよ、よろこんで差しあげましょ

う

ソルベは快諾した。

## 第一級アーテルハイド暴走

「マミヤしつかりして、死んじゃ嫌つ、マミヤツ」

魔導の姫が、

血まみれのマミヤを抱きしめ、

路上に座りこんでしまつてゐる。

彼のマギアパンツァーには腹部にいくつもの破片が食い込んでいた。

パンツァーの対呪法防御をもつてしても、

至近距離での呪導爆雷の被爆を完全には防げなかつた。

彼の魔導石のパワーが消失しかかつてゐたせいだ。

顔への直撃はなんとか防げていた。

姫の中和力場が守つたのである。

門扉に叩きつけられたR大佐を　まだ笑いつづけていた

カグラの部下たちが押さえこみ、身柄を確保した。

桜田通りは、パニックを起こした市民の逃げ惑うところとなつていた。

?ロングランス?の放つた異様な球体を目の当たりにしたのだから無理もない。

審問局の崩落で発生した粉じんが辺り一帯に立ちこめている。

「…………姫…………ひ、め」

マミヤがささやいた。

『マミヤ、しつかりしてつ』

姫が力強く抱きしめてくる。

彼の呼吸は浅く、早い。

カグラがふたりに寄り添つてきた。

美人護民官はその両の静謐な輝きを放つ瞳を閉じる。

そして、開いた。

そのときには、すでに魔導の蒼白の光を双眸に宿していた。

カグラ護民官は、その出自は魔導少女だったのだ。  
彼女が懐のホルスターから呪符を数枚とりだす。

リストアでマミヤ曹長の国家定期健診情報にアクセス、  
心理スキヤンの結果は六三日前の受診時の結果、

日本ではじく一般的な宗派の？仏教徒ブッティスト？であった。  
『ねえマミヤは？ 助かるのカグラさんつ？』

「仏教の快復系呪法をダウンロードします、  
落ちついて姫、死なせはしませんっ」

「私の、呪法は強力だぞつ、助かるものかつ」

大佐の嘲笑はやまなかつた。

カグラの呪符に梵字が刻み込まれ始める。

単なるEペーパーが、呪符としての機能を發揮し始める。  
回復系の、清らかな緑色の光を放ち出す。

カグラが、光り輝く呪符をマミヤの胸に、  
いちばん傷の深い部位に、そつ、と押しあてる。  
密教の呪法のうちのひとつ、

孔雀明王法の真言

？おん まゆら きらんでい そわか？

を厳かに唱える。

何度も、くり返し唱えた。

マミヤの青ざめていた貌の色。

徐々にだけれど血色をとりもどし始めた。

カグラは魔導の力で、マミヤの快復具合をたしかめる。

姫にむかい、笑顔でうなずいてみせる。

フルフェイスの下、彼女の表情はわからない。

姫は立ちあがると、

押さえつけられているR大佐をふりむいた。

大佐が、魔導の力を爆発させる。

カグラの部下たち、豪腕の男たち一〇人ほどに組み敷かれていた、

にもかかわらず大佐はおきあがり始める。

つかまれていた両腕を無造作にふりほどく。

両腕を押し広げると、

見えない異常重力の衝撃波に部下たちが吹っ飛ばされてしまった。

「そういうことだったか女狐？」

貴様、魔導の力でマミヤの才能を見抜けたという訳か？」

カグラは無言でマミヤの治癒をつづけている。

姫は、怒りに震える声で、

「よくも……よくもマミヤを！」

「貴様と正面切つて勝てる気はせんのでな、逃げさせてもらおうか

つ

大佐がジャンプして、正門を軽々と跳びこえる。

法務省の敷地内に入ると魔導の脚力で地面を蹴つて逃げだした。

「逃がすかもんあああああああつ！」

姫のパンツア－周囲の空間が、  
ぐにやり、とひしゃげてしまう。

彼女の足もと、路上に亀裂が入ると、

その裂け目は生きてるかのごとく、大佐にむかい奔つてゆく。  
正門を粉碎し、アスファルトを割つて亀裂が大佐を追尾し始める。  
連隊副官はしりもちをついて、

その場で震え上がつていた。

姫の蒼白の光は、見る間に膨れあがりだした。

周囲の重力場は理性を喪い、姫の魔導の下に支配された。

暴風が彼女の体の周りから吹き荒れ出す。

法務省の敷地全体が、隆起を始める。

様式美ある建築物が古風な洋館の右翼棟から雪崩を打つて無残に

倒壊してゆく。

地面が生きてるかのように脈動をうち、

コンクリや建材の残骸、

なかには数メートルもある巨大なアスファルトの塊すら、無数の残骸が空中に浮き始める。

「やめなさいっ、姫っ、マミヤくんなら助かるわっ」

暴走を始めた魔導の姫は絶叫しながら、

首だけ動かし、大佐の気配を探っていた。

カグラの叫びもやは耳には入っていない様子だ。

「総員待避っ、市民を避難誘導っ、

防衛省、警視庁並びに消防庁に連絡をつ

」

カグラの頭上に、コンクリの巨大な塊が降ってきた。

彼女が右手を高々と掲げる。衝撃波を飛ばして、コンクリを真っ二つに粉碎する。

同時に己の重力場を最大に展開、

自分とマミヤを中心にして周囲数メートルになんとか安全地帯？をつくる。

カグラの部下たちは死力を尽くしてボスの命令に従い散つてゆく。腹心の部下が芝浦の上空、マシンで彼女のとなりにいた部下が

カグラの元に駆けつける。

マミヤを抱きしめて路上に膝をついている彼女の重力場のそばへやつてきた。

大地の裂ける轟音の響く中、

「姉御っ、当局に何と連絡をつ？」

「第一級アーデルハイド暴走発生っ」

ありつたけの声を上げて、部下に告げた。

部下は、死なんぞください姉御っ、

そういうのこしてほかの部下とともに現場を離れた。

姫の叫びはやむことを知らない。

顔を右に動かし、

右手で目の前の空間を薙ぎ払う、

そのモーションひとつで、

法務省の右隣の庁舎も崩れだした。

子どもが、飽きた積み木の城を投げやりに叩き潰すかのよう。

「あの野郎っ、どこへいったっ」

怒り狂う姫は、異端審問局のあつた瓦礫の山のあたりにむかって、無数の大地の裂け目を奔らせていった。

東から南東の方角にかけて、

都心の高層ビルがぞくぞくと姫の暴走の餌食になつてゆく。  
マミヤが、バイザーを押し上げた。苦しげな息の下、  
「カグラさん、姫の、拘束を試みます……」  
「無茶よマミヤくん、国軍の出動が必要なレベルよっ  
「もともたしてたら、首都が、滅ぶ……」  
マミヤの悲痛な呻きにも似たつぶやき。  
カグラも息を呑んだ。

「姫の……最新の、心理スキャン情報を……教えてください。  
「無理よっ、彼女の正体はわからないのよっ？」

「エリカッ、エリカ……ヴァンデル……メア、彼女は、エリカ……  
…です……」

カグラの瞳に驚き、

困惑、

パニック……様々な感情の波が立ち、

そして彼女はどうにか理性をとりもどした。

そんな？ 彼女の正体が？ あのサバトの管理者の娘？ そうつぶ

やいて、

「でも、どうしてきみが知ってるの？ いつの間にっ？」

「説明してる暇はない、です、は、早くっ」

カグラは腹をくくつたようだった。

すぐにリストアで個人情報にアクセスを試みた。

激しく首を振り、

「駄目っ、やつぱり異端審問局のセキュリティがまだ生きてるつ、個人情報を入手できないつ」

マミヤが指さした。

一点を指さした。

倒壊した門柱の陰に隠れ、打ち震えている連隊副官を。カグラは一息に数メートルを跳躍した。

突然やつてきた？魔女？に副官は、

「ああっ、助けてつ、まだ、死にたくないーつ」

カグラはSIGザウアーを突きつけると、

「死にたくないば教えなさいつ、

エリカ・ヴァンデル・メアの心理スキャン情報をつ」

副官は口元からよだれを垂らしながら、

自身のリストアでデータベースにアクセスを始めた。

「早くなさいつ」

副官は、がくがく体を小刻みに揺らしながら、

リストアを見せてきた。

カグラがのぞきこむ。

そこには 。

『国家定期健診の心理スキャン情報／一〇〇%無宗教との判定結果  
アリ

・オカルティズムへの関心傾向：特になし

・その他特記事項／特定の異性一名に対する恋愛感情が極めて顕著

／受診から一日経過』

「まちがいないわねつ」

副官は何度もうなずいて、

「レツ、レース直前に魔女に対して受診は義務づけられてるだろつ

つ、

その結果だつ

カグラは、魔導の力で副官の袖からリストラのバンドを無理矢理引きちぎつた。

悲鳴を上げる副官を無視して、

彼のリストラを手にするべ、マミヤの元へともどつていつた。

突然、地面が裂け始めた。

マミヤとカグラのあいだ、路面におおきな亀裂が生じた。カグラの側が、地面全体が沈み始める。

カグラは重力場で身を守りながら、裂け目の断崖をよじ登つていつた。

マミヤにむかつておおきく手を伸ばす。

「受けとつてマミヤくんつ」

マミヤも手を伸ばす。

ふたりの手が交わつた。

彼の手にリストラがわたつた。

「マミヤくんつ、その異性つ、おそらくあなたのことよつ

受けとつたマミヤが、ヘルメットを苦勞して脱ぎ捨てる。リストラ画面をのぞきこみ、

魔導の姫を、

エリカ・ヴァンデル・メアを、

そのひとを見あげる。

よひよひと立ちあがつた。

「エリカ……」

マミヤはつぶやいた。

これ以上はないくらい、やさしい聲音で。

カグラがさうことじ登ろうとしたとき、断崖の崖つぶちが一挙に崩れ落ちた。

彼女も、大人数人分の高さまでになっていた下の地面へと墜落してしまった。

強風の荒れ狂うなか、

マミヤは彼女の名を呼びつけた。

愛する少女の名を

「エリカ……たのむ、もうやめてくれ」

アーニーが、あの野郎、

マヤはみるみるながらも、後ひから彼女を抱きしめた。精一杯、抱きしめた。

彼女が、魔導の姫が、エリカがよつやへ氣づいた。マリヤへ氣づいてこぢりてむきなおる。

待つててつあいつを殺してやるわつ、貴方の敵は一人残らず

彼女のローズレッドのフルフェイスヘルメットに手をかけた。

彼女の頭から脱がしてやる。

アリカの貌がその下から現れた

彼女の背中に流れるように落ちてゆく。

汗と、溢れる涙と、愛するひとを見るのは、

恋い焦がれる瞳とが、そこにはあつた

両腕を回して、抱きしめてやる。

彼女の唇にキスをした。

マミヤは、エリカ・ヴァンデル・メアに、キスをした。

東の空は明るかつた。

七月の太陽が昇ろうとしてきていた。

その、わずかに光る東の空の陽を浴びながら、  
マミヤとエリカ・ヴァンデル・メアは抱き合い、  
唇を重ねあわせていた。

マミヤは祈りを捧げながら、

キスをした。

何に対する祈りか、それすらわからなかつた。  
唯、姫の、エリカのこころを癒してあげたかつた。  
怒り、傷つき、泣き叫ぶ彼女に笑顔を、  
どうにかして笑顔をとりもどして欲しかつたから、  
だからキスをした。

それしか、思いつかなかつた。

少女の細身の体躯、ちいさな胸のふくらみ、  
しなやかな背中、  
そしてやわらかい唇。

全身で今、マミヤは少女を感じとつていた。  
彼の腕の中、エリカはされるがままになつていて、  
少女の体に抗うような姿勢は無く、  
緊張も無く、  
震えるでも無く、  
ひたすら彼の腕に守られて、  
少女はその唇を、  
体のすべてを少年にあずけきつていていた様子だった。

少年は、唇を離した。

少女は、その泣きはらした貌を見られたくないからなのか、照れなのか、いずれにせようつむいてしまった。

その貌を少年の胸につづめてくる。

だから、少年はやさしく抱きしめてやつた。

少女の体、魔導の蒼白の光はすっかり消え去っている。

周囲の景色。

粉じんは未だ舞つてゐる。

けれど大地の鳴動はやんている。

宙に浮く巨大な残骸はひとつも無い。

静寂が街を包み込み、

それを祝福するかのように東の太陽はいつそう、

その光を強めてくる。

エリカの全身の力が抜け始めた。

完全に抜けた。

するり、と膝を折つてマリヤの腕の中、

地面に崩れ落ちそうになる。

彼は力のかぎり、彼女の体を支えてやつた。

「だいじょうぶ？」

エリカは貌をうずめたまんまむずがる子どものようにこ  
ともかわいらしい仕草だとマリヤは思つた

そんなふうに彼女は首をふつた。

それから、

「うん」

だいじょうぶだから、と、さう彼の胸元でささやいた。

マリヤは彼女を抱きとめながら、周りを見た。

ふたりの左、数メートル離れた路上はその先から陥没してしまつ  
ている。

その下に、カグラがいた。

こちらを見て、微笑んでくれていた。

体の所々擦り傷やら汚れやらで美女が台無しだったけれど、微笑みはやっぱり彼女らしくたくましく勇ましい美しさをたたえていた。

街の各所からパトカー や救急隊のサイレンの鳴っているのが聞こえてくる。

霞ヶ関の官庁街と東京湾沿いのオフィス街は、内戦で崩壊した都市さながらの様相を呈していた。

倒壊したいくつもの高層ビル、

なぎ倒された街灯の列、

チョコレートの板を叩き割ったかのような桜田通りの路面。

「私、たくさん……たくさん、ひどいことをした……」

「ここ一帯は深夜は無人になるオフィス街だ、せめて犠牲者の出なかつたことを祈る」

「…………うん」

エリカは哀しそうに、声を殺してうなずいた。

マミヤは、ほっと息をひとつついで、体の力を抜いた。

魔導石のパワーはすでに切れている。

カグラの応急処置だけでは全快とはいえず、また体中の傷が痛みを増していく。

そつと、彼女から離れて、

ひび割れたアスファルトの上に座りこんでしまつ。エリカがそばにひざまずいた。

マミヤの肩口、彼女がつらそうにまた貌をうずめてくる。

マミヤはそんな彼女の頭に手をおいた。

触れるか触れないかくらい、

それくらい慣れない仕草で頭をなでる。

彼女の腕に力がこもってくる。

貌に、うれし泣きと哀しみとを見せ、

自分の愛した男の子に、

いつしょうけんめい頬をすり寄せてくる。

いつまでもこうしていたい、

そういうているかのように、

すり寄せる頬を赤らめてくる。

マミヤはぎこちなく、

彼女と自分とのおでこをくつつけ合せた。

吐息の触れるぐらい、間近の微笑み、彼女の微笑み。

疲れきった少年の、

闘いつづけてきた少年のこころに安息が満ちてゆく。

少女を抱きしめながら、

少女の汗、

少女の涙、

その香りに包まれて、

少年はいま、ようやく幸せをかみしめていた。

ふたりはおでこをくつつけ合つたまま、

くすり、と笑顔をこぼした。

こころを分かちあつた、男の子と女の子の、それは笑顔だった。

桜田通りの南から異端審問獵騎兵第一大隊の車列のやつてくるのが見えだした。

市民の行進の殿を守るべく、最後尾で護衛についててくれたのだった。

ふたりがすこしづかり体を離す。

「……私、矯正収容所送りかな？」

「いや、大佐のせいで審問局の権威は地に墮ちてるし、局の庁舎はあのとおり崩壊してもらいる、審問官たちにそんな力はもう無いよ」

そこへ、カグラが跳躍してどうにか断崖を登つてきた。

「姫、我が人権護民局が貴女の人権を守ります、

矯正収容所には決して送らせません

「彼女を、エリカをどうか頼みます」

「お任せください、曹長」

マリヤとエリカは、互いの腕で相手をかばいながら、頭を下げる。頭を下げる。頭を下げる。

魔導の姫は、マリヤが死体を見破られた理由を知つて相当お怒りの様子です

マリヤは警察病院のベッドで寝ていた。

可動式のベッドの上、上半身を起きあがらせて、リモコンでテレビのチャンネルをつぎからつぎへと変えていく。どこのチャンネルでも先日の魔導の姫による第一級アーテルハイド暴走事件をとりあげている。

幸いにも死傷者はゼロ、そのアナウンサーの言葉に、マリヤは心から救われた思いがするのだった。

ちなみに国営放送でも、民放各局でも、

R大佐の消息を伝える報道は一切成されてはいない。

マリヤはだから、もう一度自分のリストアでネットテレビにアクセスした。

日本自由放送がまずその第一報を伝えていた。

『速報 R大佐、人権護民局により逮捕される』ネット上はこの話題でもちりきりである。

テレビのチャンネルをまた変えたとき、

その二コースをマリヤは見た。

スタジオではキャスターの古町が毎の臨時特番にまで出しあげられて出演している。

『 はい、とやうわけですね、

今回のG?は空前の払戻金となつた訳ですが、その幸運を手に入れたご本人とですね、

な、な、なーんと電話がつながつてゐんですつ、早速 』

フルマチの声をさえぎり、

その少女は電話口で語りだした。

サウンドオンリーの通話だ。

『 はーい、あたし億万長者になつちゃいましたーつ』

声はデジタル変換されている。

『ええとですね、いまのお気持ちを』

『ねえあたしのMくん待つててねーつ、

あたしたちの結婚人生はバラ色だからねーつ』

そういうて少女は通話を切つてしまつたのだった。

『もしもしつ、もしもーしつ？

……ええつと、はい、つきの一コースいきましょうつ

マミヤはゆつくり、背伸びをした。

こんな世の中でも、軍政下でも人々はたくましく、生きている。

異端審問局は解体の方向へとむかう、

そういうコースも流れた。

すこしずつ、この国が良くなつていつてくれている、彼はそう思つた。やすらぎに満たされた気がした。

ベッドの右側、窓の外の景色に目をやつた。

名も知らぬ広葉樹が敷地に整然と植えられている。昼の陽差しは本格的な真夏の到来を告げつづつあった。左腕の点滴の薬液が効いてきたようだ、

睡魔の訪れを感じた。

ゆつくり、両眼を閉じる。

同時に、個室のスライドドアの開く音がした。

マミヤはなんだか、目を開けるのも億劫だったので、聴覚だけ研ぎ澄ませることにした。

最初に聞こえたのはキャラトルの声である。

「マー・ミヤッ

いつも、元気いっぱいの彼女。

毎日のように病室に遊びにきてくれる。

「寝てるのかなー？」

チハヤの声。

じきやかなマミヤの病室で、常にふたりっきりとなるチャンスを

狙つてるっぽい。

可哀想だけれど、こればっかりはどじよつもな」。

「テレビにつなげなにをやつてゐるのかしらね」

マミヤは、頬のゆるみそくなるのを懸命に押しもどす。彼女の声を聴いただけで、眠気なんぞ吹っ飛んでしまつた、そろそろ皿を開けようかと囁いたそのとき、

キヤロルが、

「それでもわづかんなーい、

マミヤつたら姫の正体がエリカだつてさりげないなんかなー？」

「たぶんねー、パンツァーから丸見えのド貪乳のシルエットでね、

バレたつて思うのー」

「私より貪乳のクセして黙つてなやこよ」

「ひどいのー、姫つ

「姫つたら、捕獲されたあと声はずつーと、

デジタル変声してたんじょ？」

「そうよ声ではバレてないはず、やつぱり、私の態度とか、単純に背格好で見抜いたとか？」

「いやでもさあ、カグラさんの話聞いたけど、確信もつてエリカだつ、つていつたらしいし？

慎重なマミヤがそこまで断言するんなら何か確証があつたはずじやない？」

「やつぱりねー、ド貪乳が

「口出すわよチハヤ？」

「痛いつ痛いのー、やめてよ姫ーつ

「ああつ、やめなつてもつ、ふたりともーつ

マミヤは起きれなくなつてしまつた。

起きたらソッコー、問い合わせられるに決まつてゐる。なぜ、姫の正体をエリカだと、気づいたのか？ と

マミヤはなんとも、そう、救い難いまでに、

途方も無く嫌な感じの汗をかき始めた。

「あ、マリオたら寝汗スッゴいかいでるよ!」「

わたしが拭くのーつ

チハヤの声と同時にマリヤの下半身を覆っていたタオルケットがはぎ取られてしまつた。

エリカとキヤロルが一斉に、

「なにがしたいんじゃあ、テメエはあーつ」

「顔がねー、こんだけ汗かいてるから下はキ

「……」

あんた第三級一慶も起」してひ

「下せぬが試してみるに決か」

ナニヤアレルギーの発現とその予防

キヤロルが笑い声を上げて、

「ビーすんの姫ーつ、チハヤにまかせる？

それとも姫がお拭き遊ばすの？

「のを？」  
「何て？」  
「何を？」

つて? な、なつ、なんの? とかしかねり、それ? 一

「姫一つ、超動搖してんじゃーんつ

ギャロルがハツコウガハハ笑ひをし出した。

「姫わかななーのー? 姫つて案外純ーいねーつ

当然マミヤ先輩の

おちんち

個室の中、取組み会議の始まる配が聞こえてくる。

「アーティスト」

チハヤの半べその声に、エリカとキャロルのわめく声。  
「この子を抹殺しないと私とマリヤの平穏が訪れないわっ、

なんなら、いまこの場でつ

「姫一つ、ストーブツ病院よこいつ、病院つ

三人の喘ぎ声が聞こえてくる。

ぶつくさと文句をいいあう声も。

「もー姫つたらー、

脱ぎたてショーツ渡すべり一キでやるくせにへんなの一つ」

「へんなのはあんたの腐ったアタマの回路のまつよつ

またしても取つ組み合いの音が始まる。

キヤロルの、やめりーつ、と割つて入る声で収まつた。

キヤロルが、落ち着けふたりとも、そう諭している。

なんだかんだいつて、やつぱり彼女はふたりより上級生、一四年次生だけのことはある。

それにしても警察病院で保護観察中のエリカには、いつもの冷笑的な態度とは打つてかわつて、困惑がありありと見てとれた。

マミヤにはそれが手にとるようになわかる。

やつぱり、魔導少女にとって、身バレすると必ずつひとはそれだけ重大な関心事、

ということのようだ。

しかもバレた理由がわからない、ときているのだ。焦るのも無理はない。

たしかに。

そして、マミヤが異常な汗をかくのも、無理は無かつた。

「とにかく、彼の汗は私が拭くわ

エリカの手。

そつ、とハンドタオルで頬を、額を拭いてくれる。

とても気持ちよかつた。

よいのだけれど、起きるタイミングをビツしたものが、マミヤの心は乱れる一方だ。

「マミヤ? ビツしたのかしら、

拭けば拭くほど汗が出てくるわね」「

「ホツペ赤いじやん?  
熱かな?」

アリカとギャロルがそう話す。

ふたつの窓が、かすかに透づ

心がりの貌が、かうかに近づいてくる、氣を感じる。

アリスの心の秘密

そのあいだにあんたらふたり、肩並べて歩いてたんだよね？」「

「そりだけど

が生きるのをいかに策つがねかんじしない  
マツヘイが阿吽の音の? かの間の?

「ミヤとは何をしへたの? その間に、」  
沈黙がおりる。

エリカの汗を拭く手はやまない。

マリヤの冷や汗は一向に止まぬ販配は無かつたけれども。

汗、やまないねー」  
チハヤも心配そうにいつてくる。

「……そういえば、私汗だくだつたつけ？」

マギアパンツァーの電源が切れて空調止まって地獄のように暑か

つ  
たわ

「そんで？」

キャラルが先をつながしてくる。

どしたの姫？

顔笑つてゐナゾ?

わ  
わ  
つ  
つ  
、  
、  
私  
の  
ね  
、  
、

体の、汗の

……匂いがねいい香りがするんですとか、

真顔で超ムツツリなこといつたから、私ドン引きしちゃつて」「ドン引きしたにしては、滅茶苦茶うれしそーじゃん？

「なつ、何いつてんの？ んなわけないじゃないつ

「はいつはいつ、チハヤね、理由がわかつたのーつ

「ふーん、當てにしてないけどいつてごらん？

キヤロルが期待ゼロの声でいった。

「姫はねー、マミヤ先輩にショーツを渡すときねー、シゲミツのアホを瞬殺したレースの後でね、

湯上がり汗だくだったのー、

そのまんま慌ててあのときショーツ履いていたのね、

それでね、マミヤ先輩とのレースでも姫はパンツァー着て汗だくになつたんじよ？

マミヤ先輩嗅覚すー」「ーいつ、

？エリカのぱんつ？の匂いくんかくんかして、

姫のカラダの匂いもくんかくんかしたから同一人物判定したのよねー、

警察犬ロボットになれちゃうよー

エリカの、汗拭く手が止まつた。

キヤロルの息を呑む声がする。

マミヤの心臓はいま、レースですらも禁物である絶対危険領域に達しようとしていた。

爆速の鼓動はやむことを知らず、

冷や汗は脂汗となり、

顔中からダダ漏れラジエータ冷却水ようしき、

溢れ出してきやがつたのである。

「きやー、滝のような汗だわあーっ

キヤロルの笑いをかみ殺した棒読みの言葉に、

「ねーチハヤになんかご褒美くれるー？」

謎解いたんだからなんかちょーだい姫ーっ

チハヤが盛んに催促してくるけれども、くるけれども

エリカ・ヴァンデル・メアのタオルを握る手は、  
ぴたり、マミヤの頬の上で止まつたまんまであつた。

そのうち、ふるふると震えだしてきた。

タオルを思いつきり押ししつけてきて、

「あら、どうしようかしら？」

拭いても拭いてもキリがないわね

もどつてきた、あの、エリカの冷笑的態度がもどつてきた、  
ついに、いま。

そしてマミヤのほっぺたにハンドタオル越し、  
固めた拳をぐりぐりとねじ込んでくる。

「どうしたのかしらね、これでもまだ起きないなんて？」

エリカの声は、強制冷温停止にもつていった

魔導爆燃機関そのものであつた。

「そうね、ワタシもおかしいと思つ」

キヤロルの声は笑い死に一步手前である。

エリカは、マミヤのほっぺたに思いつきり

ドリルの先端みたいに拳をあてがいながら、

「貴方、ストイックそだから死ぬほどの恥を忍んで渡したのよ？」

？アレ？をね、まさか

……ホントに使われるとは思つてもみなかつたわ……

？アレ？をね

？魔女？だ、マミヤは思つた。

エリカ・ヴァンデル・メアは紛れもなく、

男を誘惑して離さない、魔性の女の子だ、

そう思つ彼であつた。

「起きないわねマミヤ曹長つ

キヤロルの笑いながらの掩護射撃。

「ねー姫ー、ご褒美はー?」

「マミヤ曹長の手荷物を調べてくれない?

アレ?見つけて回収したらチハヤにケーキをこへうでもおひつてあげる

「やつたーつ

チハヤのハツスル声に、

マミヤは上半身をびくつかせ飛び上がり、

「無い、こゝには持つてきてはいないんだ

「よつやくお目覚めね、審問官さん?」

「……獵騎兵だ」

「いいえ、これから貴方が異端審問にかけられるのよ、

私たち?魔導少女?の審問にね」

くすり、と笑んだ、魔導の姫は笑んで、

「さあ、白状なさい、

いつたい、何に、

どうやつて使つたのか?

どこまで使つたのか?

「なあエリカ、こんど……そうだ、

こんどふたりで立ち食いソバ屋を探さないか?

もうこまの日本じゃ見つけにくいけど、  
なんとか探してきみとエビ天四つを

「え、ま、か、さ、な、い、でつ」

エリカが真顔でマミヤに顔を近づけてくる。

「さあ答えて頂けるかしら、マミヤ曹長さん?」

「マミヤは、ぐるり、首をめぐらして、

外の広葉樹を眺めやつた。

素晴らしい、快晴の昼下がりであった。

やよ風に木々が揺らめいている。

「…………黙秘権行使します」

「あら？ 愛の異端審問に、黙秘権は通用しないのよ？」

姫は嗤つた、魔導の姫は高らかに哄笑した。

魔導の姫さま、マリヤルタルトアヤラ体を見破られた理由を知り粗鄙な落つてゐる様子です。

あとがき

以上で第一章、終了であります。以下、この章の推敲を重ねております。

つづく第一章なのですけれど、なんとかプロットをまとめて、形にしたいと、そう思つてこの次第です。しばしのあいだ、お待ち頂けましたら、幸いに存じます。

ここまでお読みください、ほんとうにありがとうございました。  
篤く御礼申しあげます。

友絵少尉 2011年11月29日 AM5時49分

## 地獄の退院祝い

退院おめでとう、マニヤ曹長！

でっかい横断幕がマニヤの部屋に飾られている。

キャロルとチハヤのお手製だ。

マニヤの住んでいるここは、

猶騎兵に用意された高倅である。

ワンルームマンション、ひいとは畳——畳分ぐらいか？  
けつこう広々として整理整頓のゆきどどいた部屋だった。

中央、ガラスのロー テーブルに主賓のマニヤが座っている。  
ひどい顔をしていた。

怪我は治っている、だから怪我のせいでは無い。

それはあたかも、

新郎のマニヤと新婦のエリカの結婚式場、  
披露宴の真っ最中に招待客のひとり、

幼馴染みのナホが、

「その結婚に異議ありつ、つと、

まあそう唱えていきなり丸いテーブルから立ちあがり、

新郎と新婦の席めがけて猛烈ダッシュ、

ナホちゃんが？ あたしと逃げてマニヤッ？

キャロルがそういうて、

天井へと高々両腕を捧げ上げてくる。

チハヤは、キャロルの真ん前で、

やつぱり棒読みに、

「ダメだ、許してくれー、ナホー、

つてゆーか、エリカとナホ、ふたりともおれのモノだー

といって、

小芝居をしているふたりが一斉に笑い出した。

マニヤはますます脂汗を滲ませてくる。

「あんたら、そのふぞけた小芝居止めてくれないかしら、

「口したくなるから」

エリカがいった。

極低温の深海の中、

宿敵のダイオウイカを食に殺そつとじてマジックウクジラをながらである。

相手のダイオウイカ、いやいや、ナホはエリカを睨みつけながら、

「なんで？」

サバトの経営者の娘がどーして獵騎兵の退院パーティーにいるのかなっ？」

マジックウクジラはマミヤの左に、ダイオウイカは右に座って、

互いに真正面から思いつきりガンを飛ばしあつている。

「なあみんな？ せつかくのケーキがあることだし、冷めたら不味いし

「マミヤが恐る恐るこうと、

ダイオウイカ、じゃなくつてナホが、

「どこの世界に冷めたら不味いショートケーキがあんのよつ」

「そうよ、主賓はおとなしくケーキでも食べて黙つてなさいよつ」

エリカもマジックウクジラの迫力で一步も引けをとらずに立つてゐる。

「こんだけ主賓のないがしうに立たれるパーティーとゆうのも、めずらしいものである。

「あつ、でもテリバリのーピッシャは冷めるとヤダからもう一つ」と

キヤロルがわつわづく、

三〇センチ以上の「サイズ、チキンとバジルのピッシャからワンカットを手にとつた。

チハヤも小芝居に飽きちやつたのか、うれしそうにケーキに手を伸ばす。

「質問に答えてほしいんだけど、つてか、  
キャロルさんとチハヤさんだっけ？」

マミヤいつの間にこんなに女友達をつべつていたわけ？」

ナホの質問にキャロルが、

「はーいっ、実は、このまえのG? での世界の姫を倒したマミヤ

くんに、

ワタシ憧れちゃつて、

親友のエリカちゃんに頼んで来させてもらいました」

「そー、チハヤもね、なんだかそんな感じなー」

ナホがキャロルとチハヤをうさんくさげに見回してから、

マミヤにむかって、

「あつそ? まあとにかく、

サバトの関係者とは縁を切つてよつ」

「ん? んー、なんとゆうか、あのなナホ、  
仕事上多少のつきあいといつものがあるんだ、  
あくまで仕事上」

ローテーブルの下、

エリカがマツ「ウクジラ必殺アタックぱりにキックをマミヤにむけ見  
舞いしてくる。

「……仕事上? あらう、

私たちそれだけのカンケーだつたつてことね

「いや、ちがうんだ、エリカ……」

こんどはダイオウイカのがぶりより触手アタックっぽく、  
ナホがキックをマミヤに放つ。

「ちよつと、どっちなのよ? ほつきりしなさこよ天下の獵騎兵つ

「う、うん……すまん、ナホ

ナホは例のあのEペーパーを、

「異性交遊申請書? をスクールバッグからとりだしててきた。

「もういいわ、この場でサインしてちょーだい

とつて、マミヤの鼻つ面に突きつけてくる。

「あら、ホントしつこいセンパイだこと、

未だその？私の肉体すべてを蹂躪していください、

とあられも無く媚びへつらう申請書を？」

「だからやめてよつ、そーゆうこい方はーつ」

「私はマミヤと中学のおなじ一三年次生、

別にマミヤと親しくして何がおかしいのかしら？」

「こま、マミヤの」と呼び捨てにしたわね？

マミヤ先輩でしょつ、先輩つていいなさいよ

「だつてナホセンパイ？

私たち仕事上のつきあいもあるから、

ある意味対等のパートナー、つてところかしら

そういうてエリカはマミヤに流し田を送つてくれる。

「色氣づきやがつてー三のガキがつ」

「私まだ一一ですけど？」

「あつそつ？」

じゃあ小学校一一年次にもどればあつ？

深海の化け者対決の長引く中で、

キヤロルはペッシャを、チハヤはショートケーキに夢中になつている。

マミヤが、音を上げてしまつた様子で、

「わよつトイイレに……」

そういうて席を立つ。

逃げ込むようにトイイレの個室に突入した。

エリカの吸いこまれそつなまでに黒い、小宇宙のような双眸が、  
きらり、超新星爆発のよつに煌めいた。

「いまよ、みんなつ」

エリカが立つ。

キヤロル、チハヤも浮き浮きしながら、立ちあがる。

ナホが訳のわからない、

そんな顔になるのを無視して、

「キヤロルはクローゼットを、

チハヤは小物入れつ、

私は大本命のベッド周りを見るわつ」

「ラジヤーツ」

「らじやーなのー」

三人の狩人たちは瞳を爛々と輝かせながら、  
家探しを始めた。

そう、？アレ？を回収するためであった。

「ねえエリカツ、

アレが原形とどめてないくらいの有様だつたらビーすんの？」

キヤロルが意地悪く笑顔をうかべてくる。

「聞きたくないつ、

聞きたくはなーいつ」

Hリカは必死の形相でベッドのマットレスの下に両腕を突つこん  
でいる。

「ちょっと三人とも？

なにしてんのよマミヤの部屋で失礼でしょつ？」

ナホも立ちあがつた。

「キヤロル、説明して差しあげなさいつ」

「はーい、あのねナホちゃん、

マミヤ曹長つたらこのまえ突然エリカのサバトにきたらしいの、  
そんで？獵騎兵の捜査権を行使します？つってね、  
エリカの部屋を家宅捜索したんだよ、

彼女が後で部屋調べたら、

いちばん高価なショーツが一枚だけ無くなつてたんだつてさー

「そーそー、一万八千円のシルク製だよー」

「チハヤ？ 余計なこといわないので手を動かしてつ

「はーい」

チハヤはエリカにドヤされても、

なんだかのんびり、小物入れを引っかきまわしている。

「そんな、ふふつ、あの硬派なマミヤが？

するわけないじやないの」

ナホが余裕の笑みをうかべ出す。

「……まったく、知らぬがブッダ、とはこのことよね」

「知らぬが仏つーのよ、エリカ・ヴァンデル・メー・アツ」

ナホがさらにまくし立てようとしたとき、

トイレから水の流れる音がしてきた。

エリカが、さつ、と右手を挙げて、

「退け<sup>ひ</sup>つ」

三人がすかさず、ガサ入れ？をやめてローテーブルの席に舞いも  
どつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0037y/>

---

駆けろ、姫に賭けろ！

2011年11月30日17時47分発行